

フルフルに転生したので  
で女の子にエロい事す  
る

katate

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めたらフルフルになっていた。

社会という鎖から解放された思春期の男である主人公がすべき事は一つ。女の子にエロい事する。

一つの目標を掲げたヘタレなフルフルは卑劣な手を使い、女の子達をエロスの世界へと陥れる。

# 目次

1 : モンスターな世界へ	1
2 : 女の子頂きます	12
3 : 洞窟で二人の美少女を	21
4 : 猿に襲われる女の子	35
5 : とある兄妹の狩り	56
6 : 妹属性頂きます	65
7 : 漆黒の女の子	76
8 : 暗いまどろみの中に	86
9 : 古龍出現	96
10 : 雪山での激闘	105
11 : いざ砦へ	120
12 : 姉妹二人頂きます	134

13 : 兄再び	149
14 : 妹の秘め事	157
15 : 古龍降臨	165
16 : 運命の黒龍	175
17 : 最終決戦	186
18 : 別れ……	199



# 1：モンスターな世界へ

少年は目を覚ますと暗い洞窟の中に伏していた。そしてすぐに違和感を感じた。視界がおかしい。まるで暗視カメラのように色が混ざった世界が広がっており、自身はそれを確かに景色と認識していたのだ。

なにかがおかしい。そう思っただけで少年は起きあがろうとするが、再び違和感を感じる。腕を動かそうと思っただけでバタバタと重たい羽のような物が広がり、足を動かすとブニブニとした吸盤のような物が地面に引っ付いたのだ。少年の額に一筋の汗が垂れる。否、最早少年の顔には額と呼べる物は無く、まるで肉塊のような醜い物体がそこにはあった。

(な、なんだコレええええええええええ!!!?)

フルフル。少年の姿を形容するならまさにソレであった。モンスターハンターというゲームに登場する酷く特徴的な姿をしたモンスター。少年の姿はそのフルフルという怪物に変貌していたのだ。

暗視カメラのような視界が広がっているのは恐らくフルフルは目が退化している為、

別の何らかの器官で景色を認識しているのだろう。一周回って冷静になった少年はそう無理矢理納得し、小さく唸り声を上げた。

（俺がフルフルって……は？え？何これ、夢？……いや、そういうえば俺トラックに轢かれた記憶が……）

少年はこんな事になってしまった原因を解明する為に必死に記憶を漁る。すると自身がトラックに轢かれた記憶を思い出した。だがおかしい。その記憶は確かに存在するが、もしもそんなのなら自分はずっと死んでいるはずだ。アレは即死の事故であった。ならこうして今自我を保っているのはおかしい。

そこで少年はもう一つある事を思い出す。交通事故で死んだ自分はその後、神様という存在と出会い、可哀想だからという事で好きな所に記憶を保持したまま転生させてあげると言われたのだ。半分夢だと思った少年は調子に乗ってゲームのモンスターハンターの世界に転生したいと言い、結果、このようになった。そう推測される。

（マ、マジで転生したのか……いや、だからってフルフルに転生は無いだろお……神様ああ）

洞窟であるが少年は天に向かって咆哮を上げた。

確かにモンスターハンターの世界には転生させてくれた。だがそこは普通ハンターなどに転生する予定であろう。誰が好きこんでフルフルなどという醜いモンスターに

なりたがるだろうか？否、こんなの最早罰ゲームである。

いくら天に向かつて吠えた所で神様から返事は無い。何とか現実を受け入れるしか無い。幸い暗視の世界を受け入れている事から自身はある程度フルフルの体に拒否反応を示さなかった。これも神様の計らいなのか、それとも人間の適応能力の高さなのか。いずれにせよ少年には好都合の為、この体をフルに活かす事にした。

(とりあえずは頑張つてフルフルとして生きて行くしかないのか……えっと、フルフルはケルビとか食つてたからとりあえず肉さえ食つてれば大丈夫なのか？後壁に張り付いたり電気飛ばしたり出来るんだよな)

モンスターハンターの世界にはたくさん脅威が待っている。一步外の世界へ踏み出せば空には飛竜が、海には海竜が、大地には数えきれない程のモンスター達が腹を空かしている。中には天候を操る程の化け物が存在するのだ。モンスターとして生まれた以上、自身もその弱肉強食の世界で生きて行かなければならない。その為、少年はある程度フルフルの能力をえるようになるかならなかつた。

まず少年は試しに壁に張り付いてみた。フルフルは爪などが独特の形状をしている為、本当に吸盤のように引つ付く事が出来た。実に不思議な体である。そして指を動かす要領で電気を飛ばす事も可能であつた。コツを掴めば放電も簡単に出来た。やはりある程度この体を使えるように適応されているのだと少年は実感した。そして最後に

フルフルはフルフルベビーと呼ばれるフルフルの幼体を生み出す事が出来る。フルフルは雄雌が無い為、男としての自我を持つている少年でも産む事は可能であった。だがやはり気持ち悪い為、それはまたの機会にしようと思首を振る。

(よし、これだけ使えりやある程度は大丈夫だろ……)

フルフルの意外な身体能力の高さと万能性を体感し、何気にフルフルって最強なんじゃね?と少年は思い込んだ。

実際フルフルはゲーム上では中盤に登場するモンスターな上、かなりの強敵として知られている。フルフルの吐き出すブレスは電気を帯びている為、一撃でも喰らえばダメージを負い、更には動けなくなってしまう。そこにフルフルがぬらりぬらりと襲い掛かって来るといふ恐怖は何人ものプレイヤーが味わった。

もちろんちゃんとした対策とある程度の慣れがあれば難なく倒せるモンスターである。だがこの世界は現実、決してゲームでは無い。フルフルとしての能力を最大限にまで発揮すれば何ら問題は無い。例えば上級ハンターが相手でも勝てるのでは無いかと少年は自信を持っていた。のだが……試みに洞窟から出てみた所、その自信は一瞬で砕け散った。

「ゴアアアアアアアアア!!!」

洞窟の外では一頭のリオレウスがもう一頭のリオレウスとの激闘が繰り広げられて



いた。

どちらかがもう片方の縄張りに入り込んだのか、モンスターハンターの看板モンスターでもあるあのリオレウス同士が戦っていたのだ。

空の王者と呼ばれる彼らの戦いはまさにその名にふさわしく、空中を舞いながら戦うその姿は一種の芸術であった。だが飛び散る血と落ちて来る肉片を見る度にこれが非常な現実である事を思い出させる。やがて片方のリオレウスの翼が食いちぎられ、負傷したりオレウスは落下して岩場に激突し、そのまま動かなくなるというあっけない幕切れとなった。

（や、やべ〜……そりやそうだよな。ゲームではヘタレウスとか言ってたけど、実際レウスってずっと空を飛んでれば最強だもんな。この世界なら本当にそれが出来るって事か）

少年が理解した通り、この世界は現実。ゲームのようなプログラムは無い。その為どんなに空を飛んでいても、地面に潜っていても、海に入っても文句の言われようが無いのだ。敵を殺す為ならどんな卑劣な手段でも使う。それが弱肉強食の世界。リオレウスだって勝つ為なら何を言われようとずっと空を飛び続ける。死んだら終わりのだから当然である。

少年も先程まではずっと放電してれば最強じゃね？とか電気プレス吐き続ければ最

強じゃね?とを考えていたのだ。確かにそれは最強であり、スタミナ切れの事を考慮しなければベストな手段とも言える。だが相手だってベストな手段を使ってくるのである。生き残る為にどんな卑怯な手でも使う。弱肉強食の世界では皆が必死なのだ。

(あ、やっぱこれ駄目だわ。絶対勝てない。俺モンスターと遭遇したら一瞬で食われる)フルフルは決して弱くは無いが必ずしも最強のモンスターでは無い。普通の思春期の少年が能力をフル活動した所で、本場のモンスターに勝てる訳がないのだ。それを悟った少年は首をブルブルと振ってこれからどうしたものか、と考えた。

長年夢見ていたモンスターハンターの世界を満喫したいという目的は叶った。一度死んだ身である以上、少年は出来る限りこの世界で充実した人生を送りたかった。だが残酷なこの世界を相手にする以上、死を覚悟する戦いを何度もくぐり抜けなければならぬ。ヘタレな少年がそんな大それた事を出来る訳が無かった。

(どうしたものかなー。このままずっと洞窟暮らしとか嫌なんだけどなー)だからと言ってずっと洞窟に引きこもっている訳にも行かない。洞窟の出入り口付近の陰で身を躰めながら少年は項垂れた。フルフルの長い首は簡単に地面に付く程垂れる。

そんな風に落ち込んでいると、少年の耳にある物音が聞こえて来た。否、フルフルに耳があるかどうか分からないが何らかの器官で付近の存在を感じ取ったのだ。

(ん?……)

モンスターの気配では無い。もっと小さく、少なくとも飛竜の中では小柄なフルフルの自分よりも更に小さい生物の足音であった。もしかしたら自分でも勝てる相手かも知れない。更には捕獲して食べる事が出来るかも知れない。そう思った少年はまだ側に居るであろうリオレウスの事を警戒しながらそろりそろりと歩き出した。

暗視カメラのような視界のせいでイマイチ分かりづらいが、この辺りは森丘と雪原の中間地点のような場所だと少年は此処で初めて知った。だからフルフルである自分が洞窟に居て、リオレウスのような飛竜が縄張りを持つていたのかと勝手に納得する。そして少年は遂に目標の生物を見つけ出した。

「ふー、危なかった……もお、リオレウスが居るなんて聞いてないよー」

草むらの陰に隠れていた小柄な生物、それは人間の女の子であった。

レザー装備と呼ばれるモンスターハンターの世界の初期装備とも呼べる防具を身に纏い、腰にはハンターナイフと言う平凡な片手剣を装備していた。

(ハンターだ! ……うわ凄え、生だと格好良いな。しかも女の子か……頭を装備を付けてないのはおしやれのつもりか?)

不思議な事にその女ハンターは頭装備を付けておらず、茶髪のポニーテールを肩辺りまで伸ばしていた。人体の急所である頭を守らないのはどういうつもりか?と少年は

問いただしたくなかったが、女の子が可愛らしい容姿をしていた為、これはこれで良しと勝手に納得した。おまけに結構巨乳である。少年の顔がフルフルでは無く人間であつたら今頃スケベな顔をしていただろう。否、フルフルでもスケベな顔をしていた。ただでさえ醜い肉塊の顔が更に歪んでいた。

そんな風に気の抜けた事を考えていたせいも、ハンターが近くに居るといふこの状況で少年は油断してしまった。人間と比べれば遥かに大きいフルフルの体が人間の時と同じ要領で動けば周囲にどれだけの影響を及ぼすのかを忘れ、彼は地面を思い切り踏んでしまったのだ。その瞬間、ドスンという大きな足音が辺りに響いた。

(あつ……しまつ……!)

「へ? 何? 嘘ツ! フルフル!? な、何でこんな所に……!?!」

まさかこんな鬱蒼とした森の中でフルフルと出会うとは思わず、女の子はフルフルを見るなり驚いたように飛び上がった。すぐさまハンターナイフを取り出して構えを取る。対して少年はただ慌てるだけで電気ブレスを飛ばすのも威嚇の咆哮を上げるのも忘れていた。

「く、くそう、先手必勝!!」

仕掛けて来ないのが逆に不気味だと思った女の子はカウンター狙いを諦め、自分から仕掛ける事にした。剣を振り上げて咆哮を上げながらフルフルへと飛び掛かる。此処

でようやく少年は正気に戻り、飛び掛かって来た女の子を見るなりほぼ反射的に電気プレスを口から発射した。

偶然が幸いし、真っ直ぐに飛ばしたその電気プレスは馬鹿正直に真っ直ぐ向かって来た女の子に見事直撃した。更にはゼロ距離で喰らった為か、女の子は武器を落とすとその場に崩れ落ち、電気を帯びてビリビリと肩を振るわせた。完全にノックアウトである。

今日、少年は初めての戦闘に偶然ではあるが見事勝利した。

「あっ……ぐっ……いつ……」

（はぁ……はぁ……あ、あつぶね。完全に油断してたわ。電気プレスが外れたら俺斬られてたぞ）

こんな可愛らしい女の子でもやはりハンター。例え初心者ハンターであろうと敵と直面した時は狩人となる。その事を実感した少年は改めて弱肉強食の世界を理解し、此処から先はより慎重に動かなければと反省し直した。そしてノックアウトした女の子をどうしようかと悩み、ゆっくりと近づく。

そもそもモンスター達はハンターを倒した際、どうするのであるのか？ゲームでは猫に運ばれてリスポンというシステムがあるが、当然此処は現実なのでそのような物は無い。幾つかの記述ではハンターを補食するモンスターも居るらしいので、やはり喰う

のであろうか?と少年は推測するが、流石に元人間である以上、そのような行いをする勇氣は無かった。

(さて、どうしたものか……ん?)

始末に悩んだ少年が首を伸ばして女の子を覗き込むと、そこには女の子のあられもない姿があつた。

電気ブレスを受けた際に乱れたのか、胸あたりまではだけた装備。電気を帯びたせいで頬は赤く染り、色っぽい表情をしている。呼吸も荒く、器官が上手く動かないせいで彼女の口からは涎も垂れていた。そして必死に何かを訴えるように瞳に涙を浮かべている。少年は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

(あれ?これひよつとして俺がエロい事するチャンスじゃね……?)

電気ブレスを喰らった事で女の子はしばらくの間動けない。つまりこの間はほぼ無抵抗という事である。ゲームではほんの数秒しか効果は無いが、此処は現実、それに咄嗟に出した出力最大限の電撃の為、相当のダメージを喰らっているはずである。

元の世界では彼女など出来るはずもなく、思春期の少年はちつともエッチな事が出来なかつた。モンスターハンターの世界に転生したと言つたのも半分女の子のハンターとイチャイチャしたかつたのである。その目的もモンスターになつた事で諦めていたが……これは思わぬチャンスの到来なのでは?

少年はもう一度ゴクリと唾を飲み込んだ。

## 2 : 女の子頂きます

長い茶色の髪の毛が女の子の肌にも重なり、レザー装備の胸当て部分が外れて胸の谷間が垣間見える。元の世界に居た頃、彼女が居た経験など無い少年はそれを見ただけで我慢が出来なくなった。

女の子は非常に怯えているようであった。だが電流のせいで抵抗する事が出来ず、必死に何かを訴えるかのような口をモガモガと動かしている。それを良い事に少年はスルリと女の子に近寄った。

(生殖器は……当然無いか。尻尾と羽で弄るしかないな)

当然フルフルの体に生殖器など存在しない。例えあつた所で人間サイズに収まる訳無いので考えるだけ無駄なのだが、やはり少年には僅かながらに残念な気持ちがあつた。だがすぐに切り替えると、少年は口を動かした器用に女の子の装備を引き千切つた。

「いや、あ……！」

女の子は恐怖から悲鳴を上げた。しかしやはり逃げ出す事は出来ない。下着も食い



ちぎられ、女の子の大きな乳房が露となった。母親を除いて初めて見る女性のおっぱいに少年は頬を赤く染めた。当然フルフルの体でそのような変化は起こらないが、それでも激しく興奮した。

息を荒くしながら少年はゆっくりと翼を動かす、女の子の胸を突いた。柔らかい弾力。包み込むような包容感。女の子の胸を触るという初めての経験に少年は増々興奮した。対して女の子はてっきり喰われると思っただけなら体は触つて来るフルフルに違和感を覚えた。それでも死の恐怖は消えず、何とか逃げ出そうと暴れている。

まだ痺れは切れていない。だが油断は出来ない為、少年は女の子の手足を押さえつけながら彼女の口に自分の翼の先っちょを差し込んだ。

「やめっ……んく、ん……んう……」

女の子の温かい口内で舌が辺り、少年はくすぐったい感触を覚える。他人に自分の体を舐められているというシチュエーションに萌え、少年の行動は更にヒートアップしていった。最初はヘタレな事もあって中々躊躇していたが、今ではすっかりスイッチが入っていた。

余っているもう片方の翼で女の子の胸を揉む。サイズの差がある為、中々難しいが少年はゆっくりと優しく翼を動かした。すると痺れている女の子も感じたのか、僅かに頬を赤くした。

「ん、あ……おっぱい、弄らないでエ……」

フルフルの翼から口を離しながら女の子はそう懇願する。だがスイッチが入ってしまった少年はもう途中で止める事など出来なかった。再度女の子の口に翼を挿入し、今度は乱暴に動かし始めた。女の子は涙を流しながら喘ぎ声を上げる。

大分温まって来た頃か、と少年は今度は女の子の乳首を重点的に狙う事にした。何ぶん翼が大きいせいでピンポイントに狙うのは難しいが、押し付けるように乳首を弄る事によつて女の子に鋭い快感を突き付ける。すると女の子は喘ぎ声を上げて激しく肩を振るわせた。

「んあ、あ……そんな、乳首ばかり……」

口では嫌そうに言うが身体はハッキリと感じていた。女の子の満更では無いのか快感に喜ぶように頬を染めている。弄られ続けて女の子のピンク色の乳首もピンと突起し始め、増々女の子を感じるようになった。それを狙ったかのように少年は更に激しく翼を動かすようになる。だが突如として少年はその動きを止めた。

「……へ？」

突然胸弄りを止められた事に女の子はポカンとした表情をした。やはり何処か快感を喜んでいる節があつたのか、女の子の瞳には戸惑いの色があつた。

少年はその反応を見て笑みを浮かべる。突然フルフルの口が気味悪く引き攣つただ

けで喜びを表現しているようには見えない。だが少年は代わりに喜ぶように身体を振るわせた。

いよいよ少年は女の子のズボンを脱がし始めた。脱がすと言ってもやはりそんな器用な事は出来ない為、半ば破り捨てるように無理矢理脱がせた。まだ毛も生えていない女の子の女性器が姿を現す。とうとう全部の衣服を脱がされた女の子恥ずかしそうに顔を真っ赤にし、頬から涙を垂らせた。

「な、何をするつもり……?」

痺れの効果が薄れたのか、女の子は大分口を動かせるようになっていた。だがそれでも身体全体を動かす事は出来ないらしく、相変わらず抵抗しようと必死に身体を振るわせている。そんな女の子を見下ろしながら、少年は自分の下半身に付いている尾に神経を集中させ、それを女の子に突き付けた。それを見た瞬間、女の子は何かを察したように悲鳴を上げた。

「え、嘘……や、やめて! それだけは……ああ!」

嫌がる女の子を拘束しながら少年は下半身を捻るように動かし、尻尾を伸ばすと女の子のアソコに挿入した。グニユリと柔らかい音が響き、尻尾は口内の時のように温かさに包み込まれる。

「んあ、いやあ! 抜いて……大き、あつ……んあ!」

やはりいくら尻尾と言えど人間には大き過ぎる為、女の子は痛そうに悲鳴を上げた。だがモンスターの方に生身の人間が、ましてや幼い女の子が対抗出来る訳が無かった。少年はまずゆっくりと尻尾を上下に動かした。女性器からグチョグチョと水滴が足れる音がし、女の子の口からは尻尾を動かす度に可愛らしい声が漏れた。

「はあ、駄目……もう、これ以上は……あん！ 本当に、んう！ ……いつちやう!!」

段々と上下運動を激しくし、女性器からは愛液が漏れ始めていた。又チャ又チャと液体が絡み、いやらしい音が響く。女の子は汗を掻きながら必死に抵抗の声を上げ、フルフルの身体から離れようとした。だがもう体力の限界か、女の子は激しく肩を振るわせ、悲鳴を上げた。

「んああああああああ……ッ!!」

可愛らしく小刻みに肩を振るわせ、女の子は絶頂した。イク瞬間に少年は尻尾を引き抜き、辺りに大量の愛液が降り掛かった。

呼吸を荒くしながらしばらくの間震えていた後、女の子は眠りに付く様に静かに瞳を閉じた。やはりモンスターとの行為は体力の消耗が激しかったのか、疲れきってしまったように女の子は動かなくなった。

（や、やっちまった……）

対して少年も初めてやった行為であった為、疲れた様に首を垂らした。何よりも苦勞

したのは女の子を傷つけないよう、細心の注意を払いながら翼と尻尾を動かした事であつた。

眠ってしまった女の子を見つめながら少年はそつと女の子から離れた。別にこれ以上何かするつもりは無い。このまま捕まえて食べたりするという鬼畜な事をする度胸を少年は持つていないし、更に襲うなどのガッツ心も少年は持ち合わせていなかった。結局はヘタレな為、一度やった以上少年はこれ以上何かをする気にはなれなかつたのだ。

(と、とりあえず逃げるか……またモンスターに遭遇したら不味いし。あ、でもこの子どうしよう……?)

突発的な行動で我慢出来なかつたと言え、こんな森の中で女の子を襲うのは実際は色々トリスクがあつた。そもそもついさつきまで辺りではレウス達が戦っていたのだ。そんな凶悪なモンスター達が徘徊する中でこんな事をしているのは危険過ぎる。それにこの女の子も一人だつたとは限らない。もしかしたら仲間のハンターが側に居た可能性もあつたのだ。

少年はその事を考慮し、すぐにこの場から逃げ出そうと考えた。だが眠っている女の子の事を思い出し、そのまま放っておく訳にも行かず困つた様に唸り声を上げた。

結局放置は出来ず少年は女の子を木の上に寝かせておく事にした。これならモンス

ターに襲われる心配は無いし、通りかかったハンター仲間か誰かが見つけてくれる。ちよつと雑な処置かも知れないが、これしか方法が思いつかなかつた少年はこれで良しとする事にした。

その後、女の子は無事ハンター仲間に発見され、街へと戻る事となつた。その際に当然女の子はギルド職員から何があつたのか質問された。女の子は恥ずかしそうに顔を俯かせながら正直に自分の身に起きた事を伝え、襲つて来たフルフルの事を教えた。

補食する訳でも無く、女の子を性的な意味で襲うフルフル。モンスターならそのような本能に駆られて人間を襲うという事例は過去に多くは無いが存在した。だがフルフルとなると話は別である。交尾を必要としない雄雌同体であるフルフルが何故人間を襲うような事をするのか？ 生態に解明されていない部分が多く存在するフルフルである以上、ハンターズギルドとして見過ごせない物であつた。結果、ギルドはこの特殊フルフルの調査依頼を出す事となつた。

「クエスト内容、フルフルの捕獲。最近森丘付近で発見された特殊な習性を持つフルフルの捕獲依頼です。依頼を受ける際、女性ハンターはくれぐれも注意すること? ……との事です」

新しく入つたクエストを受付嬢はその場に居るハンター達に説明した。そして後述された注意事項も読み上げ、受付嬢は首を傾げる。同時に聞いていたハンター達も首を

傾げた。

何故女性ハンターに限って注意をしなければならないのか？そのモンスターがよっぽど危険なのであろうか？だとすれば例え男性ハンターでも同じである。それとも何か別の意味があるのか？ハンター達はそれぞれ疑問を口にした。

「えー何それー。変なクエストー」

「でも凄い報酬金良いよ。何で？たかがフルフルの捕獲じゃん」

そのクエストを聞いてやたら報酬金が良い事に気が付いた女性ハンター達は興味ありに掲示板に貼られているその依頼書を見た。ある程度実力があるハンターならばフルフルを倒す程度どうという事は無い。更に捕獲ともなればなお簡単な話だ。だといふのに依頼書に書かれている報酬金はやたらと高かった。これに惹かれた女性ハンター達は早速このクエストを受ける事にした。

「私やつてみよー。フルフルくらい楽勝だし。もーらい」

「あ、アタシにもやらせてよ」

「私も私もー」

クエストは四人まで受ける事が出来る為、早速我先にと群がり始めた。結局最初にクエストを手にとった女性ハンターの仲間達でクエストに行く事になり、女性ハンターは意気揚々と森丘へと向かった。

ハンター達の誰も知らない。実はそのフルフルは電撃を巧みに活かし、やたらと痺れを狙って来る卑怯な性格をしている事を。女性ハンター達は知らない。実はそのフルフルは相当なスケベで、女の子を見るなり隙を狙って襲って来る事を。

後日、フルフル捕獲を受注したハンター達はボロボロの姿で戻って来る事となった。更には女性ハンターだけ何故か裸でビクビクと肩を振るわせた。

聞いた話によるとフルフルは岩陰などに引っ付いて隠れていたらしく。エリアを散策中だったハンター達を一人一人電気プレスで痺れさせた後、女性ハンターだけ捕まえて犯したらしい。

事の顛末を聞いた瞬間、女性ハンター達は全員顔を蒼くした。モンスターに喰われるのでは無く、モンスターに犯されるという最大の屈辱。更にはモンスターの中でも一番気持ち悪い見た目をしているフルフルに襲われるという恐ろしさ。女性ならば誰もが恐怖を覚えるものであった。

捕獲に向かったハンター達が振り返りにあった事からギルド職員はこのフルフルが通常の個体よりも強い個体であると推測し、対象に識別名称を与える事とした。

“色欲のフルフル”。そう名付けられたフルフルは今も森丘と雪原の中間地点を根城とし、やって来る女性ハンター達を襲っている。それからギルドでは女性ハンター達がそのフルフルの名を聞いた瞬間、誰もが顔を蒼くさせるようになった。



### 3：洞窟で二人の美少女を

鬱蒼と木々が生い茂っている森の中で二人の女性ハンターが辺りを警戒しながら歩いていた。一人はキリン装備を着た銀髪の子。綺麗な青い瞳に露出の多い装備の為、ただでさえ大きな胸がより強調されている。もう一人はナルガ装備を着た長い黒髪の女の子。銀髪の子とは対照的に大人しそうな雰囲気をしており、細身でスレンダーな体型をしている。そんな二人はどういう訳か、ギスギスとした雰囲気を出しながら歩いていた。

「もー、何であんたなんかと一緒にクエやんなきゃいけないのよ」

「……知らない」

キリン装備の子はそう言って不満を漏らした。それを聞いてもナルガ装備の子は大きな反応も見せず、ただ静かに返事をするだけで何か不満を言う様な事はしなかった。だがそれでも態度は完全に無視に徹しており、キリン装備の子と同じ様に今自分が受けているクエストに不満を持っているようであった。

何故二人がこんな険悪なムードを出しているかと言うと、実は二人はライバル同士だ

からである。では何故そんな二人が一緒にクエストを受けているのかと言うと、ギルド職員から直々にクエストを依頼されたからである。ハンターとして腕利きである二人は今ギルドが抱えている問題を解決する為、協力してこのクエストを受ける羽目となったのだ。

「これも全部『色欲のフルフル』とか言う奴のせいよ。女の子を襲うなんて最悪。見つけたら絶対に討伐してやるんだから」

今回の目標である特殊個体のフルフルの捕獲。最近噂になっていいるフルフルの事を口にしながらキリン装備の子は拳を握りしめた。

「……あんたじゃ無理」

「何ですってえ!?!」

キリン装備の子の意気込みに対してナルガ装備の子は冷めた態度で返した。キリン装備の子はそれを聞いて顔を真っ赤にしてナルガ装備の子を睨みつける。

今回二人が依頼された『色欲のフルフル』の捕獲。このフルフルは最近発見されるようになった個体で、特別強かったり生態系を狂わすような事はしないのだが、問題はその習性にあった。

どういう訳かこのフルフルは女性ハンターに限って犯す習性があり、被害に遭った女性ハンターは数多く存在した。時には旅商人や調査隊が襲われる事例もあり、女性達に

とつてこのフルフルは恐怖の対象以外なものでも無かった。

更にこのフルフルは厄介な事に頭が回り、壁に引っ付いて物陰に隠れたり、遠くから無数の電流を飛ばしたりとズル賢い攻撃ばかりして来る。その為、例え腕利きのハンターでも隙を突かれて拘束される事があり、ギルドはこのモンスターに手を焼いていた。そこで今回は今巷で有名な腕利きの二人の女性ハンターに依頼される事となったのだ。

「なんか……やけに肌寒いわね」

「……………」

丘の上まで移動した二人は辺りが冷たくなつて来た事を感じた。この辺りだと雪原に続く道も存在する為、丁度中間地点であつた。報告ではこの辺りにフルフルの住処があるとされており、よく被害に遭う場所も此処であつた。そしてキリン装備の子は一つの洞窟を見つけた。丁度岩陰に包まれた具合に隠れており、小柄なモンスターでも出入り出来るくらいの入り口がある。

「この奥……………」

「ええ、この先に明らかに居るわね」

明らかに洞窟からはモンスターが生息している雰囲気は漂っていた。二人は各々の得物である太刀と双剣の柄に手を触れさせながら、ゆっくりと洞窟の中へと足を踏み入

れた。

洞窟の中は意外と明るく、隙間や洞窟の入り口から光りが差し込んでいた。中も広く、快適な空間になっている。だが天井や壁にはボコボコと突起した部分があり、フルフルが隠れるにはベストな地形になっていた。

そしてしばらく歩き続けた後、直後ナルガ装備の子は背後から気配を感じ取った。

「……ッ!?!」

反射的に双剣を取り出し、ナルガ装備の子は背後に刃を振るった。だが斬ったのはモンスターでは無く、雪の塊だった。

「これは……」

ナルガ装備の子が武器を取り出したのを見てキリン装備の子も太刀を構え、背後を振り返った。ナルガ装備の子は自分の背後に感じたのが雪の塊だった事に驚き、戸惑いの声を漏らした。

この雪の塊は確かに自分達の背後にあった。だが最初からあった訳では無い。これは何者かが意図的に自分達の死角に落として来たものなのだ。それに気がついた瞬間、ナルガ装備の子は頭上を見上げた。そしてそこには酷く醜い姿をした化け物が居た。

「……ッ!!」

「フルフル!!」

キリン装備の子も頭上にフルフルが居る事に気がつき、すぐさま打ち上げタル爆弾を取り出そうとポーチに手を伸ばした。だがそれよりも先にフルフルが咆哮を上げ、その動きは止められた。直後に頭上から電流プレスが降り注ぎ、二人はあつという間に痺れで拘束される事となった。

「う……………あ……………ッ！」

「そんな……………モンスターが、ダミーを使うだなんて……………ッ!!」

こんな戦いらしい事を全くせず動きを封じられた事に悔しそうにキリン装備の子は歯を食いしばりながら声を荒げた。

いくら賢いモンスターと言えど、雪の塊を落としてダミーに使うなどと聞いた事が無い。他のモンスターよりも知能が高いとされるドスランポスでさえそのような器用な事は出来ないはずであった。だが目の前に居るフルフルはまるで二人が来る事が分かっていたかの要にこんな作戦を披露した。まさに策士である。

二人が武器を落として動けなくなったのを確認し、フルフルはゆっくりと地面へと降り立った。倒れている二人に近づき、見えるはずも無いのに何かを探るようにまじまじ見つめて来る。

「なに、を……………？」

フルフルの意図が読めず、キリン装備の子は憎たらしそうにフルフルを睨みつけなが

ら疑問の声を上げる。ナルガ装備の子も地面に伏せながら肩を振るわせ、痺れから抜け出そうと必死になっていた。

フルフルはまず二人の武器を足で遠くに弾いた。まるで痺れが切れた時の事を考えているような万が一の動作。やはりこのフルフルには知性があるとキリン装備の子は実感した。そして遂に恐れている事が起こった。フルフルは二人を抱き合わせるように寄せ合うと、二人の装備を脱がせ始めたのだ。

「や、やめて……！」

「……………ッ!!」

当然モンスターが服を脱がせるなどと器用な事は出来ない。だがそれでもフルフルは通常のモンスターでは考えられないくらい繊細な動きで口を動かし、破り捨てる様に二人の装備を剥いだ。

キリン装備の子の豊かな胸が露となる。程よく肉厚のある身体に健康そうな肌色。彼女は万人の人が美少女と呼べるくらいに容姿をしていた。対照的にナルガ装備の子は色白でスレンダーな体型をしている。胸も小さめで、恥ずかしそうに頬を染めていた。

寒い地域でありながらも身体は痺れで高揚し、熱を帯びている。期待している訳でも無いのに二人の心臓の鼓動は高鳴っていた。

「いやあ……モンスターなんか……！」

キリン装備の子は目に涙を浮かべながら抵抗した。しかしモンスターに拘束されたからにはもう逃げ出す事は出来ない。まずフルフルはうるさいキリン装備の子から攻め始めた。大きな乳房を揉み、彼女の肌を舐める様に触った。

痺れている事から感覚が敏感になつてくるキリン装備の子はそれだけでビクリと肩を振るわせた。フルフルの冷たい肉が触れ、必然的に反応してしまう。

「んあ、あッ！……駄目……！」

モンスターに乳房を揉まれ、キリン装備の子は悲鳴を上げた。ただでさえフルフルという気色悪いモンスターに触られている。それだけで最悪な気持ちになった。だがやはり身体だけは反応してしまい、嫌々も感じてしまう。横では感じてる様子はナルガ装備の子が頬を染めながら見つめていた。

少しずつ気分が高まっていた事を確認し、フルフルは標的をキリン装備の子からナルガ装備の子に移した。ずっと弄られている所を間近で見っていた為か、既にナルガ装備の子も出来上がっていた。

翼の先つちよでそつと触れるとナルガ装備の子は怖がるように瞳を瞑った。構わずフルフルは翼を動かし、ナルガ装備の子の小さな胸を突く。

「……………ッ！」

モンスターの前で言葉を語りたく無いのか、元々無口なナルガ装備の子は増々口数を少なくした。しかし少し弄るだけで確かに身体は反応し、フルフルが試しに乳首を弄ってみるとナルガ装備の子は目を見開いて声を上げた。

「ひゃう！……駄目、乳首は……」

乳首が弱いのか、そこを触られた瞬間ナルガ装備の子は明らかに動揺して見せた。その反応を見てフルフルは知ってから知らずか増々乳首を重点的に狙うようになった。翼だけでは無く、尻尾も伸ばして彼女の乳首を突く。次第に突起して来た乳首は可愛らしくピンと立ち、その頃にはナルガ装備の子は耳まで真っ赤になっていた。

胸が弱い事を十分堪能した後、フルフルは二人を密着し合わせた。丁度胸同士が重なり合う様に額同士を付け合わせる。二人はフルフルの一連の行動が理解出来ず、突然嫌いな相手の顔が目の前に現れた事に戸惑った。するとフルフルはそのまま二人の身体を押し付け合わせ、胸同士を擦り合わせた。

「ちよ、や……何すんのよ……！」

「胸……邪魔……！」

既に突起している乳首同士が擦れ合い、二人は嫌いな相手と絡み合っているのにも構わず声を漏らした。痺れているせいでろくに抵抗する事も出来ず、まるで操り人形のように好き放題弄られる。フルフルは笑うように口を歪ませた。



「んあ、こんな……女の子同士でッ……おっぱい擦り付け合うなんて……！」

何度も胸同士を擦れ合わされ、時には叩き合わせるように動かす。その度に乳首同士がぶつかり合い、二人は反応を示し合った。このあまりにも異常過ぎる現状にキリン装備の子は涙を流した。嫌でも抵抗する事が出来ず、されるがままに弄られる。ハンターとして、女としてこれ以上の屈辱は無かった。何よりも恥ずかしかつたのは、こんな状況にも感じてしまっている自分の身体であった。

散々絡み合わせた二人を一度離し、フルフルは体勢を変えた。まるで座り込む様にその場に伏せ、尻尾だけは伸ばす。包み込む様に翼で二人を抱きかかえると、そのまま二人の重なっている場所に尻尾を伸ばした。

「あ、駄目……それだけは……やだ、こいつの前でだなんて……！」

「……………ッ！」

これからされるであろう事を予測し、キリン装備の子は叫び声を上げた。しかししっかりと翼で固定されているせいで抜け出す事は出来ない。現在二人は腕を後ろに縛られるように翼で掴まれ、互いの胸がぶつかる形で密着させられていた。当然下半身の部分も寄せ合っている為、時折触れたりして二人の身体に快感を走らせる。そしてとうとうフルフルはその接着点に尻尾を差し込んだ。

「ひゃああああー！」

まず挿入されたのはナルガ装備の子だった。普段からは想像出来ない様な甲高い声を上げ、入り込んで来た尻尾に拒否反応を示す。しかし既に濡れてしまっている女性器はフルフルの巨大な尻尾を簡単に受け入れ、ヌルヌルと愛液を流した。

「あつ！……や、抜いて！……んう……！」

「ひ、ひ……！」

フルフルの巨大な尻尾を挿入され、尚かつ動かされている光景を間近で見てキリン装備の子は顔を真っ青にさせた。次にそれをさせられるのは自分。そう思うと恐怖だけが身体を包み込んだ。

ナルガ装備の子は何度も尻尾で突かれ、口からはだらし無く涎が垂れ、瞳はまどろみの中に溶け込んでいた。完全に抵抗力を失ったナルガ装備の子はそのままされるがままに犯され続ける。

「ひゃつ、あ……や……イク……イク……ッ!!」

乱暴に突かれ、ナルガ装備の子の女性器からは大量の愛液が漏れ始めていた。そして遂に限界が近くなったのか、涙をボロボロと零しながら叫び声を上げた。

そしてそのタイミングでフルフルはキリン装備の子に翼の先つちよを突き付けた。それをそのまま彼女の女性器に擦るように触り、愛撫を開始した。

「え、やだ。私まで……あッ！　そんな、激しくしたら……すぐイっちゃうって……！」

まさかこのタイミングで自分も犯されると思つてなかつたキリン装備の子は完全不意打ちを食らう。フルフルのブヨブヨとした皮膚で女性器を擦られ、更には奇妙な粘膜までくっ付いた。それが愛液と混ざる事で更に快感が走り、キリン装備の子はだらしなく喘ぎ後を上げた。

「やあ！ お願ひ、許して！ もう、やめッ……ひい！ あん！」

「んあ！ 駄目え、それ以上……本当に！ あッ！ やあ！」

胸同士を重なり合わせながら二人は密着し、悲鳴の声を上げた。既に痺れの効果も薄れて来た二人は互いに手を相手の腰に回し、支え合うように抱き合つた。その間もフルフルからの愛撫と挿入は続き、二人の美少女からは絶え間なく喘ぎ声が続ける。

嫌いな相手と抱き合うという体勢に二人は僅かながらに嫌そうな顔をする。だがフルフルに好きなように犯されるよりは幾分かマシなのか、二人は慰め合うように優しく抱き合つた。そしていよいよ限界が訪れる。フルフルもより一層愛撫と尻尾の動きを早めた。刹那、二人は甲高い絶叫を上げた。

「あッ、ああああああアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

小刻みに肩を振るわせ、舌を出しながら二人は同時に絶頂した。その直後にフルフルも尻尾と翼を離し、二人を地面に降ろした。モンスターによるあまりにも激しい行為に二人ともそのまま眠るように気絶してしまい、動かなくなる。不思議な事に、二人は先

程まではただ抱き合っていただけなのにいつの間にか手を繋いでいた。その手は気絶しても離れる事は無かった。

満足したようにフンと鼻を鳴らす真似をした後、フルフルは気絶している二人を抱えて近くの岩陰に寝かせた。この場所ならモンスターに襲われる心配は無い。そのままフルフルはその場を後にした。

◇

(……不味いなあ)

住処でもあり食事場でもある洞窟から去った後、フルフルこと少年は困ったようにため息を吐いた。現在は人気の無い木々の合間を隠れるようにしながら移動している。少しでも油断すれば腹を空かせたモンスターと遭遇する為、ヘタレな少年は飛んだり目立つ場所を歩いたりしないようにしているのだ。

少年が困っている事、それはつい先程襲った二人の女性ハンターにも関係していた。少年がエロスに目覚めて女の子を襲うようになってからはや一ヶ月、今や少年は特殊个体として「色欲のフルフル」という二つ名まで授かっていた。名前には少々思う所があるがそこには目を瞑る。問題はその二つ名によって自分の存在がハンター達に広

まっってしまったという所にあった。

今週に入って少年がハンターに襲われた回数は二桁を超えていた。どうやらギルド職員達はよつぽど特殊な習性を持つフルフルを捕獲したいらしく、依頼の報酬金を高額にしているらしい。その為、少年を狙うハンターが後を絶たないのだ。何とか少年は隙を狙って電流ブレスや壁に張り付いての逃走などを繰り返してハンター達を退けて来たが、それももう難しくなつて来ている。今回だつて自分の住処を発見されてしまったのだ。

(くそー、俺はただ女の子とイチャイチャしたいだけなのに……)

そのイチャイチャしたいという願望がある事を少年は気づかないフリをする。実際犯すといつても強制的に女の子を絶頂させるだけの為、高度なオナニーと思えば何ら問題は無い。そう勝手に結論付けて少年は自分の行いを正当化する。それにこれまで襲つて来た女の子の内の何人かも喜んで犯される、という事があつた。ごく少数ではあるが。

(このままだと近々ハンター達に取り囲まれるな。何とかして打開策を見つけないと)

徐々に自分の住処もあぶり出されている。この調子では安心して女の子を犯せる場所が無くなつてしまい、挙げ句の果てはハンター達に捕獲される事となつてしまうだろう。少年はそれだけは避けなくてはならなかつた。せつかく社会という鎖から解放さ

れた以上、好き勝手女の子にエロい事がしたい。それが少年の本音であった。一度死んだ以上、これからは自分の我が侘を通したい。その一歩的とも言える感情を抱きながら少年は覚悟を決める。

(よし、エリチエンしよう)

そして思考した結果、少年は場所を移す事にした。場所を移すと言っても単純に縄張りを変える訳では無く、もつと広い大移動を意味していた。大陸を乗り換えるとはまではと言わずとも、自分の存在が知られているこの地域から離れる。それが少年の目標であった。

善は急げ。目的が決まった少年は早速場所を移動する事にする。と言っても目的地がある訳では無く、ひとまずはこの森から抜ける事を目標として早足で歩き出した。少年の冒険は更に壮大になっていく。

## 4：猿に襲われる女の子

引越しという目標を掲げた少年はようやく森から脱出し、新しい大地へと降り立った。と言っても景色は然程変わらず、森丘にそっくりな平原もあれば雪原にそっくりな雪山も存在した。然程新鮮さを感じない旅となった事に少年はちよつとだけガツクリとした。

そして再び森の中を歩いている最中、少年は発作的なあの病気を発祥させた。そう、エロい事がしたい。

女の子を犯すようになってから少年は定期的にこのような症状を発祥させるようになった。癖になってしまったというべきか、依存症に陥ってしまったというべきか、このような状態になると少年は女の子を襲いたくて襲いたくてたまらなくなり、普段よりちよつとだけ荒々しくなるのだ。

(うう……何処かに女の子は居ないのか？エ、エロい事がしたい……)

最早病気と言っても良いのではないかと思う程焦りを見せながら少年は木々に隠れつつ獲物を探した。此処まで来る道中に車輪を引きずった跡や人間の足跡があった事

から既に此処が街の近くである事が推測される。だとすればこの森も狩猟場としてハンター達が居るはずだ、と少年はアタリを付けていたのだ。そしてその妙に鋭くなっている勘は的中し、少年は標的を見つけられる事が出来た。

(居た……！)

丁度木が生えていない一カ所だけ開けた場所に一人の女性ハンターが立っていた。

青色の長い髪を腰辺りまで垂らし、例のごとく頭装備を付けていない可憐な美少女。容姿は文句無く、ちよつとキリつとした目つきをしていてそそのモノがある。腰回りも大分いかかわしい形をしており、胸も十分にある事からまるでモデルのような完璧なスタイルをしていた。強いて言うなれば少し小柄だが、そこがまた女の子らしくて可愛い。そんな美しい女の子は背には大剣を、そしてフルフル装備を身に纏っていた。ナース服風の洒落た装備。あまり防具と言った見た目はしていないが、フルフルの素材を使っている事から少年は若干表情を曇らせた。

だがだからと言って同族の素材を使った装備を着ているという理由で襲うのを止める訳にはいかない。見た所女の子は一人でクエストを受けているのか、倒れている木々を探ったりしてキノコか何かを探しているようであった。所謂絶好のチャンス。少年は音を立てないようにソロリソロリと女の子に近づいた。

(……今だ！)



女の子は完全に油断している。このまま後ろから電流プレスを一発で痺れさせる事が出来るであろう。少年は腹に力を入れ、口から電撃を飛ばした。だが刹那、女の子の姿がその場から消えた。

否、消えたのでは無い。女の子は跳躍したのだ。丁度目の前にあつた木を土台代わりにし、跳躍して電撃を避けるとそのまま少年の背後へと降り立った。

(なッ……!?)

まさか避けられると思っていなかつた少年はあからさまに動揺する。すぐに振り返つて女の子の方を見ようとするが、振り返つた瞬間、眼前から大剣が振り下ろされた。直前の所で少年が顔を引つ込めた事で大剣は地面に突き刺さる。

(おわわわわわ!! あ、危なッ! あつぶな! ちよ、今の避けれなかつたら頭潰れてたぞ!?)

何の躊躇も無い一撃に少年は一瞬死を感じ取り、冷や汗を掻いた。完全に今のは頭にヒットしていた。もしも回避していなければ頭を潰されていたはずであつた。そして頭部を破壊されれば当然生命も終わりを迎える。つまり、今少年は死にかけたのだ。

自分から襲い掛かつたのにも関わらず少年は怒りを覚えながら女の子の事を睨みつける。すると可憐な女の子は相変わらず美しい青色の髪を靡かせながら同じ様にフルフルの事を見た。

「フルフルか……こんな森になんて珍しい」

凜とした声が響く。女の子の声はまるで天使のように美しい声をしていた。声優デビュー出来るんじゃないか？と少年は能天気にかえるがすぐに現実に引き戻される。女の子が突如飛び出し、再び少年に大剣を振り下ろして来たのだ。すぐに後方へ飛ぶ事で少年は回避する。だが僅かに自分の皮膚が切れた事を体感した。

（こ、この女……めっちゃ強ええ！）

明らかに今までのハンターとは違う。自分の不意打ちに気がつく上に、躊躇ない距離を詰める戦法。上級ハンターと言つていい程の実力をその女の子は持っていた。見た感じは大人しそうな風貌をしている癖に、ハンターとしては超一流。厄介さを感じながら少年は女の子から距離を取った。

女の子も距離を取られた事に気がつき、僅かに警戒した。自身の得意な大剣による接近戦に気がつき、それを警戒するように距離を取る。更には最初の不意打ち。女の子はすぐに目の前に居るフルフルに高度な知性がある事に勘づいた。二人の間に重い空気が流れる。やがて少年の方が先に動き出した。

（喰らえ！ 先手必勝!!）

特に何も考えず少年はとりあえず先に攻撃すれば勝てる、という安易な作戦の元女の子に突進した。当然その攻撃は簡単に避けられ、少年は木に激突する。せめて電流ブレ

スでも放っておけば良かったものの、少年は頭に血が登っている事によつていつもの狡猾い作戦が発揮出来なかつた。

「……短気」

（んだとコラア!!）

少年のあんまりな動きに女の子は言葉が通じると知つてか知らずか、挑発するようにそんな事を言つた。だがその間も顔は無表情。冷たい瞳だけが少年の事を見つけていた。

体勢を整えた少年は再度女の子に突進しようとする。だが今度は攻撃が当たる直前に大剣を横に振り下ろされ、少年のブヨブヨの身体に傷が付いた。

（ぎやああああ!! い、いつてえ! ちよ、痛ッ! 痛い痛いコレ）

幸い攻撃が浅かつた為、少年の身体は僅かに斬られただけであつた。だがそれでも痛みに耐性の無い少年は悲鳴を上げる。ろくに動く事も出来ず、そのまま倒れるように地面に伏した。

それを見ながら女の子は警戒心を強めつつ少年に近寄つた。何の躊躇いも無く大剣を振り上げ、冷たい視線を向けたまま口を開く。

「これで、終わり」

まるで一つの作業を淡々とこなすように、フルフルを殺す事にも何の躊躇いも見せる

事なく女の子は大剣を振り下ろす。だがその瞬間、フルフルは身体の芯に一気に力を込め、放電を起こした。辺りに大規模な電流が流れる。警戒していた女の子はすぐさまその場から一步下がるが、首を伸ばしたフルフルの口が彼女を襲った。

「……ッ！」

ビリ、と女の子の肩が引き裂かれた。引き裂かれたと言っても装備が外れただけで、女の子の肩にはちよつと傷が付く程度であった。だが丁度切り裂いた部分がはだけ、女の子の下着が丸見えな状態となつてしまった。此処で初めて女の子は感情的な反応をし、僅かに頬を赤らめると大剣を降ろして空いた片手で自分の胸を抑えた。

（よし、今の内に逃げる……！）

その隙に少年は起きあがると全速力でその場から逃げ出した。フルフルとは思えない程超スピードで狭い木々の間をくぐり抜け、少年はあつという間に見えなくなる。残された女の子はポカンとした表情をしながら小さくため息を吐き、自分の裂かれた肩部分の装備とはだけた胸部分を見下ろした。

「……痛み分け？」

何故かそんな事を呟き、女の子は悔しそうな表情をしながらもまたすぐに無表情に戻り、大剣を背に戻すと胸を抑えたままその場から歩き出した。

一方、女の子からの逃走に成功した少年は良い感じの岩陰を見つけた為、そこに踞る

ように隠れるとぜいぜいと呼吸を荒げていた。

(はあ……はあ……何だあの女は!? 人間じゃねえよ。なにあれ? 大剣ブンブン振り回してさ。むしろあっちの方がモンスターだろ!?)

自分から戦いを挑んでおきながら少年は女の子に対しての文句を次々と出す。確かにあの女の子は小柄でありながら大剣を軽々と振り下ろし、驚異的な身体能力を発揮していた。だがそれは元からハンターに備わっている能力で、そこまで驚きべき事では無い。しかし確かにあの女の子は戦い慣れていた。その点で言えば驚異的な身体能力も長年のハンター生活で備わったものと推測出来る。

初めての強敵との遭遇、そして初めて獲物を逃した事から少年は色々な意味で悔しがつっていた。エロい事をしたという欲求も発散させる事が出来ず、少年はうめき声を上げながら岩に自分の顔を打ち付けた。

少年は誓う。今度あの女の子と会ったら今度こそコテンパンにし、エロい事をする  
と。



フルフルとの戦闘を終えた後、フルフル装備を着た女の子は自身の拠点である街へと

戻っていた。活気のある街に中央にはハンターズギルドが建てられており、そこを中心として辺りに店や施設が建っているという造りの街。まず女の子はクエストを終わらせた事の報告、そしてフルフルに遭遇した事を伝える為にギルドへと向かった。

「……………ただいま」

ギルドに着くなり女の子はそう言う。彼女にとって此処が自分の家のような場所の為、自然とそう言ってしまうのだ。フルフル装備の子が帰って来た事に気がついた受付嬢は彼女が無事だった事を知り、嬉しそうに手を振った。それを見てフルフル装備の子は相変わらずの無表情でカウンターへと向かう。

「お帰りなさい……………って、どうしたんですかその傷!？」

「ん…………フルフルにやられた」

近くに来た事でようやく受付嬢はフルフル装備の子が傷ついている事に気がつき、叫び声を上げた。フルフル装備の子は肩部分の装備が外れ、引き裂かれたように衣服が破れていた。そして丁度胸部分をはだけているようになっていて、女の子は仕方なく手で胸を抑えていた。

「えええ!? フルフルって…………いやでもこの街で最強のハンターって呼ばれてる貴方が傷を負うなんて…………」

受付嬢は信じられなさそうにそう言ってフルフル装備の子を見る。それを聞いたフ

ルフル装備の子は若干恥ずかしそうに頬を掻いた。

実は彼女はこの街では有名なハンターであり、先程受付嬢が言ったようにこの街で最強のハンターと呼ばれているのだ。実際その実力は折り紙付きであり、他のハンターも皆が認める程であった。そんな彼女がフルフルに手傷を負わされたという事態に受付嬢は驚き、周りのハンター達もフルフル装備の子が傷ついている事にざわつき始めた。

「おーい、新しいクエストが届いたよー」

丁度その時、別の受付嬢がクエストが発注された事を報告した。パタパタとハンター達の前に立ち、依頼書を手に取りながらその文面を読み上げる。

「目標は特殊個体のフルフルの捕獲。『色欲のフルフル』って呼ばれてて、元々は西の森丘で発見されたんだって。でも調査隊による報告だところちの方に流れて来たらしいよ。しかもコイツ、女の子を襲うんだって。怖く」

やたら明るい声を上げながら軽い調子で受付嬢はそう説明する。一応は自分も女的身であるのだが、最後の怖いという口振りは明らかに嘘っぽかった。

そしてその話を聞いたハンター達はそれぞれ意見や質問を述べ合っていたが、そんな中一人だけ、フルフル装備を来たあの女の子だけが静かに瞳を揺らしながらその依頼書を遠目で眺めていた。



この辺りのエリアをくまなく探索し、ある程度住処になりそうな洞窟を発見した後、少年は情報収集に徹していた。まずこの森林の近くにはやはり街が存在しており、そこにも当然ハンターズギルドが存在していた。そしてどうやら先日出会った女の子はその街の中でも最強のハンターと謳われているらしく、大剣使いとしてかなりの知名度を持っていた。

（まさかこの前会った女がそんな凄腕ハンターだったなんて……）

洞窟の中で尻尾を天井に張り付けてぶら下がりながら少年は感慨深いようにそう思った。

あの青髪の女の子がかなり強いハンターである事は分かっていた。だがまさか街一番というレベルとは思っても見なかった。少年は自分の身が無事であった事を感謝しつつ、女の子に対して復讐心を抱いた。

（ちくしよく、必ずリベンジしてやるからな）

殆ど自分が悪いのではあるが、少年は勝手に女の子に復讐を誓う。あの後結局症状を取める事が出来ず、少年は手付かずな状態が続いてしまったのだ。自業自得ではあるが、少年はその鬱憤を晴らしたかった。そして標的になったのがあのフルフル装備の女



の子であった。

そうして無い瞳を燃やしながらか熱くなっている少年はふと外からの気配を感じ取った。モンスターの気配。だがこちらに気づいている様子は無い。少年は壁に引っ付きながらそろりそろりと洞窟の入り口から顔を覗かせた。

(……またアイツか)

洞窟の外ではババコンガが居た。簡単に言うとおピンクのでつかい猿。現実に居れば恐ろしい化け物でしか無いそのモンスターが木々の間をくぐり抜けながら歩いていたので。

少年はこのババコンガをうっとおしく思っていた。頭が鶏冠のように独特の毛の形をしているこのババコンガは群れから離れた変わった個体らしく、特定の縄張りを作らずに毎日ふらりふらりとエリアを徘徊しているのだ。

通常モンスター達の間には必ず縄張りが存在する。時には縄張りを持たないモンスターを居るが、それでもある程度の線引きは持っているのだ。複数の食事場を持っている少年でさえ、あらかじめそこが他のモンスターの縄張りでは無い事を確認してからそこをマーキングする。そうしなければモンスター同士で争いが起こってしまうからだ。だがこのババコンガにはその常識が無い。

平気でリオレウスの縄張りに侵入して糞をまき散らして帰ったり、他のモンスター達

の巢で卵を頂戴したりと、とにかく好き勝手やっている。特定の縄張りを持たないため、巢も無いから好きな場所で寝る。時には少年の食事場の洞窟に居座っている事もあった。

他所からやって来た少年が言うべき事では無いのかも知れないが、彼はこのババコンガに不満を持っていた。女の子にエロい事をする際も、このババコンガに見つかったら何をされるか分からないのだ。出来るだけ不安要素は排除しておきたかった。

(あの糞猿めえ……いつも好き勝手しやがって。マナーを弁えろマナーを)

野外で女の子を襲うというあんまりな行為をしている少年は自分の事は棚に上げてそんな事を毒付いた。幸いこの洞窟の存在は知られていないらしく、ババコンガは欠伸をしたり頭を掻いたりと能天気な事をしながら歩き去って行く。

やはりあの猿は油断出来ない。少年は改めてそう思った。ババコンガは猿の為かある程度頭が回る所があり、樹液で毛を固めるなど器用な事も出来る。もしも何らかの形でコンタクトを取る事となったら、少年にとつて良く無い事が起こるかも知れない。そう不安に思った少年は何とかあのババコンガをこの森から追放出来ないかと考えた。

(つて言ってもなあ。戦うなんてのは論外だし、ハンター達に期待するつても難しそうだし……)

へタレな少年は自ら手を下すという事は考えない。対峙した所でへっぴり腰になり、

糞でも投げつけられて終わりだという事を理解していた。その為どうしても他者の力を頼るしか無いのだが、実はこのババコンガも少年と同じ様に卑怯な手を得意としており、討伐に来たハンターを隠れて糞を投げつけたりと妨害し、最後は隙が出来た所を攻撃するという卑劣な手段を用いているのだ。ようするに少年と同じくクズという訳である。

(この前のあの女の子がババコンガを討伐でもしてくれれば楽なんだけど)

挙げ句の果てが自身の復讐相手である青髪の女の子頼み。完全に他力本願であった。結局自分からする事は無いと悟った少年は体力を補給する食事をする為、獲物を探しに洞窟から足を踏み出した。



青々とした木々が無数に生えている大地でフルフル装備の女の子は精神を研ぎ澄ませていた。獲物はすぐ近くに居る。敵では無く獲物だと思っているのは、女の子にとって相手が狩る対象でしか無いからだ。背に背負っている大剣を抜き、構えを取る。その瞬間、木々の間から凶暴な顔をしたティガレックスが飛び掛かって来た。

「……………」

ほんの一瞬の交差。ティガレックスの嘔み付きが女の子に外れた瞬間、彼女はティガレックスの懐に入り込むとその腹に大剣を突き刺した。当然突っ込んだティガレックスは動きを止める事が出来ず、そのまま腹を引き裂かれて行く。そして木に激突したティガレックスは悲鳴を上げて暴れたが、やがて糸が切れるように腕を落として動かなくなつた。

「……ふう、これでクエスト完了……と」

大量の返り血を浴びた女の子は血を拭いながらティガレックスに突き刺さっている大剣を引き抜き、狩りが終了した事を実感した。

今回は森林で暴れているティガレックスの討伐。ソロでクエストを受けた彼女にはいささか厳しい内容ではあったが、それでも問題無くクエストを達成する事が出来た。

ポーチにしまつてあった回復薬を飲みながら女の子は倒れているティガレックスに近づいた。ギルド職員が来る前に剥ぎ取りをしまいかけたのだ。だがその時。

「……………」

ふと辺りから妙な気配を感じ取った。クエストが終わった後でも警戒心を研ぎ澄ませていた女の子はすぐにその気配に気がつき、辺りに目をやった。別段おかしい様子はない。だが確かに近くに何か居る。女の子は背に尻そうとしていた大剣を握り直した。その直後、木々が大きく揺れるとその上からババコンガが振って来た。

「……ババコンガ！」

気配には気づけたがまさか木の上から降って来ると思っていなかった女の子は対応に遅れる。ドスン、と大きな音を立てて着地したババコンガは周りに振動を送り、女の子の動作を僅かに遅らせた。その隙を逃さずに尻を向けて放屁をする。

「……ぐー」

途端にとてつも無い悪臭が辺りに巻き散る。女の子は咄嗟に鼻を抑えた。相手に一歩リードされた事を実感しながら態勢を立て直し、大剣を構える。だが既に攻撃を開始していたババコンガは女の子に突進を喰らわせ、女の子は大きく宙を舞って木に激突した。

「うあ……ッ！」

大したダメージでは無いがダメージはダメージ。女の子は肩を抑えながら何とか立ち上がった。再び向かって来たババコンガの攻撃を避け、すれ違い様に大剣を振るう。途端にババコンガの毛が刈り取られ、皮膚が引き裂かれた。

「ゴアアアアアア!!」

「……お返し」

ババコンガは咆哮を上げて怒りを露にした。みるみる内に顔が真っ赤に染まり、怒り状態へと移行する。女の子は木を支えにするように寄りかかりながらそれを見つめて

いた。

チラリと自分のポーチに目をやる。スタミナを補給するアイテムは無い。回復薬も残り少ない上、この悪臭の中ではその効果を発揮する事が出来ない。既にティガレックスとの戦いで体力が消耗した状態でババコンガと戦うのは厳しいものだった。

もしもこの状況をババコンガが狙ったとしたら？自分とティガレックスが戦っていたのをずっと木の上から長め、勝負が付いたのを確認してから襲って来たのだとしたら？ふと女の子はそんな事を考えた。普通なら有り得ない。モンスターがそこまで高度な作戦を出来る訳が無い。だが先日のフルフルの事を考えると、簡単に否定は出来なかった。

「ブオアアアアア!!」

突如、ババコンガが背を向けるとティガレックスが激突して折れ掛かった木を折り、持ち上げて女の子に投げ飛ばして来た。まさか遠距離攻撃が来ると思っても見なかった女の子はギリギリの所で回避するが、木が衝突した際の突風で吹き飛ばされた。地面に仰向けで倒れ、女の子は苦しうめき声を上げた。そしてババコンガはこの状況を待ち望んでいたかの要に女の子の上に乗掛り、雄叫びを上げた。

「ぐ……………あ……………」

「ブホ、ブホッ！」

完全に拘束され、女の子は身動き一つ取れない状況になった。ババコングはこれで勝利を確信したのか、これ以上ろくに攻撃しようとはせず、まるで弄ぶ様に女の子の大剣を奪い取っていた。愛剣を奪われた事で女の子は完全に戦意を喪失してしまう。最早武器となる物は腰にしまつてある剥ぎ取り用ナイフだけとなつてしまった。

あまり大剣に魅力を持てなかつたのか、大剣を投げ捨てるかとババコングはいよいよ女の子の方に視線を向けた。これから鬺り殺すつもりなのか、挑発するように舌を出して笑っていた。

此処で終わる。女の子がそう思ったその直後、ババコングの背後から電撃が飛んで来た。その電撃は見事ババコングに直撃し、ババコングは腕を上げてビリビリと身体を振るわし、その場に崩れ落ちた。仰向けになつて動けない女の子は何が起きたのか分からない。やがて影が女の子に覆い被さり、ババコングを倒した人物が現れた。それを見た瞬間、女の子はそつと笑みを浮かべた。

「グルル……」

「また……会つたね」

色欲のフルフル。つい先日剣を交えたばかりの敵が、目の前には立っていた。

女の子はまるで自嘲するように笑みを零す。助けてくれた訳では無いのに、結果的に見るとまるでフルフルが自分を助けてくれたような状況が笑えてしまったのだ。そし

て自分は今身動きを取る事が出来ない。足部分にババコンガが覆い被さっている為、抜け出す事が出来なかったのだ。仰向けになりながら女の子はフルフルを見つめた。これからどうなるのか？不思議と女の子の心境は落ち着いていた。



少年はただ獲物を探してただけだった。ただ偶然先日戦ったあのフルフル装備の子がババコンガと戦っているのを見掛け、気になって様子を伺っていただけだったのだ。だがババコンガは卑怯な手ばかり使い、フルフル装備の子を追いつめた。何だか自分と似ている所があるなどやたら冷静に少年は見えていたが、ババコンガが女の子を押し倒した際、自分の中で何かのスイッチが入った。

（女の子を襲って良いのは俺だけじゃボケエ!!）

意味がよく分からない理論を叫びながら少年は電撃を放った。見事それはババコンガに命中し、ババコンガは女の子の足を抑えるようにして倒れ込んだ。女の子は武器を失い、身動きが取れない状態になっている。少年はそれでも先日の事から警戒しつつ女の子に近寄った。

「また……会ったね」



不思議な事に女の子は少年の存在に気がつくと思いを浮かべていた。だがすぐにその笑みも消える。一体何故今笑ったのか？ 出会った当初はやたらと無表情で機械のような印象があつたが、今はまるで自嘲するように笑つていた。その笑みの真意を知らない少年はとりあえず女の子の状況を確認する。

女の子は傷は負つてはいたがそこまで重傷では無さそうだった。どちらかというスタミナの方が切れてしまつていゝらしく、今の彼女は息を荒くしながら頬を赤く染めていた。

何処か色っぽいその姿に少年はムラツとする。簡単に言うと思奮した。

「色欲……だよな？ ギルドから聞いたよ……何でも、女の子を襲うとか」

女の子は少年に言葉が通じるか分からないがとりあえず喋つた。言葉が分かる少年はまさか話し掛けて来るとは思つておらず、興奮していた事を忘れ女の子の顔を見つめた。

女の子は相変わらず冷たい瞳をしていた。美しい容姿をしていながらそんな機械的だと、まるで人形のようにあつた。実際黙つている時は人形にも見える程であつた。思はず少年はうつとりとしてしまい、邪な気持ちをおぼれる。

「良いよ。好きにして……今の私は身動きが取れないし、もう体力も無いから……」

何を思ったのか、女の子は自分が無防備である事を示すように手をヒラヒラとさせ、

そう言った。果たして彼女はこれから自分がされる事を本当に理解しているのだろうか？思わず少年は耳を疑った。耳らしい物はちゃんと無いが、女の子が言った言葉が本当にその通りなのか疑ったのだ。

女の子は相変わらず仰向けのままフルフルの事を見つめていた。本当に拒絶するつもりが無いらしい。どうやら完全にこの状況に諦めがついているようだ。身体は拘束され、自身の体力も残り少ない、その為、ろくに抵抗した事で無駄であろう。その事が凄腕ハンターである彼女は分かっているのだ。だから抵抗しない。

思わず少年は女の子に近づき、首を伸ばした。女の子の身体に接近し、口をヒクヒクと動かしながらそっと衣服に触れる。その時女の子は僅かに肩を振るさせた。やはり何処か怖い所があるのだろうか。だが少年はそれ以上何もしなかった。急に首を引つ込めるとババコンガを足でどかし、女の子を解放する。すると女の子はポカンとした表情をして少年を見上げた。少年は何も語らずに歩き出す。

(悪いけど、ウエルカム系はノーサンキューなんですよねー)

言葉が通じない事は分かっている為、少年はそう心の中で呟くだけで女の子の前から去った。

少年は嫌がる女の子を無理矢理襲う系好きだが、自分から襲われるのを好む子はあまり好きでは無かった。特に今の様な諦め系はもつての他、犯しても何も燃えるシチュ

エーションが無い。その為、少年は襲う事を止めたのだ。

「…………え？」

解放された女の子は襲われなかった事に大変驚いたように目を見開いていた。見えなくなってしまったフルフルの姿を探すが、もう彼は居ない。女の子は静かに立ち上がると、近くに落ちていた大剣を拾い上げ、小さく笑みを零した。

「…………変なの」

本当に変。最初に出会った時もやたら短気で人間味があり、今回は助けてくれるというモンスターとハンターの間では絶対に起こらない事が起こった。女の子はフルフルの事はちよつと困った弟のように感じ、何故自分がそんな事を思ったのか不思議に思いつながらその場から立ち去った。

## 5 : とある兄妹の狩り

「はあ……はあ……」

ガンナー装備で身を固めた黒髪の女の子は息を荒げながら岩場の多い平原を走っていた。一体何故こんな事になってしまったのか？彼女は己の不甲斐なきを呪った。

始まりはほんの些細な事だった。いつものように先輩ハンターと共にモンスターの討伐に向かった彼女は、森林の中で白い悪魔と出会ったのだ。

まず犠牲となったのが頼りになる男の先輩ハンター達であった。そのモンスターはあろう事か木々の上から電撃を飛ばし、先輩ハンター達をノックアウトしていったのだ。

残ったのは普段サポートに徹するガンナーの自分だけであり、彼女は先輩ハンター達を見捨てて一目散に逃げ出した。自分が敵わないと分かっていたのだ。

そしてようやく森を抜けたが、彼女を待っていたのはでこぼことした岩場の多い平原であった。こんな場所では先程の森林と然程変わらない。これ以上走った所で追いつかれる。そう思った彼女は隠れる事にし、丁度良い具合の岩場の影に身体を押し込

だ。

「……………ふう……………ふう……………」

口に手を当てながら女の子は息を殺す。もしもこの場所がバレれば自分の命はもう無い。

しばらくすると近くからそのモンスターの足音が聞こえて来た。ブヨブヨとした皮膚を垂らしながらそのモンスターが辺りの匂いを嗅いでいる動作が影から分かる。女の子は神に祈るように両手を握った。だが神は優しく無いらしい。

次の瞬間、岩の隙間からそのモンスターが首を伸ばして入り込んで来た。あつという間の女の子はその口に飲み込まれ、岩場の影から引きずり出される。そして岩の上にとされた女の子はボウガンも落とし、完全に無防備な状態となってしまった。

「い、いやー やめてー！ やめてええええ!!」

女の子は両手を前に出しながら必死にそう訴えかけた。だが目の前のモンスターがそれに応じてくれる事は無い。

“色欲のフルフル”。女性ハンターだけ好んで犯すその習性から付けられた名。その二つ名を持つフルフルと出会った以上、女性は自身の身体が汚される事を覚悟しなければならなかった。今までその魔の手から逃れる事が出来たのは一人だけ。そして今回のフルフルはそう甘くは無かった。

まず女の子の装備を引き裂いた。いつものように器用に脱がすようには無く、牙を使つて乱暴に破く。その動作はフルフルを知っている人ならいつもと違ふと分かつた。

女の子は引き締まつた肉体が露となる。程良い大きさの胸に、毛の生えた秘部。腰のラインもくつきりとしており、スタイルが良い事が伺える。

「お願い、本当にツ……私、初めてだから……!!」

女の子は知らない。今自分が言っている台詞がよりフルフルを興奮させている事を。むしろ此処で好きにして、と言つた方が効果がある事を。

喜ぶように口を歪ませたフルフルは早速翼の先つちよで女の子の胸を揉んだ。柔らかい感触が病み付きになり、何度も何度も虐めるように揉む。

「んあ、やあー！ そんなおっぱい、ばかり……あー！ 弄らないで……ツ」

初めてという事もあり、胸を揉まれた経験が無い女の子はモンスターに弄れているという状況でも感じてしまう。ビクンビクンと肩を振るわせ、苦しそうに目を瞑つた。今度はフルフルは突く様に彼女の乳首を弄つた。摘む様に羽で挟んだり、時には口をくつ付けて舐める様な仕草をした。それだけで彼女の乳首はピンと突起してしまう。

「は、あ……乳首い……勃つちやうう……」

舌を出して女の子はあられもない姿となつてしまう。完全に出来上がつており、頬も真っ赤に染まつていた。更に続けてフルフルは胸を揉む。乳首も口で弄り、彼女により

快感を味あわせた。

「あー！ 駄目、出る……なんか出ちゃう……！」

そしてとうとう快感が高まったのか、女の子はブルブルと肩を振るわせ始めた。本当に初めての為、絶頂というものがどういふものか分かっておらず、下半身から伝わってくる熱をどう対処すれば良いか分からないようだった。フルフルは胸を揉みながら尻尾を伸ばして軽く彼女の秘部を突いた。その瞬間彼女は絶頂する。

「あああああああああ!!！」

ビクビクと肩を振るわせながら愛液を漏らし、女の子は喘ぎ声を上げた。身体を丸める様にし、可愛らしい仕草を取る。やはり初めてだったようで、女の子は自分の下半身から垂れている愛液を見てきよんとした瞳をしていた。

そしてフルフルの猛攻はまだ終わらない。先日一人の女の子にお預けを喰らい、更に見逃した事もあって彼の我慢は限界に達していたのだ。それを此処で全て発散させる為、初めての経験という女の子をこれでもかというくらい弄んだ。

女の子にお尻をこちらに向けさせ、秘部の尻尾を突き刺す。その瞬間女の子は悲鳴を上げた。

「いやー！ ああああー！ お、大きい……やめて、抜いてえ……！」

嫌がってはいるが彼女の秘部は簡単にソレを受け入れた。一度絶頂した為愛液で中

はヌルヌルになっており、尻尾を離さないようにヒダが張り付いて来ていた。

フルフルは容赦なく尻尾を動かす。その度に女の子は肩を揺らした。

「あん！ あん！ 駄目、止めて……そんな、激しくされらあ……さっき、出たばかりなのに……んあ！」

突く度に女の子の大きな胸が揺れる。口からは涎が垂れ、完全に女の子は快樂の虜となっていた。それを見てフルフルはより一層突くスピードを早めた。それに比例して女の子の喘ぎ声も大きくなって行く。

「あ、駄目！ 出る……やあ！ モンスターに犯されて、出ちゃうう……!!」

そしていよいよ限界が訪れ、女の子は小刻みに腰を震わせ始めた。もう体力の限界も近いらしく、腕はダランと下げられ、殆ど抵抗する気力も無くなっていた。次の瞬間にフルフルは秘部から尻尾を抜き取る。そしてほぼそのタイミングで女の子は絶頂した。

「あああああああああん!!」

可愛らしい喘ぎ声を上げながら女の子は愛液を吹き、フルフルが離れた事でその場にベツタリと倒れ込んだ。お尻をピクピクと震わせ、顔は地面に伏して眠ったように気絶している。

スツキリしたフルフルは小さく息を吐いた後、気絶している女の子を担いで近くの木の上に寝かし、その場を後にした。





(あー、もつたいない事したなあ……)

先程女の子を犯したばかりにも関わらず、フルフルの表情は明るく無かった。何故かと言うと彼の心には先日のフルフル装備の子が引つ掛かっていたからだ。

ババコンガに襲われた際、彼女は身動きが取れない状況へと陥った。その為、少年は後は好き放題出来る状況となったのだ。しかし女の子がそれを受け入れてしまった為、いまいち気分が乗れずに少年は女の子を見逃してしまった。

(くっそお、あのフルフル装備の子、めっちゃ可愛かったのに)

正に千回に一度しか無いようなチャンスを逃した事に少年は後悔した。あの時は気分が乗らなかつたせいで襲えなかつたが、今考えればそれがもつたいないと思う様になったのだ。確かにシチュエーションは燃えなかつたが、フルフル装備の子はかなりの美少女だった。おまけにちよつとつり目でクールな雰囲気をしており、少年の好みにはドストライクだったのだ。故に後悔している。

という訳でフルフルは最近発散出来ずに居た鬱憤を晴らす為、先程の初体験だった女の子を徹底的に犯したのだ。所謂八つ当たりである。最近はこの辺りの地形にも大分

慣れた為、ベテランハンターが相手でも不意打ちで倒し、隠れたハンターを見つける事も少年は出来るようになって来た。ハンターからすれば迷惑極まりない話である。

とりあえずいずれは正々堂々と、ただし不意打ちはするが、フルフル装備の子との決着を考えながら、少年はこれからの事をどうするかと考えた。

ひとまずはこの辺りの住処になりそうな洞窟を幾つか見つけ、そこを食事場にしながら日々を過ごしている。だが前回と同じようにしていればまたハンター達に囲まれるのは明白。その為、少年は何らかの打開策を考えていた。

(ハンター達にバレないようにするにはやつぱり襲ったハンター達を殺すのが一番なんだらうけど……流石になあ……)

一番の方法は証拠隠滅、つまり口封じであるのだが、ヘタレな少年は人を殺す事は愚か、モンスターを手に掛けるのにも躊躇していた。実はフルフルの食料となるケルビを襲うのにも少年は躊躇しており、他のモンスターの残り物を頂いたりして空腹を誤摩化していた。とにかくヘタレな訳である。

(やつぱりエリチエンを繰り返しながらじやないと駄目なのかねえ……)

結局打開策は思いつかず、少年はまたハンター達が頻繁に自分の所に来るようになってたから縄張りを変えれば良い、という結論に至った。それもまた問題の後回しではあったが、その日暮らしを続けている彼は現状さえどうにかなれば良いと楽観的に考えている

為、その事には気づけない。

気持ち切り替えた彼はまだ取まらない鬱憤を晴らす為、次の獲物を見つけに森の中を探索し始めた。



森林に続く平原の前で、一人の男が立っていた。無精髭を生やし、短めにカットした濃い赤髪が特徴的な青年。背には太刀を、そしてリオレウス装備を身に纏い、そこそこの実力があるであろうと伺えるハンターであった。その隣には対照的に小柄で大人しそうな少女が居た。短い白色の髪にリスを連想させるような可愛らしい容姿をしている。彼女はボウガンを腰に装備し、リオレイア装備を身に纏っていた。そして二人共例のごとく頭装備を付けていない。おしやれのつもりなのだろうか？

「いざ行かん！ 色欲のフルフルを狩りに!!」

そして青年の方は何故かきゅぴーんとポーズを取りながら格好を付け、森林を指差してそう宣言した。一体誰に対しての宣言なのかは分からないが、隣に居た少女は青年の態度に困ったようにおどおどと手を動かしていた。

「お兄ちゃん、やつぱり危険だよ。色欲のフルフルだよ？ 何人ものハンターを撃退し

たつて言う……」

「そんな物俺は恐れん！ 何故なら俺は歴戦のハンターだからな……フフ」

いまいち理由になつていないが青年には絶対な自信があるようであった。こうなつたらもう言う事を聞いてくれない事を分かっているのか、少女はそれ以上は何も言おうとはしなかつた。

「さあ行くぞ！ 妹よ！」

「うう……どうなつても知らないよ」

やる気満々の兄対して、妹の方は大分渋つていた。だが先に産まれた兄に逆らう事は出来ず、妹は従順にそれに従つた。ズカズカと周りに事など気にせず青年は森の中へと入つて行く。その後を追いながら、少女は周りに警戒心を配り、慎重に足音を立てない様に森の中へと入つて行つた。

## 6：妹属性頂きます

少年は森の中に入り込んで来た侵入者に気がついていた。丘の上でこっそりと景色を見下ろしていた際、たまたま森の中に入って来る二人のハンターが目に入ったのだ。

飛んで火に入る夏の虫とは何とやら、少年は片方が女の子であった事もバツチリと気づいており、早速襲う準備を始めた。

まずは敵情報について調べる。人数は二人、片方はリオレウス装備の太刀使いで、もう片方はリオレイア装備のガンナーであった。リオレウス装備の方は男の為、少年は興味無かったがもう一人のリオレイア装備の子は中々に可愛い女の子だった。

小柄で歳下を思わせる風貌にパツチリとした瞳、肩辺りまでカットされた短めの白髪、スタイルも良い。胸は幾分か貧相であったが、それはそれでそそのものがあつた。

ゴクリと唾を飲み込み、選別が終わつた少年はどう料理しようかと作戦を練つた。まず普通に襲い掛かつた所で確実に返り討ちにされる。そんな負ける自信が少年にはあつた。故にいつものように卑怯な作戦を駆使する。

まず男の方。彼は太刀使いである事から典型的な接近タイプのハンターだと予想す

る。森の中を探索している間も全く警戒していない事から腕に自信があるのか、出て来たモンスターとの相性など考えず真正面から向かつて行く脳筋なのであろう。ならばいつもの要に痺れで動けなくさせてしまえば良い。問題は女の子の方であった。

ガンナーである為か位置取り等を気にして女の子は青年の後ろを付いて行っている間もしっかりと周りを警戒していた。時には丘の上を見ようとしたりして少年が慌てて隠れる事もあった。

恐らく男の方とは違って慎重派のハンターでガンナーらしく周りに注意を払っているのだろう。男よりもこちらの方が厄介だと思えば、少年は二人を拘束する算段を立てて実行する事とした。

やがて二人は深い森の中まで入って来た。この辺りには少年が住んでる洞窟もある為、地形もちやんと理解している。崖や岩場も多い為、高低差を活かす事が可能な場所であった。そしていよいよ少年は動き出す。

まずは予め用意していた丸太を岩の上から転がした。丸太はごろんごろんと大きく揺れながら二人に向かって行き、二人はギリギリの所で落ちて来た丸太に気がつき、咄嗟に別方向へと避けた。

(……今だ！)

すぐさま電流ブレスを流してまず女の子の方を動けなくさせようとする。ガンナー



少年はすぐにその岩場から移動する。女の子の方からは木々が密集しているせいで射撃には不向きであった。そのまま別の岩場まで移動し、少年は自分の姿を隠した。

「ど、何処に……!?!」

標的を見失った女の子は困ったように辺りを見渡した。前衛で盾となるはずの仲間も居ない為、女の子は酷く不安そうに瞳を揺らしていた。だがすぐに表情を元に戻すと、冷静さを取り戻して静かに辺りに注意を配った。

少年が予想した通り、女の子はソロのガンナーにも慣れていた。すぐに冷静さを取り戻した彼女は辺りの気配から少年の居場所を割当て、少年が隠れていた木々に弾を発射した。

「そー!」

（あだだだだだだだ!）

まさかバレルとは思っていなかった少年はすぐに隠れていた木々から抜け出し、弾に擦りながら猛スピードで移動した。こうなったら作戦も何も無い。少年は翼を飛ばたかせて僅かに上昇するとそのまま女の子達が居る場所まで舞い降りた。着地する際に電撃を飛ばすが、女の子は怯む事無く弾を打ち続けた。その一発が翼に辺り、少年は体勢を崩して木々に激突した。

（おぶべッ!?!）



「くッ……！」

女の子はすぐに回避した事で電流プレスそのものは喰らわなかったが、フルフルという巨体が突っ込んで来た事で風圧を喰らい、地面に倒れ込んでいた。しかしそれでも少年の方がダメージが多く、木々に突っ込んだ彼はうめき声を上げながら身体を起きあがらせた。

(ち、ちつくしよ。こうなったら先手必勝！)

相も変わらず先手必勝作戦。女の子が起きあがる前に少年は首だけ伸ばし、地面に電流プレスを吐いた。拡散型の電流プレスには流石の女の子も避ける事が出来ず、地面に倒れ込んだままそれを喰らってしまった。

「あッ！……ううあ……！」

電流プレスを喰らった女の子はビクビクと肩を震わせながら痺れ、地面にボウガンを落とした。うめき声を上げ、悔しそうにフルフルの事を睨みつけている。

少年は身体に突き刺さった枝を引き抜きながらゆっくりと体勢を整えた。まだ油断は出来ない。少年はジリジリと警戒しながら女の子に近づいた。その間も女の子は恨めしそうに少年の事を見ている。

(あ、危なかつた……くそお。可愛い顔してる癖になんでこんな強いんだよ)

先日のフルフル装備の子と言い、何故可愛い女の子に限って強いのかと少年は意味不

明な不満を述べた。だからと言ってガチムチマッチョの男ハンターが来られても困るだけだが、どっちにしろ自分勝手な少年は自分が楽しみたいという欲求を抱いていただけだった。

女の子が完全に痺れている事を確認し、少年はチラリと青年の方を見た。まだ痺れているのか、時折ビクリと腕を震わせたりして気絶している。これなら邪魔は入らなそうだと思い、少年は早速女の子を頂く事にした。

「さ、触らないで……！ 貴方なんか……！」

試しに翼を伸ばしてみる、女の子は吠えるように歯を立てながらそう言って来た。威嚇しているつもりなのだろうが、子犬が吠えているように見えるだけでちっとも怖くは無かった。

少年はまず服越しに女の子の胸に触れた。やはり小さい。摘めるくらいの大きさしか無い胸であったが、包み込む事によって不思議な温かさを感じた。

「ん……あ……」

突く様に触れたり、やたら強く揉んだりしてみると女の子は分かり易い反応を示した。感じ易い体質なのか、ちよつと触るだけで肩を震わせたりと可愛らしい反応を示してくれる。

何だか楽しくなった少年は遊ぶように女の子の事を弄り、その反応を楽しんだ。

「この……変態」

憎たらしそうに女の子はそう言うが、少年にとつてはそれはご褒美以外のなにものも無かった。歳下風の女の子に言われる事でむしろそそのめるものがある。そうとは知らずに女の子は思いつく限りの罵倒を叫ぶが、どれも可愛らしいものだった。あまり人を馬鹿にする事は得意では無いらしい。

いよいよ少年は女の子の装備に手を付けた。鱗が多い装備の為、脱がせにくかったが何とか破くように鎧部分を外し、衣服を脱がせた。可愛らしい下着と共に女の子の小さな胸が姿を出す。やはり小さい。だが貧乳こそ至高と考える人種も居る為、これはこれだと少年は前向きに考えた。

「や、やあ……返して、私の装備！」

服を脱がされた途端にみるみる内に女の子は顔を真っ赤にし、ポイ捨てされた装備に必死に手を伸ばそうとしながらそう訴えた。だが少年はそれに応じない。小馬鹿にするようにクツクツと下衆な笑い声を上げた。

下着も解き、直接女の子の肌に触れる。女の子はひんやりとしたブヨブヨのフルフルの皮膚が触れ、ビクリと肩を震わせた。散々胸を弄られたせいで熱を帯び、急に冷たい物に触られた事で過剰に反応してしまった。

「はあ、あ……いやあ……こんなの、駄目だつて……」

拒絶はするがいまいち呂律の回らない口調で女の子はそう言う。あまりノーと言えない人間なのか、嫌がりはするがあくまでも穏便な口振りで女の子は少年にやめるように呼びかけた。

何だか妙な罪悪感を抱きつつも少年は手を止めない。ぷにぷにと可愛らしい胸を突き、女の子の貧乳を堪能した。

そしていよいよ女の子のスカートに視線を移した。装備のせいで分かりづらいが同じ要領でそれも脱がし、女の子のパンツにそつと触れる。するとそこは既にグツシヨリと濡れており、それに気づいた瞬間女の子は信じられなさそうに目を見開いた。

「やつ、か、感じて何か……無いから……!」

何故少年に向かって否定するように言うか分からないが、女の子はどうしても自分が感じている事を認めたく無いようであった。けれど少し突く様に翼を動かすと女の子は口から甘い声を漏らし、辛そうに肩を震わせた。

やけに真面目な子だな、と思いつつ少年は楽にさせて上げようとパンツを脱がす。

「あ、駄目え……見ないで……ッ!!」

パンツを脱がすと女の子の毛も生えていないつるつるの秘部が現れた。既にグツシヨリと濡れており、ヒダがヒクヒクと脈打っていた。相当苦しかったらしい。

この子の場合は愛撫かな、と妙な気配りをして少年は翼を伸ばした。女の子の秘部に

触れ、ゆつくりと擦り始める。

「ん、あつ……何で、優しく……やあ、くすぐった……ん！」

さつきとは違つて急に優しい手つきになつた事に疑問を覚えながら女の子は声を漏らす。まるで焦らすように、ゆつくりとフルフルの翼が自身の秘部を擦る。いつもならモンスターに触れられるだけで恐ろしいというのに、この時だけは何故か高揚感を感じていた。女の子は知らず知らず内に快樂に落ちていき、瞳をトロンとさせる。

「やあ、んあ……あん！ ひゃん！ 駄目……ええ、あッ！」

舌を出し、呂律も回らずに女の子は喘ぎ声を上げ続ける。痺れが少し切れて恥ずかしそうに両手で顔を覆いながら彼女は快感に悶え苦しんだ。少年も少しずつ愛撫のスピードを早めて行き、ラストスパートに掛かる。

「や、イク……イクツ……やめてえ!!」

一気に愛撫が強くなつたと比例して女の子の喘ぎ声も甲高くなつて行き、より一層腰を動かすようになった。女の子は気づいていない。自らも快樂に喜ぶように腰を振っている事を。そして彼女はそれを敢えて見ないようにしつかりと瞳を瞑っていた。

そしてとうとう絶頂が近づく。最後に少年がぐつと翼に力を込めると、女の子はビクリと肩を震わせた。

「んあああああああああッ!!」

可愛らしい喘ぎ声を上げながら女の子は絶頂し、ピクピクと震えながら腕を垂らした。完全に気絶してしまったようで、女の子を床に降ろすと少年は自分に掛かった愛液を近くに生えていた草でそつと拭いた。

中々上物だった、と何処かセレブ風に格好付けながら少年は女の子に破れた衣服を被せ、倒れている兄の横に寝かすとその場を後にした。



フルフルが去った後、ものの数秒もしない内に青年は痺れから解放された。そして目が冷めると自分の隣で妹が倒れている事に気がついた。装備はボロボロにされ、破かれたような跡がある。そして奇妙な事に一度破かれた衣服は再度彼女にかぶされていた。すぐさま青年は女の子に近づき、彼女の事を抱きかかえる。

「なっ!! 妹よ、どうした!! 一体何があつたんだ!!」

まるで劇のように大袈裟に青年は呼びかける。まるで自分が王子様のようにあつたが、彼は一応本気で妹の事を心配していた。ガクガクと何度も妹の身体を揺らし、彼女の名を呼ぶ。

「ち、ちくしょう。これも全部色欲の奴が……なんてむごい!」

実際は女の子は眠っているだけなのだが、思い込みが激しい兄はそれに気づかない。女の子が色欲のフルフルの手によって殺されたのだと勘違いし、悲しそうに手で顔を覆いながら泣いている素振りを見せた。すると彼は途端に上空を見上げ、恨めしそうに空を睨みながら口を開いた。

「ゆるさん……ゆるさんぞ、色欲うううううう!!」

森の中に青年のけたたましい咆哮が響き渡った。辺りに木々にとまっていた鳥達も一斉に飛び出し、森がざわついた。青年は瞳を燃やしながら色欲のフルフルへの復讐を近い、腕に力を込めた。

「あの……お兄ちゃん、私死んでないから」

するとあまりに強く握られたせいで痛くて目を覚ました女の子がそう言い、兄に自分は死んでいないと言う。だが青年はもう自分の世界に入り込んでしまったのか、瞳をキラキラと輝かせながら天を見上げていた。

## 7：漆黒の女の子

ギルド本部の会議室では慌ただしい空気が流れていた。それは今話し合っている議題に問題があった。『性欲のフルフル』の処置である。

現在性欲の被害に遭った女性ハンターは二桁を越す勢い。当初は特殊な習性を持つ個体として研究者達は捕獲の依頼をしていたが、あまりにも女性ハンター達の訴えが多い為、野放しには出来ない状態になってしまったのだ。ギルド職員達はやむを得ずフルフルの討伐を命ずる事とした。

「……と言う訳だ。了承してくれるかね？」

長い机を境にしながらギルド職員の老人は目の前に立っているハンターにそう呼びかけた。

これは通常の依頼とは違い、人の手では追えなくなったあまりにも凶暴過ぎるモンスターを討伐する為の依頼。通常の依頼と違って制限時間などは無く、そのモンスターを狩猟するかハンターの方がやられるかまで続く。

机に立っている女性ハンターは静かに頷いた。



漆黒の鎧を身に纏い、頭には黒いアーチが乗っているというおしやれな装備。長い黒みが掛かった赤髪を靡かせ、その女性は自身が持つている剣を握りしめてその場を後にした。

依頼を伝えきつた後、老人は疲れきつたようにため息を吐いた。するとずっと横で控えていた男性の職員が彼に声を掛けた。

「良かったのですか？彼女のようなハンターに依頼して……」

「仕方なからう。確かに多少問題はあるが実力は折り紙付きだ。背に腹は変えられぬ」  
老人は自身のメガネをハンカチで拭きながら自分に言い聞かせるようにそう言った。

ハンター達の間にも変わったハンターが存在する。やたら尻尾をコレクションしたがるハンターや、装備を着ない事に快楽を見出すハンター、中にはタル爆弾を駆使して極限まで自分の体力を減らして狩猟するという頭のおかしいハンターも存在する。彼女も同様、通常とは異なる性質を持ったハンターであった。

そう言ったハンターは大抵ソロでクエストに挑んだりするものだが、時にはこうしてギルドが抱える問題を解決するための代行人となる事もある。

果たしてこの賭けはどうなるか……と老人は頭を悩ませながら成功を祈った。

そして依頼を言い渡された例の漆黒の女の子は、高揚しながら廊下を歩いていった。周りからはただ無表情で歩いているように見えるが、実際は浮き足が立ち、若干スキップ

気味になっていた。本人以外その変化には気づかない。

「……………色欲……………フフッ」

そつと彼女は濃い赤髪を指で弄りながら言葉を零す。誰にも聞こえないくらい小さな声で。

彼女はずつとこの時を待っていた。色欲のフルフルという通常とは違うモンスターと対峙出来る日を。自身が他者から異常と称されるように、奴も異常と呼ばれる。ならばきつと自身が求めている答えを彼は持っているはずだ。知りたい、奴がどのような存在なのかを。漆黒の女の子は瞳を輝かせながら狩りへと向かった。



「ひゃあん……………あん」

「んあ……………ああ……………」

深い森の中で二人の美少女が絡み合っていた。一人はランポス装備を身に纏い、もう片方はゲネポス装備を身に纏っている。だがどちらも鎧部分が外され、胸が見えるようにはだけていた。スカート部分も開かれ、二人の秘部からは大量の愛液が漏れてパンツを汚していた。

「んちゅ、ちゅぷ……」

「ん、んう……ちゅ」

唇同士を押し付け合つて二人は濃厚なキスをする。舌を絡み合わせ、お互いの唾液を混ぜ合わせながらくっ付け合つた。そんな百合な空間を作り出している後ろで怪物が蠢いていた。例のごとく色欲のフルフル、少年である。

既にこの二人の女の子は少年が美味しく頂いた後であり、散々快樂の渦に飲み込まれた二人は中毒になつたのか、少年に犯された後も二人で絡み合っているのだ。

(たまにはこういうのも良いな)

女同士のは前に一度キリン装備の子とナルガ装備の子でやらせた事があつたが、こつやつて自分から絡み合うのも悪く無い。そして鑑賞するだけと言うのも面白い。少年は眼福眼福と言いながらその光景を眺めていた。その直後、少年と女の子達の前に影が舞い降りた。

「へく、本当にこういう事してるんだ……よつぽど変態さんなんだね」

それは漆黒の鎧を身に纏つた女の子であつた。

黒みが掛かつた赤髪を長く垂らし、金の装飾が入つた漆黒の鎧、更に黒いティアラで何処かの王女様のような雰囲気醸し出している。そんな少女の手には赤く輝く片手剣が握られていた。

(なっ……いつの間に!?)

「確かに普通のモンスターならこんな事はしないね。女の子同士を絡み合わせるなんて事は……ねえ? 君」

目の前で絡み合っている女の子達を眺めながら漆黒の女の子は興味深そうにそう言った。そして少年の方に視線を向けると、大層嬉しそうに頬を緩ませた。その容姿もまた美しく、少年は思わずドキリと心臓を鳴らす。だがどうやら目の前の女の子はか나의厄介者であった。

「〃色欲のフルフル〃、めちやくちやにして上げる」

急に瞳の色が変わり、まるで光を失ったかのように濁った瞳になると漆黒の女の子は跳躍した。少年は何処に女の子が行ったのかと辺りを見渡すが、次の瞬間背中にポスンと何かがぶつかかった。それは漆黒の女の子であった。それに気がついた瞬間、背中に鋭い瞳が走った。なんとフルフルの上に乗った女の子が持っていた片手剣で背中を突き刺したのだ。

「ギイアアアアアア!!」

「あははは! 良い声で鳴くじゃん」

いきなりの大ダメージに少年は叫び声を上げる。女の子はそれを聞いても怯む事なく、その悲鳴に喜ぶように笑顔を見せた。すぐに少年は身体をばたつかせて女の子を振

り下ろそうとする。しかし彼女は簡単には剥がれなかった。仕方なしに少年はゴロゴロと地面を転がった。そのまま地形を移動し、木々が多い密集地帯へと転がり落ちて行く。

「ーっ」とー」

(痛え！ うぐああ、背中刺された！ 痛え！)

木々にぶつかった事で漆黒の女の子は振り下ろされるが、難なく地面に着地する。対照的に少年は木々にぶつかった事で痛そうにうめき声を上げ、遅れながらも何とか起きあがった。

女の子と少年は改まって対峙する。こうして見れば漆黒の女の子などただの可愛い少女にしか見えないが、返り血で染まった漆黒の鎧、赤々と輝く剣を見るとそんな気も失せてしまう。少年は僅かに後ろへと下がった。

「逃がさないよ。ゆっくりと遊んであげる」

語尾にハートマークが付きそうな口調で漆黒の女の子はそう言った。禍々しい瞳をしながら浮かべる笑みはととも邪悪で、笑っているのに歪んでいた。その異質さに少年は恐怖を覚える。そして漆黒の女の子は再び姿を消した。

跳躍。先程見ていた為今度は少年は反応出来た。背中に乗ろうとして来る漆黒の女の子を放電で迎え撃つ。だがあろう事か漆黒の女の子は放電を見るなり途中の木の枝

に止まり、急停止した。

何と言う動体視力。電気さえ浴びせれば痺れて動けなくと簡単に考えていた少年だが、この漆黒の女の子がとてつもないハンターである事を実感した。自分では勝てない。ハタレな彼はすぐにそう判断し、今度は逃げる為の算段を立て始めた。

「あははは！ ほらほらあ、もつと楽しませてよお！」

放電を止めた少年を見るなり女の子は宙で一回転して剣を振り回しながら迫って来た。見えないスピードで身体を切り刻まれいき、少年は悲鳴を上げる。そして攻撃を喰らいながらも逃げるようにその場から駆け出した。

漆黒のハンターは明らかに異質であった。ハンターとしても、人間としても。

どうも彼女はこの狩猟を楽しんでいるようで、狩り自体を楽しんでいるというよりは少年との触れ合いを楽しんでいるようだった。少年が苦しみ度に快樂の表情を浮かべる。モンスターとの触れ合いが彼女を喜ばせているのだろうか？

少年は恐ろしさを感じながら木々の間をくぐり抜けて走り続ける。しかし背後からはすぐに漆黒の女の子が迫って来ていた。彼女は再び跳躍すると木を蹴飛ばしながら空中移動し、少年の足を深く切り裂いた。

（ぐえええええ！ 今度は足かよ!?! この女Sか!?!）

「ふふーん。これでもう逃げられないでしょ？」

足から大量の血を吹き出しながら少年はその場に崩れ落ちた。漆黒の女の子は完全に足を奪った事を確認し、浴びた返り血を拭いながら少年に笑いかけた。

明らかに今までのハンターとは違う。戦い方と言い、その性格と言い、彼女はあまりにも異常過ぎた。少年は初めて圧倒的な死を感じる。今までは何とか悪知恵を働かせる事でやって来れたが、この女の子にはそれらが全て通用しなかった。

「うーん、これで終わりつてのもつまらないなあ……」

漆黒の女の子は勝利を確信したのか、少年を軽視するようにそう言い放った。テクテクと陽気な足音を立てながら少年の周りを歩く。もしもここで少年が電流プレスを浴びせれば一発逆転が狙えるかも知れないが、女の子の握っている剣が赤く光っている為、少年は動けずにいた。

そうしてしばらくの間漆黒の女の子は悩むように首を傾げていたが、やがてポンと手を叩いて口を開いた。

「あ、そうだ。いつも女の子達にしてるみたいに私を気持ち良くしてよ」  
(……はっ?)

あつけらかんと女の子はそんな事を言い出した。更に意味の分からない事に武器を降ろし、彼女は何の躊躇いも無く装備を脱ぎ始めた。

呆氣にとられていた少年は一瞬女の子が何を言っているか理解出来ず、呆然と口を開

けていた。

「ほら早く。気持ち良くしてくれたら見逃してあげるから。ただし殺そうとしたら承知しないからね」

（いやいやいやいや……こいつ、何言ってるんだ……？）

鎧を脱ぎ捨て黒いインナーの姿になった女の子はそう警告して自身の腰のベルトに差してあるナイフを指差した。もしも悪さをしようとするればこのナイフで殺すという意味だ。そもそも彼女はモンスターに言葉が通じる訳も無いのに、何を根拠にこんな事を言い出すのであろうか？もしもこれが普通のモンスターとの間に起こったとすれば、とてもではないが女の子も無事では済まないはずだ。少年はますます彼女を理解出来ず、困惑する。しかし彼に拒否権は無かった。それに女の子の容姿にはそそのものがあつた。

インナー越しでもはつきりと分かる出る所は出たいやらしい体型。胸の大きさも文句無く、くつきりと出た鎖骨や綺麗なうなじはマニアックな人を興奮させるものがあつた。とても先程の悪魔のような姿をしてた女の子と同一人物だと思えず、少年は目を疑う。そして女の子は臆する事なく倒れている少年に近づいて来た。

「ほら、私を犯して」

まるで殺し文句のように間近で漆黒女の子はそう言って来る。その瞬間、少年の中で



何かが切れた。我慢出来ずに足が痛い事を我慢しながら漆黒の女の子を押し倒し、彼女の白い肌に触れる。

異質な女の子とヘタレなフルフルのいけないお遊びが今始まる。

## 8：暗いまどろみの中に

“最狂のハンター”と称される漆黒の女の子は狂っている。それはハンターであるならば誰もが知っている事であった。

幼い頃、彼女はハンターである両親二人を一度に失った。原因はクエストを受けている最中に乱入して来たモンスターだった。二人はそのモンスターに喰われてしまったのだ。それから彼女は人の温もりなど知らず、そのモンスターを復讐するという為だけに生きて来た。そしてそんなストイックな生活の果てに女の子は見事に仇のモンスターを討ち、長年の復讐を果たした。しかしそんな彼女に待っていたのは決して平穏では無かった。

復讐を終えた後、彼女は途端に生きる目的を見失った。今までずっと両親の仇を討つ為に鍛え上げて来た技術は全て無意味と化し、これから何をして自分は生きて行けば良いのか分からなくなったのだ。何かを見つけようにも自分がこれまでしてきた事は全てモンスターの狩猟、そして己の肉体を鍛え上げる訓練だけ。そこに生きる目的に出来る物は何一つ無かった。

そうして女の子は困り果て、少しずつ生命力が弱まって行つた。自分が何の為に生きているのか分からず、集会所のカウンターで酒を煽る日々が続く。そんなある日、彼女の元に思わぬ報せが飛んで来た。

古龍の襲来。数ヶ月に一度はある災害のようなもの。人智を超えた力を秘めている龍が人間の街に襲来し、まさしく天の裁きとも言うべき災害を振り下ろす厄日だ。

どうやら今回襲来した古龍は相当手強いらしく、多くのハンターが撃退に向かつて返り討ちにされたらしい。ギルドはすぐに依頼を出し、更なる強力なハンターを募つた。そして丁度生きる希望を見失っていた女の子は、死んでも良いやという軽い気持ちでそのクエストを受けた。

結果だけ言うと、女の子は再び生きる目的を取り戻す事が出来た。

調査隊が戦闘のあつた場所に向かうと、そこには返り血で真っ赤に染まつた漆黒の女の子と、無惨に首を切り裂かれて沈黙している古龍の姿があつた。なんとあの女の子はたった一人で古龍を倒してしまつたのだ。

古龍との戦いの最中で女の子は自身が死に直面している事を感じ、同時に生を感じ取つた。これが生きているという感覚、これこそが生きているという証。希望を見失っていた女の子は、モンスターとの触れ合いの中で生を見出す事が出来た。

こうして彼女は異端のハンターとされ、時には拘束したモンスターを甚振つたり、時

にはモンスター同士を殺し合わせたり、と普通のハンターでは考えつかない事ばかりをするようになった。そこに一種の快楽を見出し、彼女はそれの虜となったのだ。

そして今、彼女はハンター達から異質と呼ばれているフルフルと対峙している。女の子を犯すという通常個体とは違う習性を持つフルフルは漆黒女の子にとって何よりのごちそうだった。

(なんでこうなつたんだ……?)

そんな女の子の過去の事など知らず、少年は女の子を押し倒したものの、何故こんな事になってしまったのかと首を傾げた。自身を倒す一歩手前まで追いつめておきながら、急に武器を下ろして服を脱ぎ、私を犯してと言う。そんなあまりにも異常過ぎる女の子に流石の少年も引いてしまったのだ。

「ねえ、ほら早く。いつもしてるみたいにしてよ」

ふと押し倒されている女の子がいつまで経ってもフルフルが行為を始めない事から少し苛立ったようにそう指摘した。

少年も引き気味にはなったものの、既にスイッチが入っている上に女の子の容姿が美しい事からもう歯止めが効かなくなっていた。翼を広げ、女の子の胸に手を伸ばす。

「ん」

ぽよん、と心地いい弾力。摘むように弄るととても柔らかく、少年はその柔らかさに

病み付きになった。漆黒の女の子は僅かに声を漏らすと、ご機嫌そうに笑みを零す。本当に変わつた子だと思ひながら少年は胸を揉み続けた。

しばらく揉み続けた後、モンスターに触られて嫌悪感は無いのだろうか、と少年は氣になつたのでチラリと漆黒の女の子の方を見た。胸を弄られている彼女は目を瞑りながら快樂に身を任せている。今までのハンターはこんな傾向は一度も無かつた。少年は戸惑いを覚えながら女の子の下半身に翼を伸ばした。

「あ、ん。フフ……本当に変態さんなんだね」

パンツ越しに秘部を触られた女の子からようやく可愛らしい声が流れて来た。こういう所はやはり女つぼいと思いつつも、何故モンスターである自分に笑みを送ってくるのか少年は理解出来なかつた。

いまいちペースを持って行かれがちになりながら少年は翼をそつと動かした。擦り付けるように秘部を弄り、女の子は小さく肩を震わせた。

「ひゃ……あつ……」

少しずつスピードを早めると共に女の子の喘ぎ声の頻度も早くなつて行つた。少年は両方の翼で胸と秘部を同時に弄る。すると増々女の子は激しい反応を見せ、先程までの恐ろしい雰囲気は綺麗サツパリ消えて行つた。

もどかしそうに脚をねじらせ、手持ち無沙汰な手が地面をなぞつた。それを見て少年

はそろそろかと思ひ、彼女のインナーに触れた。すると彼女は突然少年の翼に人差し指を押し付けた。

もう片方の手の人差し指を自身の口に押し当て、漆黒の女の子は少年に止まるようにジェスチャーした。そして一度少年の翼を離れざると、自分から服を脱ぎ始めた。

どうやら雑に破かれるのが嫌だったようで、自分で脱ぐらしい。やはり自分のペースが保てないと少年は複雑な心境になったが、裸になった女の子を見て途端にそんな考えは消えた。

「フフ、モンスターに裸を見られるなんてゾクゾクするね……」

自身の胸を隠すように手をかざしながら女の子はそう言うが、その仕草からはちつとも恥じらいなどは無かった。むしろ少年に裸を見られる事を喜んでいるようで、酷く高揚しているように頬を赤らめていた。

漆黒の女の子の身体はやはり淫乱で、綺麗な形をした胸にピンク色の突き出た乳首、お尻は丁度良い具合に出ており、触りたくてたまらなくなるような体つきをしていた。

さつそく少年は漆黒の女の子に近づいた。今度は制止は掛からず、女の子も近づいて来る彼を受け入れた。冷たい皮膚と温かい肌が合わさり、二人は一つとなる。

少年は抱きつく様に身体をくっ付け合わせながら女の子の胸を翼で揉み、尻尾で身体を舐め回すように触れた。その度に女の子は小刻みに身体を震わせ、酷く興奮している

ようだった。

「んっ……っ、君の皮膚、冷たい……」

フルフルの皮膚が冷たい事に女の子は面白そうにそう言った。少年の首に手を回し、抱きつく様に胸を押当てた。まさか向こうからやって来るとは思っていなかった少年は思わずドキツとする。今までに無いパターンであった。

「ねえ、やっぱり私が良い」

此処で突然漆黒の女の子が妙な事を言い出した。どうやら自分が下という体位が気に入らなかつたらしく、乱暴に少年の身体を押すとそのまま押し倒した。少年も脚を負傷しているせいで抵抗する事が出来ず、女の子が自分の腹の部分に乗っかって来る体勢となった。

「うん、いい眺め。じゃあ続きしよ」

この体勢に満足そうに漆黒の女の子は頷くと少年に笑い掛けた。少年は困惑したように唸り声を上げたがこのままでも一応は問題無いため、構わず続けた。

上に座っている女の子の胸を翼を伸ばして揉み、尻尾を伸ばす事で秘部を弄った。ぐちよりと音を立てて彼女の秘部から愛液が垂れ、女の子は此処いちばん甲高い喘ぎ声を上げた。

「ひゃんっ……ん、あ……凄いい、もう私のアソコどろどろだよ」

ビクンと肩を震わせてそう言うのと女の子は自ら自分の秘部を指で広げ、少年に見せつけるように腰を動かした。ヒクヒクと動いているヒダが丸見えになり、少年は思わず顔を赤くした。その微妙な変化に女の子も気がついたのか、ニヤリと笑みを浮かべて意地悪するように少年の伸びている尻尾をなぞった。

「ねえ、君のこの太いので私のアソコぐちゃぐちゃにしてよ……もう我慢出来ないの」  
愛液で濡れた指を舐めるように口元で弄りながら女の子はそう言った。誘惑じみたその言動に断る事も出来ず、少年は伸ばしていた尻尾を漆黒の女の子の秘部へと挿入した。

「んあああ……入って、来たあ」

下半身から伝わってくる快感に女の子は仰け反りながら声を漏らした。愛おしそうに少年の事を見つめ、自然と腰を振り始める。少年もそのリズムに乗るように尻尾を動かし、女の子の更なる快感を与えた。

「あっ！ はあ……凄い、激しっ！ ……んッ」

尻尾で突かれる度に漆黒の女の子は嬉しそうに喘ぎ声を上げた。時折自分で胸を揉んだり、少年の尻尾を愛おしそうに撫でたりと快楽を自ら受け入れている様子を見せる。秘部からは愛液も漏れ、ぬちゃぬちゃといやらしい音を立てていた。少年の尻尾もそれで濡れ、更に滑らかに女の子の秘部に絡み付いた。



「あん！ もっと、もっとと激しく……私のアソコ、突いてッ……！」

此処で女の子は少年の翼を掴むと更に腰を激しく動かし始めた。まさか更にスピードが上がると思っていなかった少年は漆黒の女の子にペースを持たれ、自身も疲労を感じ始めるようになる。こんな事は今まで一度も無かった。

漆黒の女の子の体力は底なしなのか、時折絶頂した様子を見せても構わず腰を降り続けていた。大量の愛液が漏れ、少年の腹部はそれに汚されていた。女の子は涎を垂らし、まさに快楽の虜のように貪っている。しかし不思議な事にそんな彼女は狂っているようには見えず、むしろ純粋な女の子のような姿をしていた。

「あはー！ 良い、凄い良いよ！ 君」

こんな時にも漆黒の女の子は冷静さを保っており、少年の事を見るとそんな事を投げ掛けて来た。言葉が通じると思っっているのか、時折甘い誘惑らしい言葉も投げ掛けて来る。そしていよいよ体力の方の限界が訪れたのか、女の子は肩を小刻みに震わせると勢い良く腰を振った。

「んああああ……ッ！ あ、ああああああ……!!」

大きくよがって女の子は喘ぎ声を上げ、激しく絶頂した。抜けた尻尾には大量の愛液が絡み付いており、秘部から噴射した愛液が少年の顔をも汚した。倒れるように少年の腹部に伏せた後、女の子はビクビクと肩を震わせていた。これだけ長い間何度も絶頂し

たのだから疲労は残つて当然のはずだった。

「はあ……はあ……」

荒い息を落ち着かせるように女の子は深呼吸する。そして呼吸が落ち着いたら後、女の子はおもむろに顔を上げ、少年の事を見た。その瞳はとても綺麗に輝いていた。

女の子は何処か意地悪そうな顔をしている。品定めをする人間のような、じつくりと観察する目つき。しばらくその視線を向けていた漆黒の女の子だったが、やがて満足そうに一度頷くと口を開いた。

「ん……まあ、合格かな……？」

漆黒の女の子は最後にそんな事を言った。それは恐らく気持ち良くしたら見逃すという件について言っているのだろう。そして少年は見事その条件を達成させる事が出来たのだ。

女の子は本当に楽しそうに満面の笑みを浮かべ、そつと瞳を瞑ると寝息を立て始めた。ようやく解放された事を確認すると少年はどつと疲れが伸び掛り、急に肩が重くなった。流石にこんな激しく、更には長時間の行為には疲れたのか、いつものような達成感もそこまで無かった。ただ少年は何となく思う、この漆黒の女の子は何処か寂しがり屋だと。

行為をしている最中も、漆黒の女の子は何度も愛おしそうにこちらの事を見ていた。

それは本当に愛情なのかどうか分からないが、自身に何らかの感情を向けている事は確かだつた。そこで少年は思う。何故モンスターである自分にそんな目を向けるのか？

モンスターが好きというなら話はそれで終わってしまうが、この漆黒の女の子には何かがあるような気がした。最初に出会った時の異常性、そして自分を犯せという意味不明な言動。それは何処か愛情に飢えている子供のように少年は思えた。

(……なんだつたんだ。この子は)

自分のお腹の上で眠っている女の子は見ながら少年はそんな事を考える。女の子は丁度母親の胸の中で眠る子供のように甘えた体勢を取っていた。

きつとこの子にも色々あるのだろう、と少年は勝手に納得し、衣服を毛布代わりに掛けるとモンスターに襲われなさそうな木の上に寝かし、そつとその場を後にした。

## 9 : 古龍出現

長い美しい青髪と大剣が特徴の小柄な少女、 “最強のハンター” と称される彼女はこの街では皆から尊敬されている歴戦のハンターであった。

そんなとうの本人はいささか天然な所があり、傷を負っても全然気にしなかったり、平気で無数のモンスターが住み着いている洞窟に向かったりと無鉄砲な面があった。ハンターという職業の為仕方が無い点もあるのだが、彼女と長い付き合いの受付嬢や仲間ハンター達などはその彼女の欠点をよく心配していた。

「……………」

そしてそんな彼女は、今日もまたお気に入りフルフル装備を着込んで集会所へとやって来ていた。だがクエストを受ける気配は無く、彼女は長テーブルの椅子に腰掛けると注文した飲み物を時折口にしながらため息を吐いてばかりだった。

彼女はここ最近ずっとこうだった。一応はクエストは受けるのだが前のように頻度は少なく、受けるクエストもそこまで難易度の高くない物ばかりだった。この変化に受付嬢は妙に思い、試しに一度尋ねてみたが彼女からそれらしい答えは帰って来なかつ

た。

「おいおい、『最強のハンター』ともあろうお前さんが一体どうしたんだ?」

「……ん、ちよつとね」

ハンター仲間の一人の男性ハンターが片手に酒を持ちながらフルフル装備の子にそう尋ねた。最近は何りも一緒に誘ってくれない為、男性ハンターも暇していたのだ。そんな訳で勇気を振り絞って尋ねてみた所、女の子は相変わずため息を吐いて何か物思いにふける動作ばかりだった。それを不思議に思った男性ハンターは心当たりのある一つの質問をした。

「まさかお前、男が出来たって訳じゃないよな?」

それはフルフル装備の子に限って最も有り得ない質問であった。思わず周りで聞き耳を立てていたハンター達も吹き出し、カウンターに居た受付嬢も無い無いと手を振っていた。男性ハンターも何故自分がこんな質問をしてしまったのかと恥ずかしそうに頭を掻いていたが、質問をした以上、答えを聞かなければならない。しばらくそうやって待っていた男性ハンターだが、フルフル装備の子からは思わぬ答えが帰って来た。

「……そうだね。恋してるのかも知れないね」

「ハハハ、まさかな。そうだよな、お前に限ってそれは無い……って、ええええええええッ!!?」

まさかの返答に酒を飲もうとしていた男性ハンターは吹き出し、持っていた瓶も床に落とした。周りに居たハンター達も叫び声を上げ、思わずフルフル装備の子の方を見やった。しかしとうの本人は相変わらず上の空で、周りの反応など気にせず飲み物をちびりちびりと口にしていた。

「お、お前それはマジなのか？本気で言ってるのか？お前に好きな男が出来たってお前それ……ええええ？」

男性ハンターは相変わらず信じられなさそうに顔を歪めさせてもう一度フルフル装備の子に尋ね返していた。周りのハンター達も首を振ったり叫び声を上げる者などが居た。

フルフル装備の子がこう思われるのも当然である。彼女は誰よりもハンターらしく、男よりも男らしい立派なハンターだからである。今まで色恋沙汰の話など一度も上がらず、ある男性ハンターが勇気を振り絞って告白しても自分にその気は無い、と一蹴される事件があった。それ以来、彼女は恋愛には興味は無い人なのだ。周囲は思い込むようになっていたのだ。だがそんな女の子には最近気になる相手が居た。ただし、その相手は人間では無いのだが。

少し前、フルフル装備の子はババコンガに襲われるという事件があった。ティガレックスの狩猟の後に行われた事だった為、体力の限界が近かった彼女はババコンガに倒さ

れるという屈辱を味わった。その際、突如現れたフルフルがババコンガを痺れさせ、女の子を救うという信じられない事が起こったのだ。

そのフルフルは特殊個体として“色欲のフルフル”と呼ばれており、フルフル装備の子もこのフルフルとは一度対決した事があった。その際はお互いに傷を負い、痛み分けという形で勝負はお預けとなった。そんな因縁の仲であるのにも関わらず、フルフルは女の子を襲う事なくババコンガを倒して救ったのだ。

この話をフルフル装備の子は一応ギルドに報告したのだが、そんな事は有り得ない。ただの偶然か、別の個体のフルフルだった、と一蹴されてしまった。結局フルフル装備の子はこの話を自分の胸の中にしてしまっておく事にし、少しずつあのフルフルの事を考えるようになっていたのだ。

（あれは間違いなく“色欲”だった。なのに私を助けた……どうして？モンスターが人を助けるなんて事があり得るの？）

テーブルの上に置いてある飲み物を眺めながら女の子は考え事をしていた。

あの日以来、考えるようになった色欲のフルフルについての事。奴は女の子を襲うという特殊な習性を持っていた。少なくとも出会えば必ず襲われる。自身は最初はそれを振り返りにする事で防ぐ事が出来たが、二度目は明らかに向こうの意図で襲って来なかった。それが彼女には気がかりだった。

もう一度会って確かめたい。もしかしたらあのフルフルとは意思疎通が出来るのかも知れない。そう考えるようになったフルフル装備の子はいつしか色欲に対して不思議な感情を抱くようになっていた。自身の感情を表面に出すのを苦手としている彼女は、その感情が何なのかよく理解出来なかったが、それでもフルフルにもう一度会いたいという気持ちだけは確かだった。

「う、ん。まあ……そうだよな。お前さんも年頃だしそう言った話の一つや二つあつても不思議では無いな」

「……二つもあつたら浮気になっちゃうよ?」

動揺していた男性ハンターは冷静になる為に一度咳払いし、そう言つて気持ちを切り替えた。だが天然なフルフル装備の子はその二つという意味を複数の恋愛があるという風に思い込み、相変わらずの天然なツツコミをする。そう言つた所はいつもの彼女の為、男性ハンターはほっと安堵の息を吐いた。

「そういえば、話は変わるんだがさっきギルド職員の連中が妙な話をしてたぜ?」

この話はもうこれ以上したくないのか、男性ハンターはそう言う話題を切り替えた。フルフル装備の子が来る前にギルド職員が話していた話題をたまたま耳にした為、男性ハンターはそれを教える事にする。

「妙な話……?」



「ああ、森林の方でモンスター達が異常に発見されるようになったらしい。こりやあ何かあるぜ」

男性ハンターの話の聞こえとフルフル装備の子は目を細めた。複数のモンスターが同時に発見される。それは普通では有り得ない事だった。モンスター達は縄張りを意識し、お互いのテリトリーには入らないようにする。その為、狩猟場は例外が無い限り必ず一匹しかモンスターは居ないのだ。にも関わらず森林で複数のモンスターが発見された。フルフル装備の子は自身のハンターとしての勘が何かを告げている事に気づいた。

色欲と言い、森林での異常現象と言い、最近は何々とお騒がせな事件が多い。珍しくフルフル装備の子は大きいため息を吐くと、目の前に置いてあった飲み物を一気に飲み干した。



薄く霧が掛かった深い森で四人のハンターが歩いていた。空には暗い雲が覆っており、光は一切届かない。まるで闇の中のような暗い森の中で、ハンター達は依頼の目標である獲物達を探していた。

実は最近この森では頻繁にモンスターの目撃情報が出ており、ギルドはこの突然異常発生したモンスター達を一層する為に依頼を張り出したのだ。大規模になる事が予想されるクエストの為、まずは長年ハンターとして生活しているこの四人組が選ばれる事となった。経験豊富のハンター達の為、例えクエストが失敗しても森で何が起きているのか、どれ程のモンスターが発生しているのかを確かめるのもギルドからの依頼であった。

ハンターの一人が武器を手にした。片手を上げ、仲間合図を送る。それは近くにモンスターが居る無音のサインであった。仲間のハンター達もすぐにそれぞれの武器を構える。そして数秒後、何処からともなく地鳴りが聞こえて来た。

「……来たぞー」

リーダー格であるハンターがそう叫び、全員は一斉に正面を見た。前方の霧の中からドスランポスが現れ、突進するように向かって来る。リーダー格のハンターは構わず武器を振るつたが、おかしな事にそのドスランポスはハンター達に構う事なくその間をすり抜けた。

ハンター達がこの不可解な現象に首を捻っている中、未だに地鳴りは続いていた。そこから更に様々なモンスターが霧の中から現れ、ドスファンゴ、ゲリヨス、バサルモスなど様々なモンスターがハンター達を横切って行った。

いよいよこの現象が異常だと察したリーダー格のハンターは辺りを警戒し始める。このモンスター達はまるで何かから逃げないように走り去って行った。という事は、モンスター達が逃げる要因となった何かが近くにあるという事だった。

警戒心を最大まで強め、リーダー格のハンターを武器を強く握りしめる。その次の瞬間、今までの地鳴りとは比べ物にならないくらい大きく地面が揺れた。

「……………ッ!? なんだ!?!」

「地面が……………揺れて……………ッ!!」

まるで大砲でも打っているかのような耳に響く轟音。ハンターの一人が立っていらなくなりなる程地面が揺れ、次の瞬間、霧の中から巨大な龍の顔が現れた。何処からともなく現れた巨大な龍の顔にハンター達が悲鳴を上げる。かろうじてリーダー格のハンターは武器を構えて対峙したが、その行為はすぐに無駄だと分かった。

続けて現れたのは今まで見て来たどのモンスターとも比べ物にならないくらい大きい背中だった。どれだけの長さを誇る太刀や長槍でもとど来ない程巨大な背中。どんな武器をも通さなそうな固く赤々と尖っている無数の鱗。全てが規格外とも言えるその巨大なモンスターは、ハンター達の前で大きく唸り声を上げた。

「ラオシャンロン……………ッ!!」

リーダー格のハンターはかろうじてそのモンスターの全貌を目にし、それが何者であ

るかを理解した。巨大龍と呼ばれるその名の通り規格外な大きさを誇る古龍、ラオシャ  
ンロンであった。

横切って行ったモンスター達は全てラオシャンロンから逃げる為に走っていたのだ。  
最近森の中で発見されるようになったモンスター達は、全てこれから逃げる為に森を駆  
けていたのだ。それを瞬時に理解したリーダー格のハンターはこれは自分達の手には  
負えないと判断し、仲間達をすぐに撤退させた。背後からは大きく唸り声を上げる巨大  
龍の姿がある。やがて、走り続けるハンター達の目にはその龍が霧の中に隠れて行くよ  
うに映り、小さく安堵の息を吐いた。

## 10：雪山での激闘

冷たい風が吹き荒れる雪山の山頂で二人の女性ハンターが歩いていった。一人はキリン装備の銀髪の女の子。こんな雪荒らしでも露出の多い服を着たままで、ホットドリンは飲んだものの何処か寒そうに腕を振るわせていた。もう一人はナルガ装備の黒髪の女の子。長い髪を揺らしながらその子も寒そうに白い息を吐いていた。

「もー、何でまたあんたとクエ受けなきやいけいのよー」

「……………っちの台詞」

実はこの二人、以前色欲のフルフルに教われた例の二人であった。キリン装備の子は恨めしそうにナルガ装備の子を睨む。だがどうの彼女は気にしていないようにそっぽを向いたまま雪景色を眺めていた。

何故またこの二人が一緒にクエストを受けているかと言うと、今回は単なる偶然であった。キリン装備の子が雪山でのクエストを受ける事にし、たまたま同伴となったのがナルガ装備の子だったのだ。こうやって以前一緒にクエストを受けたハンターとまた一緒にクエストを受ける事が珍しくは無かったが、二人からすればこの偶然は厄介極

まりなかった。

二人はしばらくの間黙って雪の中を歩いた後、使われていないベースキャンプを見つけ、そこで一度休息を取る事にした。壊れたボックスや冷たいベッドを椅子代わりにし、二人は消耗した体力を僅かながらに回復させる。

「そもそもあんたのせいでターゲット見失ったんだからね？足引つ張らないですよ」

「何言ってるの？……そつちこそペイントボール投げ忘れてたじゃん」

「あんただってそうでしょ！」

「私は予め持つて来てないって言った……」

共通の会話も無い為、二人は先程のモンスターとの戦闘の際の反省会を始めた。けれどやはり相性の悪い二人では罪の擦り付け合いになり、途端に口論が始まってしまふ。ナルガ装備の子も無口ではあるが言い返す所はしっかりとしており、沸点が低いキリン装備の子も増々口調を荒っぽくした。

「色欲の時だつてあんたのせいで……」

「アレはそつちが悪い……」

とうとう話は遡り、色欲のフルフルと遭遇した時の話にまで戻る。今更あの頃の話をした所で何か改まる訳でも無いのだが、今の二人は目の前に居るハンターを陥れたりという負の感情しか無かった。

「あんたあの時凄いい気持ち良さそうにしてたじゃない！ モンスターに犯されて喜ぶなんてとんだ変態よね!!」

「なっ……そ、それは……」

此処でキリン装備の子は立ち上がるとナルガ装備の子に指を突き付けながら色欲に襲われた時の事を指摘した。自身の事は棚上げにして指摘するのは流石は自分勝手な性格か。しかし完全に間違っているとも言えない為、ナルガ装備の子は言葉に詰まって目を見開くと、恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「そ、そっちだつて……フルフルに胸を揉まれて喜んでた」

「なっ……あ、あれは……その……!」

ナルガ装備の子もぎゅつと拳を握りしめると立ち上がり、勇気を振り絞ってキリン装備の子に反論した。その反論を聞いた瞬間キリン装備の子は色欲のフルフルに襲われた時の事を思い出し、途端に頬を赤らめた。それは肯定を意味していた。

ナルガ装備の子がニヤリと笑うとキリン装備の子は悔しそうに歯ぎしりをした。二人の視線が交差し、火花が散る。

その後も二人は散々言い争ったが、指摘した点はどちらにも当てはまり、あまり押し込む事が出来なかった。その為口論は平行線を辿り、二人の口喧嘩が終わる事は無かった。その事に二人も薄々と感じ取り、何か他に決着を付ける物は無いかと思惑する。

ふとキリン装備の子はナルガ装備の子の様子がおかしい事に気がついた。やたら頬が赤く、もじもじと脚を動かしている。その不可解な動作に疑問を思った時、キリン装備の子はその原因に思い当たった。ナルガ装備の子はフルフルに襲われた時の事を思い出し、気持ちが高ぶってしまったのだ。自身も僅かながらにその事を思い出し、感じてしまっている。二人は同時にあの時の状況を思い出し、興奮していた。更に今は吹雪の中、自然と身体は温もりを求めた。

「だったら……試してみる？」

おずおずと、若干しおらしくキリン装備の子は自身の腕を掴みながらそう問うた。ナルガ装備の子もその質問が何を意味しているか分かつたらしく、赤らめていた頬を一層赤くするとチラリとキリン装備の子の事を上目遣いで見つめた。お互いに熱を求めている。そして相手とどちらが女として上か勝負がしたい。その心情から二人は自然と近づき合っていた。

「……良いよ」

少し悩むように首を傾げた後、ナルガ装備の子は好奇心に負けてその提案を受け入れた。具体的に何をするかとは言っていない。だがフルフルの事が話題に上がった時点で二人はその事が思い当たっていた。

ゆつくりと近づき合う。邪魔な尖った部分の装備だけ外し、傷つけ合わないようにす



ると二人はそつと抱き合つた。お互いの対照的な胸が重なり合う。

「んっ……んむ……」

合図した訳でも無く、二人は同時に口を押し付け合つた。ぎこちないキスで唇が重なり合う音が流れ、隙間から可愛らしい声が漏れた。

決して期待していた訳では無い。二人共同性愛者では無く、これは単なる勝負に過ぎなかつた。だが相手を感じさせたい、という欲求から自然とこの行為を取つていた。

相手の腰に手を回し、強く抱き合う。キリン装備の子の豊満な胸がナルガ装備の子の貧相な胸を押しつけ、ナルガ装備の子は若干苦しうに顔を歪めた。胸勝負で不利なのは明白。そう考えるとナルガ装備の子は先程よりも激しくキスを仕掛けた。

「んふっ……んう、ん……」

「んんッ!? ん、あ……んむ……!」

唇を強く押当てられ、呼吸を止められそうな勢いで塞がれた。キリン装備の子は若干怯み、その隙にナルガ装備の子は自身の身体を前へと突き出した。胸で負けている分、身体全体で押さないと勝てない。そう判断した故だった。

布越しに二人の乳首が擦れ合い、二人は繋がっている口の隙間から喘ぎ声を上げた。それでもキスは止めずに唇を押し付け合う。二人の可愛らしいキスの音は吹雪によつて掻き消された。

「はむ、れろ……んっ……ちゅ……」

「んちゅ、んう……ん、はっ……」

キリン装備の子も負けずにキスを仕掛けた。舌を挿入し、ナルガ装備の子の口内を舐め回す。ビクリと肩を振るわせてナルガ装備の子は目を瞑るが、すぐに瞳を鋭くすると負けじと自身も舌を挿入した。二人の舌が口内で絡み合い、唾液が混ざり合う。二人の間からは水が混ざり合ういやらしい音が響いた。

そうして長い間キスをし続け、二人は自分達がクエストを受けている最中という事などすっかり忘れていた。吹雪のおかげで隠れているがハンターはクエストを受けている間は監視役であるギルド職員が気球船で見ている為、もしもこの吹雪が晴れば二人は大変な事になってしまう危険性があつた。だがもう二人には相手をイカせたい、という女としての欲求しか頭に無かつた。

「んふ……ふう……」

「んっ……あ……」

何も語らずただキスをし続け、舌を絡み合わせていた二人はようやく口を離れた。二人の間で糸が繋がりに、プツリと切れる。それを見て二人は頬を真っ赤に染まらせた。長い間絡み合っていた為に汗も流れ、ホットドリンクの効果も切れても体温が下がらなかった。

二人はしばらく見つめ合った後、お互いの身体の変化に気がついていた。「やっぱり……凄いい感じてるじゃない」

「そつちこそ……パンツ、濡れてる……」

キリン装備の子がナルガ装備の子の胸に触れると、そこはピンと乳首が突起していた。それを指摘されるとナルガ装備の子は息苦しそうに表情を歪ませたが、伸ばした手でそつとキリン装備の子の脚を触るとパンツが濡れている事を指摘した。キリン装備の子もやりづらそうな表情をし、二人はその後黙ってしまふ。

しばらくそうやって妙な空気が流れていたが、二人は同時に相手の衣服に手を掛けた。お互いの手が邪魔になりながらも服を乱暴に脱がし、完全な裸となってしまふ。こんな雪山で全裸になるのは危険行為ではあったが、吹雪も少し収まり、身体も温まっていた為、二人は気にしていなかった。そしてほぼ同時に唇を押し付け合った。

「んん！　ちゅば、ん……れろ、んっ……！」

先程よりも激しく、まるで蛇のように二人の舌は絡み合った。相手の口内を突くように動かしたり、舌を引っ張るように口を動かしたりと激しい攻防を繰り返す。

そしてキスをしたまま二人は冷たいベッドの上に倒れ込み、自身が上になると密着しながらぶつかり合った。

ゴロゴロと転がり、しばらくそうやって自分が上になると攻防する。だが結局勝負が

付かない為、仕方なく二人は向かい合う形でベッドに座った。体育座りをするように向かい合って座り込み、脚は横へと広げる。すると丁度二人の可愛らしい秘部が丸見えとなった。既に秘部は出来上がっており、愛液を垂れしてヒクヒクと脈打っていた。

「あんたのアソコ、凄い濡れてるじゃない。やっぱり変態はあんたの方よ」

「そっちだって……ヒダがヒクヒク動いてる。変態はそっち……」

そう言い合うとすぐに二人は相手の秘部に手を伸ばした。指を挿入し、ぎこちない動きでくちゆりくちゆりと動かし。濡れている秘部は相手の指を簡単に受け入れ、二人は心地よい温かさを感じた。

身体を少しずつ密着し合わせ、お互いが愛撫しやすように体勢を整える。そして二人は指を動かすスピードを徐々に早めて行った。

「んっ、あっ！……ぎ、ぎこちないわよ……」

「うるさい……ん、こんなに、感じてる癖に……ッ！」

キリン装備の子は余裕の表情を浮かべるが身体はしつかりと感じていた。挑発するようにナルガ装備の子に言葉を掛けるが、秘部からは大量の愛液が漏れている為に説得力が無い。ナルガ装備の子もそれが分かっている為、あくまで余裕の表情をしていたが本人も結構な快感を受けており、腰が引けていた。

「はあ……はあ！……ほら、素直に負けを認めな、さいよ……ッ!!」

「んっ、んく……やだ。勝つのは……わ、私……んあッ！」

「この……分からず屋……！」

「往生際が悪いのは……そっち……！」

どんどん指を動かすスピードは早まって行く。秘部からはぬちよぬちよといやらしい音が響き、時折潮を吹いたりしてもう限界が近くなっていた。吹雪も少しずつ収まっている為、これ以上続ければ監視役に見られる可能性もある。二人は焦っていた。

顔を真っ赤にし、時折肩を振るわせて苦しそうに息を吐く。それはもう限界を意味していた。キリン装備の子はなんとか絶頂しないように自身の口を強く噛み締め、耐えていた。ナルガ装備の子も目を瞑り、必死に絶頂しないように耐えていた。だがその抵抗ももう意味を成さない。

「はあ……やつ、駄目……負けたく、ない……ッ!!」

「ん! ……ああ、やだあ……いきたく……!!」

目から涙を流し、二人は訴えかけた。負けたく無い。どうしても勝ちたい。けれどその言葉は相手には届かず、二人はただ指を動かし続けた。もうこれ以上は耐える事は出来ない。限界を悟った二人は最後に勢い良く指を挿入すると、ビクンと肩を振るわせた。

「ああああああああああああああ……!!」

ほぼ同時に絶頂し、向かい合っていた二人はお互いの身体に愛液を掛け合った。甘い匂いが立ち上り、二人はポワンとした表情をしてお互いの肩にもたれ掛かった。お互いの呼吸音が耳元で聞こえて来る。どこか達観した気持ちになっていた二人は、自分達が行っていた行為をむなしい気分で見返していた。

「私が……勝ったわ……」

「違う……勝ったのは……私……」

この後に及んでも勝利を譲る事には納得出来ず、キリン装備の子は耳元で自身の勝利を主張した。しかしナルガ装備の子も自身の敗北を認める訳には行かず、勝ったのは自分だと主張した。

二人は一度離れ合うとバチバチと火花を立てて睨み合った。

「私よー」

「私……」

第二回戦が始まりそうな勢いで二人はそう罵り合う。もう吹雪が大分止んで来た為、これ以上勝負を続ければ確実に気球船に見られる可能性があった。だが頭に血が登った二人はそんな事を忘れ、同時に相手に掴み掛かった。だがその時、吹雪の中から白い悪魔が現れた。

「グルルル……」

「え？」

醜い姿をした正に化け物と呼ぶに等しい姿をしたモンスター、フルフル。それはかつて、二人を襲った色欲のフルフルであった。

二人はうなり声を聞いた瞬間、まさかと思つて声が聞こえた方向へと顔を向けた。すると目の前にはフルフルが立っており、見えないはずなのに奴はまるで興味を示すかのように裸の二人を見つめていた。

「ゴオアアアアアアアアアア!!」

「いやああああああああ!!」

フルフルが咆哮を上げたと同時に二人は抱き合つて悲鳴を上げた。かつて襲われた事があるからこそこれから起こる悲劇をいつている。二人は裸、武器も横に置いてしまつている為、とてもフルフルを狩猟する事は出来なかつた。

吹雪が収まり、二人の女ハンターの戦いは終わった。だが地獄は始まつたばかりだつた。抵抗する術もなくフルフルに捕まつた二人は、今度は仲良く絡み合う事となつた。



色欲のフルフルこと少年は何かを食した訳でも無いのにゲップをした。正確には

ゲップを真似たため息のような物ではあったが、少年は何故かそんな動作をしてみたくなかったのだ。

此処は雪山の山頂、そこには今はもう使われていないベースキャンプがあり、そのベッドの上では体中が愛液まみれになっている二人の女性ハンターが倒れていた。二人共白目を剥き、あられもない表情をして気絶している。まるで悪夢でも見たような、そんな形相であった。

(ふく、満足満足。まさかこんな所で前会ったキリン子ちゃんとナルガ子ちゃんに会うとはな)

勝手に命名した名前前で二人を呼びながら少年はぼんと自身の腹を叩いた。何故か若干皮膚が潤っているような気もし、今の少年は絶好調であった。

(それにしてもそうか、この雪山まで来ると前居た所の近くなのか……)

少年はチラリとベッドで眠っている二人を見てそんな事を思った。

この二人は以前は森丘の洞窟で出会った。だが今回はこの雪山。恐らくこの雪山辺りは以前自身が居た場所の近くなのだろうと推測し、少年は随分と遠くまで歩いたなど感慨深く領いた。

何故少年が森林では無く雪山に居るのか？それはちよつとした偵察と一時撤退が理由であった。実は少年は森林で起こっている異常現象にいち早く気がつき、モンスター



達の動向を伺っていた結果、ある仮説が思い浮かび、その真相を確かめる為に一時撤退を込めて雪山の山頂まで移動したのだ。

(あゝ……やつぱりラオシャンロンだわ……うっわ、でつかああ)

少年はフルフルの特殊な器官で見える視界を頼りに山頂から見える森林を見下ろし、そこに映る巨大な動く山を確認して大きいため息を吐いた。

ラオシャンロン。別名老山龍。特徴はとにかくでかいと言うとにかくシンプルなもの。だが見て分かる通り大きさが規格外であり、歩くだけ人間界に相当の影響を与える恐ろしい存在であった。

少年は森の中で逃げ回っているモンスター達を見掛け、やたら地面が揺れる事からもしやと思つて山頂まで移動してこの事を確認しようとしたのだ。ついでに雪山ならラオシャンロンの通る道では無い為、被害を免れる事も出来た。だが彼にはもう一つ気がかりな事があつた。

(やつぱり街の方向に向かつてるな……やべーよこれやべーよ。平気なのか人間?)  
ラオシャンロンが向かっている方向を確認して少年はバタバタと翼を動かして不満を垂らした。

少年が気にしていた事。それはラオシャンロンが街を通るのでは無いかという不安要素であつた。そして結果は見事にピンポイントにラオシャンロンの通る道に街が

あった。これでは街がこのままラオシャンロンによって崩壊してしまう。

（えーと、確かゲームでは要塞とかで迎え撃つんだよな？確かあの街にもその要塞みたいなのがあったし、多分平気だと思うけど……）

ゲーム上ではラオシャンロンは要塞を通り、ハンター達がそれを迎え撃つという形で戦っていた。ラオシャンロン自体はそこまで自分から攻撃を仕掛けて来る事は無いが、落ちて来る岩やラオシャンロンがただ動くだけでも被害がある為、討伐、撃退はかなり苦勞するものであった。

そして少年は更にもう一つ心配している事があった。設定集的な物にはラオシャンロンはまるで逃げるように移動していると記述されており、一説では伝説の古龍であるミラボレアスの誕生を察知して逃げていとされてるのだ。もしもこの設定通りなのだとすれば、ミラボレアスが誕生、もしくはは近々目覚める可能性があるという事だ。

別に少年には直接関係のある事では無い。人里離れた森の中などでひっそり隠れていれば影響は受けない案件だ。だが女の子にエロい事をしたという目的のある少年は、単純に街に居る女の子達の事が心配だった。

（くっそ、ちよつとだけ行ってみるか）

主に女の子にエロい事をする為に、という下心を出しながら少年は再び森へと戻る為に雪山を下山し始めた。

モンスターである自分が行った所で何か出来るという訳では無いが、もしも万が一と  
いう事を踏まえて少年は居ても立っても居られなかったのだ。ただしそれは決して正  
義心という物では無い。邪なスケベな感情が彼の心の半分以上を占めていた。

## 11: いざ砦へ

街は混乱の渦に飲まれていた。巨大な龍の出現という情報に、更にその龍がこちらに向かつて来ているという事実。ギルドから避難命令を出された後、人々は自分達が危機的な状況に立たされている事を実感して絶望の表情を浮かべた。

そんな中、ハンター達を中心に編成された古龍撃退部隊が砦で陣營を張っていた。守護兵達が主に大砲などのサポートに徹し、モンスターの相手になれているハンターが接近でラオシヤンロンに撃退に挑む。それがギルドが出した作戦内容であった。しかしいくらモンスターの狩りに慣れているハンター達でも、此処まで巨大な龍を相手にするのは初めての為、誰もか浮かない表情をしていた。

「は……ラオシヤンロンか。まさか伝承の龍を直に相手にする時が来るとはなあ……」

砦の中でキャンプボックスを確認し、武器の手入れをしていた男性ハンターが額に手を置きながらそんな事を呟いた。彼は以前のフルフル装備の女の子に話し掛けていた男性であり、此度もまた彼女と共に一大クエストに参加していた。しかし普段は陽気な

彼もまた皆と同様暗い表情を浮かべており、持ち込んだ慣れない弓を手にしながらため息を吐いていた。

記述では見た事がある巨大な龍。それはまさに山のように巨大で、他のモンスターとは規格外な大きさを誇る。それを自身が相手にするという状況に男性ハンターは何処か達観した様子で指先を微かに震わせていた。初めてモンスターと対峙した時と同じ、未知と遭遇した時の感覚と似ていた。

「どうかした?」

「……いや、何でもねーよ」

ふと男性ハンターを心配する声が横から聞こえ、振り向くとそこにはガンナー用のフルフル装備を来た青髪の女の子が立っていた。包帯がグルグル巻きになっており、いつもとまた違った印象を受ける。けれども彼女は相変わらずの無表情でこんな危機的な状況にも関わらず持ち前のマイペースさを発揮していた。

「怖く無いのか? お前は。ラオシャンロンを相手にするつてのに」

「別に」

男性ハンターのちよつとした疑問に大してフルフル装備の子は端的に答えた。それは決して無愛想などでは無く、本当に彼女の心情を現していた。彼女からすればこのような状況、いつもの狩りとは変わらないのだ。ただ獲物が少し大きいだけ、彼女の中では

そう完結していた。

フルフル装備の子も持ち込んだ弓の整備をし、欠損は無いかなどを確認していた。ただその表情は少しだけ不機嫌そうで、僅かに目つきが悪くなっていた。それは彼女がいつものような狩りが出来ないという不満の現れであった。

「本当は大剣使いたかったな……」

「おいおい。あんなでけーの相手にどうやって剣を振るうつてんだよ。近づいたら間違いないくお陀仏だろ、ありゃ」

ポツリと漏らしたフルフル装備の子の不満に男性ハンターは呆れたように指摘し、大きくため息を吐いた。

今回のクエストは複数のハンター達による大掛かりな作戦となる為、予め持ち込む装備などが決められていた。そしてラオシャンロンを相手取る際、ハンターは極力遠距離武器を使用するようにギルドから通達されていたのだ。その理由は至極単純、巨大な龍相手では近接武器ではどうにもならないからだ。

だがこの命令にフルフル装備の子は不満を抱いていた。

確かにラオシャンロンを相手に近接武器を使って戦うのは難しいだろう。だが全く不可能という訳では無い。記録だけはあるがかってラオシャンロン相手に双剣を使って立ち回ったというハンターが存在していた。例えば大きな龍が相手だろうと踏ま

れるのに注意さえすれば対処出来るのだ。少なくともフルフル装備の子はイメージの中ではそうやって戦う事が可能だった。だから自身が苦手とする弓はあまり使いたく無く、愛剣である大剣で戦いたかったのだ。

そんな風にフルフル装備の子が弓を睨めっこしていると、突然部屋の中が大きく揺れ動いた。まるで近くに大砲でも落ちたかのように重い轟音。それを聞いた瞬間、その場に居たハンター全員が息を飲んだ。ついに来たのだ、奴が。

「始まったな……行こう」

作戦開始の合図である銅鑼が鳴り響き、ハンター達は広げていたポーチやアイテムを片付けると一斉に装備を整え始めた。男性ハンターとフルフル装備の子も弓を持ち抱えると歩き出し、決戦の場へと向かう。

辿り着いた城壁の上から外を眺めると、そこには赤い鱗を纏った巨大な龍が鎮座していた。尻尾を支えに二本脚で立ち、長い首を回して大きな唸り声を上げている。それを見上げていたハンター達は思った。悪夢だ、と。

◇

ラオシャンロンが出現中の砦のそのすぐ近くの岩場で、一人の女性ハンターがフルフ

ルに襲われていた。例のごとく少年の仕業である。何故こうなったかと言うと、ラオシャンロンの所へ向かおうと思っていた少年が偶然偵察中の女性ハンターに見つかったからである。

今は別の目的がある為、少年は最初は無視しようとしたがその女性ハンターはあろう事か少年を狩猟しようとし、少年は正当防衛で戦う事にしたのだ。

「うあ……あああ……」

幸いゴツゴツとした岩場の地形の為、女性ハンターもいつもの狩猟場のように力を発揮する事が出来ず、少年が飛ばした電撃にあっけなく沈黙した。現在はビクビクと肩を振るわせながら苦しそうに表情を歪ませている。衣服もはだけ、その気が無かった少年も当然手を出したくなかった。

彼女の少し小振りな胸を翼で揉み、いつものように快感を与える。感度が高いのか女性ハンターは触られるだけで目を瞑り、ビクビクと肩を振るわせた。少年は面白がるように胸を揉み続ける。

「やめてえ……おっぱい、弄らないでえ……」

女性ハンターは嫌がるように声を上げるが痺れのせいでもろくに抵抗する事も出来ず、胸から伝わる快感に打ち痺れた。少年は口を器用に動かすと胸部分の装備だけ剥がし、彼女の胸を直接触る。何度も弄られた事で熱を帯びた胸はとても温かく、気のせいかわ



性ハンターも先程より気持ち良さそうな顔をしていた。

少年は更に胸を揉み続ける。段々と乳首もピンと起ち、女性ハンターの喘ぎ声も大きくなっていった。時折大きく首をのけぞらせたりして苦しそうにうめき声を上げる。もう限界は近いようだった。そして少年がつまむように乳首を弄った瞬間、女性ハンターは大きく肩を揺らした。

「ああああああああ……ッ!!」

目を瞑って表情を歪めながら女性ハンターは絶頂し、下着を汚した。気絶はしていないものの体力を大きく消耗した為、目を瞑ったまま疲れたように伏してしまっている。

いつもなら更にいじめて楽しむ所のだが、生憎少年には別の目的があった為、今回は此処までだった。

少年が立ち去ると女性ハンターは安堵したように息を吐いた。けれど何処か物足りないように唾を飲み込み、自身の下半身にそっと指を伸ばしている彼女を少年は気づかなかった。

岩場を移動し、ようやく砦らしい場所へと辿り着く。見下ろすと崖の下にはやはりラオシャンロンの姿があり、轟音を立てながら黙々と歩を進ませている。

(ふう、やっと追いついたぜ)

途中予想外の邪魔が入ったりしたが何とかラオシャンロンに追いつけた事に安堵し、

少年は胸を撫で下ろした。よく見ると弓を構えたハンター達の姿もあり、どうやらクエストはもう始まっているようだった。

隊列を組んだハンター達が一齐に弓を構え、無数の矢を放つ。ゲームであるならばこんな爽快な光景は決して見る事が出来なかった。雨のごとく降り注ぐ矢は見事ラオシャンロンに命中するが、いずれもその強靱な鱗によつて弾き返された。記述通り、ラオシャンロンの鱗は相当な硬度を誇るらしい。

(うわ……こりややべえな。古龍つてマジで化け物じゃねえか)

いくらハンター達が矢を放った所でそれは全て跳ね返されている。とてもダメージが通っている様子は無かった。どう見ても戦況はハンター達の方が不利であった。それを感じ取った少年は困ったように小さくうなり声を上げた。

と、丁度その時、少年の視界に見覚えるのあるハンターが映った。装備は違うがガンナー用のフルフル装備であり、相変わらず人形のように無表情の女の子、あのフルフル装備の子であった。

彼女もまた弓を構えて隊列に加わり、ラオシャンロンに矢を放っていた。だが思う様にダメージが通らず、不満げな瞳をしている。

そして幾つかの攻防を終え、ラオシャンロンは岩場を超えて次のエリアへと向かおうと足を動かした。この辺りはゲーム上と同じ様な形状なのか、ハンター達も引き返して

一度砦の中に戻ってから移動しようとしている。だがその時異変が起きた。ラオシャ  
ンロンの尻尾が壁に激突し、砕けた岩がゴロゴロと落ちて来たのだ。

(おいおいおい、これやべーんじゃね?)

落下して来た岩は引き返そうとしていたハンター達の前に立ちはだかるように突き  
刺さった。更に無数の岩が落下し、何人かのハンター達が負傷しているようだった。そ  
んな中、当然同じ様に引き返そうとしていたフルフル装備の子も落下して来る岩に潰さ  
れそうになっている。

(ちっくしょー!)

ほぼ反射的に少年は動き出していた。地面を蹴って勢い良く跳躍し、滑空するように  
岩場へと舞い降りる。そしてフルフル装備の子を潰そうとしていた岩を蹴飛ばし、少年  
は反動で地面へと転がり落ちた。

(あででで!)

「…………ツ!? フルフル…………まさか、色欲?」

思わず乱入者にフルフル装備の子は驚いたように目を見開いた。少年は予め落ちて  
いた岩にぶつかり、かろうじて動きを止める。

幸い周りのハンター達は落ちて来る岩を避けるのに必死で、加えて突き刺さっている  
岩が死角となって少年に気付いたのはフルフル装備の子だけだった。彼女は慌てて倒

れている少年の元へと駆け寄る。

「大丈夫?……ひよつとして、私を助けたの?」

(いやちげーし。急に岩を蹴りたくなっただけだし)

フルフル装備の子の尋ねに大して何故か少年は正直に答えるのが気恥ずかしくなり、そんな嘘を吐いた。だが当然言葉が通じる訳も無いのでうなるフルフルを見てフルフル装備の子は何処か嬉しそうに頬を緩ませた。

フルフル装備の子はそつと少年の首を撫でた。労る様に、とても優しく。いつもならムラムラする所なのだろうが、少年は何故か彼女の前だとそんな気も失せてしまった。

「お願いがあるの。落ちて来た岩のせいでもう砦に戻れない。だから私を貴方の背中に乗せてラオシヤンロンの所まで連れてって」

(はー?まだあんなのと戦う気かよ。命知らずな奴だな……)

今しがた命を拾ったばかりなのにまだこんな事を言う女の子に少年は呆れ返った。ババコンガと戦っている所を見た時から薄々と思っていたが、この女の子は自分の命を軽く見過ぎている。ハンターという職業だから仕方ないのかも知れないが、もう少し自分の身体を労るべきであった。

「お願い」

そんな思いが伝わる訳もなく、女の子は綺麗な瞳を揺らしながら少年に懇願した。そ

んな真つ直ぐな目で見られてはヘタレな少年も断る訳には行かず、渋々と首を縦に振った。途端、彼女の表情が急に柔らかくなる。

「有り難う。力、貸してもらうね」

そう言うのと女の子は躊躇無く少年の背へと乗った。行動力のある事で、と少年は呟きながら他のハンターに見られる前にさっさと飛び出し、ラオシャンロンが向かったエリアへと飛んで行った。

チラリと後ろを見ると岩の崩壊も収まり、ハンター達も死亡者は出ずに済んだらしい。女の子もそれを確認したのか、少年の背でほつと安堵の息を吐いていた。

決戦の場では既にラオシャンロンが砦の前で二足歩行の体勢を取っており、けたたましい咆哮を上げていた。辺りがビリビリと振動するのが伝わり、少年は思わず飛行を停止すると落下するように地面へと降り立った。あまりにも強過ぎるラオシャンロンのプレッシャーに飛んでいられなくなったのだ。

「此処で良い。本当に有り難う。色欲」

少年の様子に気がついた女の子は彼に無理をさせない為にそう言うた。ぽんと少年の頭を撫で、お礼を言うのと走り去って行った。あれだけ巨大な、恐ろしい程強靱な姿をした龍を前にしても一切怯まない。自分よりも遥かに小さく、ちつぽけな存在だと言うのに。少年はそんな彼女の後ろ姿を見て何だか複雑な気持ちになった。

恐らく女の子はこれからあの巨大な門を登り、撃龍槍を発動させるつもりなのだ。超大型モンスター用に造られた巨大な槍。目には目を、歯には歯をとも言いたげなその武器をラオシャンロンに喰らわせるつもりなのだ。

確かにあれだけ巨大な槍ならいくらラオシャンロンでも無事では済まないはず。ゲームではシステムの的にダメージを負うだけだが、この現実世界でなら胸を貫き、致命傷を与える事が出来るはず。

女の子は必死にはしごを登っていた。時折ラオシャンロンが門に突進したりして落ちそうになったりしているが、それでも必死に手を動かして登っていた。それを見ていた瞬間、少年はもう居ても経つても居られなくなっていた。正義感にかられた訳ではなく、女の子が必死に頑張っているのに自分がただ見ていただけという状況が恥ずかしくなり、そのちっぽけな自己満足の器を満たす為に走り出したのだ。

吸盤を活かして尋常では無い程のスピードで壁を登って行く。丁度女の子も登り終えた所だったが、ラオシャンロンの突進で砦が大きく揺れ、まともに立っている事が出来ずに居た。そんな彼女の前に少年は颯爽と舞い降りた。

「……色欲!？」

(これを押せば良いんだろ……ッ?)

恐らくスイッチである物体を思い切り脚で叩く。ゲームではハンター達はこのス

イッチを叩く事で撃龍槍を発動していた。そしてそれはどうやら正しかったらしく、轟音を上げて砦から巨大な槍が出現した。その槍はキリキリと音を立てるとラオシャンロンに向かって飛び出し、見事その胸を貫いた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

恐らく悲鳴であろう叫び声をラオシャンロンは上げる。大きくのけぞって首を振り、所構わず暴れだした。壁を叩き、尻尾を振るい、とにかく苦しみを訴えるかのように激しく動き回る。そのせいで砦の一部分が崩壊し、雪崩に近い装飾の崩壊が始まった。

すぐさま少年は女の子を庇うように前に立ち、落ちて来る岩から彼女を救った。そしてラオシャンロンはひとしきり暴れた後脚を引きずりながら撤退を始め、その巨大な姿を隠すように逃げて行った。

(うぐ……)

「色欲……? 色欲!? 大丈夫? 怪我が……」

崩壊が収まった後、少年は女の子から離れてから踞るようにその場に伏した。いくらモンスターと言えど鱗を持たない小柄なフルフルでは落石に完全に耐えきる事が出来ず、幾分かダメージを負ってしまったのだ。

再度命を救われた女の子はすぐに少年に近寄り、その傷ついた背中をそつと抑えた。心無しか目には涙を浮かべ、少年が苦しんでいる事に悲しんでいるように見える。

「どうして……貴方は私を助けるの……？」

女の子は首を振りながら純粋にそう尋ねた。ババコンガの時と言い、少年はなんの見返りも求めずに女の子を救った。それは単純に少年の気分であったのだが、女の子からすればモンスターに救われるという有り得ない状況の為、とても理解出来ずに居た。

少年はその問いに答える事なくゆっくりと身体を起こした。彼からすれば自分の小さな器を満たす為に行為、ただの自己満足。それ以上でもそれ以下でも無かった。だがへタレな彼をそれを伝える事はしないし、伝える手段も持ち合わせていない。

照れくさいのを誤摩化するように女の子に向かって小さく唸ると、翼を羽ばたかせて磐から脱出した。

「……色欲」

去ってしまった色欲を見つめながら女の子はポツリと彼の名を呼んだ。

やはり分からない。不可解な存在。女の子を襲うという習性を持ちながら彼は二度も私を助け、尚かつ襲わずに生かした。その不可解な行為に女の子は首を捻らせる。

しばらくした後、女の子の元に仲間のハンター達が集まった。彼らはラオシャンロンが居ない事を知ると撃退に成功した事に喜び、女の子を崇め奉った。しかし女の子はそれに大して嬉しそうな顔はしなかった。何故なら彼女は知っているからである。この戦いで最も活躍した自分では無い。『色欲のフルフル』である。しかしそれを言った



所でギルドの職員が信じてくれる訳が無い。女の子はその事に悲しみを覚えながら、そつと瞳を瞑った。

## 12：姉妹二人頂きます

冷たい風が漂う薄暗い洞窟で二人の女性ハンターが歩いていった。両方ともザザミ装備を着ており、似た顔立ち、雰囲気から姉妹である事が伺えた。

一人は茶髪のポニーテールの女性。キリツと引き締まった顔つきに大人びた風貌をしており、胸もそれ相応に大きさを誇っている。防具越してもその膨らみ具合が分かる程であった。背にはランスを担いでおり、鋭く伸びた槍が輝いていた。

もう一人は茶髪の短めのツインテールの女性。こちらも大人びた風貌をしているが幾分か目が丸く、可愛らしい顔つきをしている。胸も相方よりは少し小さめだが、それでも十分な大きさを誇っていた。背にはガンランスを担いでおり、何処か不安そうにその銃身を撫でていた。

「この辺りが『奴』の生息地らしいよ。姉さん」

「ああ……気を引き締めて行こう」

ツインテールの女性がそう言うと言っていると姉であるポニーテールの女性は頷いてそう返事をした。

この姉妹は現在あるクエストを受けている最中であり、その標的がこの洞窟内部に居る可能性がある為、こうしてやって来ていた。妹の方は片手に松明を持ちながら辺りをキョロキョロと見渡して警戒している。姉の方も同様、落ち着いた態度で周りの気配を探っていた。

「でも本当に居るのかな？ 噂だとあのラオシャンロン襲撃時に死んだって言うけど……」

しばらく歩いてもいっこうに標的が現れない事から不安を覚えた妹がそんな事を言った。その独り言にも等しい呟きは姉の耳にも入り、彼女は一度立ち止まり、顔は向けずに妹へと語りかけた。

「居る。奴は絶対に居る……目撃情報や調査隊からの報告があるんだ。それに……」

「いつもの勘？」

「ああ」

姉の言いかけた言葉に対して妹が付け足すと、姉はニヤリと笑みを浮かべて頷いてみせた。姉の性格を理解している妹は姉が勘の鋭い女性である事を知っており、彼女はその勘から標的が確実に生きており、この洞窟に潜んでいると言っている。ならば自分もそれを信じるまで。姉妹の絆がしつかりと結ばれている二人は小さく頷き合うと再び歩みを始めた。

ピチャン、と何かが垂れる音がした。姉がランスを抜きかけて後ろを振り返ると、そこではただ水が垂れているだけだった。姉は小さく息を吐いてから緊張を解き、武器から手を離れた。だが前を向いた時に硬直した。妹の姿が無い。

「……ッ!？」

つい先程まで自分の隣に居たはずの妹の姿が消え、困惑した姉は顔を真っ青にした。何の音も立てず、まるで煙のようにパッと消えたかのような現象。思考が追いつかず、ただ本能的に姉はランスを構えた。何かは分からないが、彼女の勘が危険を告げていたのだ。

そしてその勘は正しかった。突如上空から何かが振つて来て、姉は盾を構えていた事によってその攻撃を防ぐ事が出来た。ビリビリと腕が痺れる感覚を覚え、後ずさりした姉はすぐさま天井を見上げる。するとそこには丁度小型のモンスターが一体スッポリと入れるくらい穴が空いており、そこには自分達の討伐対象であるあの悪魔が居た。

「『色欲』……ッ!!」

色欲のフルフル。その特殊な習性から名付けられた悪魔の名。そいつはある事から天井の穴の中に隠れており、その翼の中には自身の妹の姿があった。声を上げないように口を抑えられており、妹は必死に拘束から抜け出そうと抵抗している。

姉は絶句した。モンスターがこのような奇襲を、更には捕まえたハンターを補食する

訳でも無く、声を上げさせないように拘束するなど聞いた事が無い。モンスターとしての有り得ない行動に不気味さを覚えた姉は一瞬硬直する。

「ギャオオオオオオオオオオ!!」

その刹那、フルフルが洞窟中に響き渡る程の咆哮を上げた。長い首を更に伸ばし、姉へと襲い掛かる。動きが遅れた姉はその一撃を受けるが、何とか盾で防ぎ切った。それでも追撃を防ぐ事は出来ず、盾をめくられて後方へと吹き飛ばされる。

「がっ……!」

思わず盾を落としてしまい、姉は痺れる腕を抑えながらすぐに起きあがった。隙を突かれたとはいえ、このような体たらく。姉は自身の甘さを呪い、歯を食いしばりながらランスを構えた。

敵はまだ頭上。降りて来るつもりは無いのか、天井で電流プレスを放つてばかりいる。姉はそれを避けながら徐々に接近し、ポーチからある物を取り出した。

「打ち上げタル爆弾……!」

小型とタル爆弾を取り出し、火を付ける。途端にバチバチと音を立てながらそのタル爆弾は打上り、見事フルフルへと直撃して奴は咆哮を上げながら地面へと落下した。その拍子に妹の拘束も解け、彼女はゴロゴロと地面を転がりながら脱出した。

「姉さん!」

「構えろ、一氣に畳み掛けるぞ！」

人質が居なくなれば遠慮する必要は無い。姉は落ちた盾を拾い上げると妹にそう呼びかけ、構えを取った。フルフルはまだ起きあがるのに苦戦している。よく見るとその背中はまだ攻撃もしていないのにズタボロで、挟れていたりと大分酷い有様だった。

もしかしたらラオシャンロンの撃退の時に出来た傷なのかも知れない。そんな事を思いながらも姉は躊躇する事なくフルフルへと襲い掛かった。妹もガンランスを武器を構え、砲撃の準備をする。だがその時、突如異変が起きた。

バチリ、と何かが弾ける音が響いた。姉が気付いた時には自分の目の前に電流ブレスが流れて来ており、思わぬ攻撃に避ける事も出来ず姉は直撃した。妹も同様に電流ブレスに直撃し、痺れを喰らって倒れていた。

「なっ……あ……ッ!？」

一体いつの間に？と姉は痺れながらも思考する。見るとフルフルは伏せた態勢をしながらも身体を僅かに浮き上がらせ、首を下に向けて口を開いていた。奴は起きあがろうとしていたのでは無い……起きあがる振りをして隙を見せ、電撃を飛ばす隙を狙っていたのだ。自身すらもダメージに使う程の作戦……モンスターとして絶対に有り得ない。

やはりこのフルフルは危険だ。そう感じながらももう攻撃をする事すら出来ず、姉は武器を落とすとズルリと地面に倒れ込んだ。冷たい地面が肌にぶつかり、姉はろくに動

く事すら出来ず痺れに苦しむ。チラリと横を見ると妹も痺れで苦しそうに表情を歪めていた。

ズシン、と音があった。前を見ると起きあがったフルフルがこちらに向かつて来ており、匂いを嗅ぐ動作をしながら辺りを警戒していた。自分達以外にハンターが居ないかどうかを確認しているのか、また打ち上げタル爆弾のような道具が無いかなどを確認している。やはりモンスターらしく無かった。

「姉……さん……」

「心配するな……お前は、私が守る」

ふと横から声が聞こえたので見てみると、そこでは妹が目には涙を浮かべながら不安そうに姉の事を見ていた。これからされるであろう事に恐怖を覚え、不安がつているのだ。それを何とか落ち着かせようと姉は嘘を吐く。こんな危機的な状況で守る事など出来る訳が無いが、最愛の妹が悲しむ顔だけはどうしても見たく無い為、ついそんな嘘を吐いてしまったのだ。

ついにフルフルが目の前へとやって来た。隠し武器や増援が無い事を確認して安堵しているのか、警戒心が無い。もう姉妹を痺れで拘束して脅威は無いと判断したようであった。

「ひっ……」

間近までフルフルが迫つて来たのを見て妹が小さく悲鳴を上げた。身動きが取れない状況でモンスターにここまで接近された経験などある訳が無く、当然恐ろしさを感じた。それを知つてか知らずかフルフルは姉の方から視線を背けて標的を妹へと変えた。まるで何か考えがあるようなその行動に姉は目を見開く。

「グルル……」

「なっ……やめろ！ 妹だけには手を出すな！ よせ!!」

モンスターに懇願した所で言葉が通じるはずも無いのに姉はそんな声を上げていた。痺れながらも手を上げてフルフルを掴もうとするが、届かない。フルフルは首を傾けると妹の方に近づき、彼女の匂いを嗅ぐ様な仕草をした。妹はビクビクと震えながら怖がっている。もう抵抗する気力すら無いようであった。

フルフルは妹の鎧を口で噛むようにして剥がし始めた。ベキンと割れた装備は留め金が外れ、簡単に妹の細身な身体を晒した。身を守るものを失った妹は増々絶望の表情を浮かべ、瞳に涙を浮かべた。それを楽しんでいるのか、フルフルは何処か笑いつているようであった。

「いやあ……い」

インナーだけの姿になった妹はただ恐怖に怯えるだけだった。フルフルはまず翼を伸ばし、彼女の大きな胸を揉んだ。モンスターに触られるという拒絶感があったが、そ



れでも身体はすっかりと感じてしまい、彼女の口からは甘い声が漏れた。それが屈辱だったのか、妹は顔を赤くし、齒ぎしりをしながらフルフルの事を睨んだ。

「あん……んあ……やめてえ……！」

どこか手慣れているフルフルは大きなその翼で器用に妹の胸を揉んだ。時には摘むように、時には乱暴に揉み、妹に更なる快感を与えた。乳首を弄られた時には妹も身体をのけぞらせてしまい、可愛らしい喘ぎ声を上げた。それを避けて聞いていた姉は必死にその行為を止めさせようと抵抗したが、やはり痺れから抜け出す事は出来なかった。

そんな姉を横目にフルフルの行為は更にヒートアップして行く。妹のインナーを脱がすと完全に裸にしてしまい、ちよつとだけ毛が生えた妹の秘部を尻尾で弄り始めた。クチュリといやらしい音が響き、妹は悲鳴にも近い大声を上げた。

「やああああ！ 姉さん、助けてええ！」

「ぐう……ううう！ く、くそ……貴様アア!!」

姉に助けを求めるが当人も痺れで動く事が出来ない。なんの抵抗も出来ない姉は齒がゆく思い、ただフルフルに罵倒を浴びせる事しか出来なかった。

そうして秘部を弄られ続けた妹は段々と息を荒くして行き、ビクビクと肩を震わせ始めた。限界が近い兆候である。もう後一押しで絶頂するかしないかであった。だがフルフルは何を思ったのか、突如その動きを止め、愛撫を停止した。

「……………へ？」

イキかけだった妹はなまじ止められた事から複雑そうな表情をし、口から唾液を垂らしながらフルフルの事を見上げた。フルフルは何かを考えているように妹の事を見ている。そして突然姉の方に顔を向けると、そちらへと歩み寄った。

「な、何を……………貴様……………!？」

まさかこのタイミングで自分に向かつて来ると思っていなかった姉は困惑の表情を浮かべる。フルフルは近づくと、先程の妹と同じ様に鎧を剥がし始めた。インナーだけの姿になった姉の豊満な胸と白い肌が露となる。姉はそのキリツとした瞳を更に鋭くしながらフルフルの事を睨んだ。

「姉さん……………」

「心配するな……………私は屈しない」

ようやく落ち着いた妹が姉に心配の声を掛けるが、姉は彼女を落ち着かせる為に平常心を保つてみせた。しかし内側では心臓はドキドキと脈打っており、緊張している事が分かった。今からこのフルフルに犯される。そう想像するといくら気丈に振る舞っている彼女でも流石に恐ろしさを感じていた。

フルフルは妹と同じ様にまず彼女の豊満な胸を揉んだ。妹の大きめの胸よりも更に大きく、加えて柔らかい感触が伝わる。揉まれている側の姉は苦しそうな顔をしていた

が、着実に快感が伝わっていた。もどかしいような、くすぐったいような不思議な感覚。モンスターとの死闘だけを繰り返して来た姉にとっては初めての感触だった。

「う……………あ……………ん……………」

彼女の口から吐息のような声が漏れた。僅かに頬も赤くなっており、着実に感じている事が窺えた。妹はこんな顔をする姉を初めて見た為、自身が犯されている訳でも無いのに心臓の鼓動を高鳴らせていた。先程なまじ絶頂しかけたせいでもどかしさを感じ、自然と脚をモジモジと動かしていた。

「そ、その程度か……………」

胸を揉まれていた姉は僅かながらの抵抗のつもりなのか、フルフルを挑発するような言葉を発した。しかしフルフルはそれに反応する事は無く、ただ冷徹に、至って平常心のまま彼女のインナーまでをも脱がした。揉まれ続けて少し赤くなった胸と、ピンと尖った乳首が露となる。それを見て自分が感じてしまっている事を知った姉は恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「あつ……………や、やめろ……………」

完全に裸にされた姉は草むらが広がっている自分の秘部を隠す様に手をかざす。少しだけ痺れも解かれた為、彼女はある程度動けるようになっていた。だがフルフルはまだ脅威を感じていないのか、構わず彼女の手を翼で抑えると尻尾で秘部を愛撫し始め

た。

グチュグチュと妹の時よりも更にいやらしい音が響く。しつかりと感じていた秘部は女性の象徴をしつかりと主張しており、ヒクヒクと蠢いていた。少し触れるだけで大量の愛液が漏れ、人を惑わせる甘い匂いが漂う。

姉は表情を真つ赤にし、苦しうに自身の唇を噛んだ。近くで見ていた妹もゴクリと唾を飲み込み、モジモジと肩を震わせる。

「あ、んあ……あつ！　ん、く……ッ！」

秘部を弄られる度に姉はビクンと肩を震わせてどうしようも無い喘ぎ声を上げた。身体をのけぞらせ、苦しうに暴れている。彼女は恥ずかしそうに顔を歪ませていた。淫らに身体をよじらせ、大きな胸が更に主張される。白い肌の上には汗が垂れ、それが輝いて一層美しさを強調させた。

散々姉を弄った後、フルフルは再び動きを止めた。イキかけていた姉は中途半端に止められたせいで下半身の疼きに苦しむように脚をくねらせる。

何故急にやめたのか？と姉が疑問の目を向けていると、フルフルは隣でモジモジと肩を震わせていた妹を近くへと連れて来た。姉と妹が丁度隣り合わせになるように並ばせ、その光景を見て満足そうに頷いている。

「姉さん……？」

「な、何をするつもりだ……？」

何故姉の隣に移動させられたのかと疑問そうな顔をする妹と、一体これから何をすることもりなのかと不安に思う姉が同時に言葉を発した。

衣服を纏わないと二人は若干の際はあろうとも本当にそっくりな容姿をしていた。少しだけ目つきが違うのと、髪型が違う。後は胸の大きさくらいであった。それも僅かな違いの為、気付けない人ならば本当に二人共同一人物に見えるであろう。

ふとフルフルが大きく身体を動かすと翼で妹の身体をずらし、姉の上へと乗つけた。

「ひっ……！」

フルフルに触れた事に悲鳴を上げた妹は痺れている事もあってろくに抵抗する事も出来ずにされるがままになる。二人は丁度向かい合う体勢でくっつく事となった。姉が下、妹が上。二人の豊満な胸が重なり、大きく歪んだ。

「ふ、あ……姉さん……あ、当たってる……」

「くう……あ、あまり動くな……擦れて……ッ」

此処で二人の身体に異変が起こった。密着してしまつたが故に二人の秘部が重なり合つてしまつたのだ。激しい快感を感じる訳では無いが、少し触れただけでも愛液で濡れている為、二人はくすぐつたいようなもどかしい感覚を味わつた事になった。加えて先程までイキかけだつた為、少しくすぐつたさを感じるだけでも二人の身体は過剰に反

応していた。

フルフルはそんな二人を更にくっ付けあわせるように翼で妹の背中を押した。胸同士が更に密着し、弾む様に歪む。胸が擦り合わされ、二人は絶え間ない喘ぎ声を上げた。少し身体が動いただけで秘部同士が擦れ合い、毛と毛が絡み合って快感が走った。

「はふぁ……わ、私……姉さんと絡み合って……」

「気をしっかり持つんだ……耐えろ……ん、あ……ッ!!」

妹は既に快楽の虜になっており、目をトロンとさせて呆けた様な顔をしていた。自分の愛液が混ざり合った甘い匂いを嗅ぎ続けた為、頭が真っ白になりまともな思考が来ずに居た。

対して姉の方はまだ意識を保っており、冷静な思考をする事が出来た。だがそれでも快感に耐えられず、喘ぎ声を上げている。更には自身の目の前では快楽に喜びを感じている妹の姿があった為、目には涙を浮かべていた。

フルフルは尻尾を伸ばすと丁度二人の秘部を同時に弄るように愛撫した。ぬちゃぬちゃとねつとりとした二人の混ざり合った愛液が垂れ、二人は腰を同時に震わせた。

「姉さん、私もう無理……イっちゃう、イっちゃうよお……」

「う、ああ……私も……もう、限界だ……!」

「一緒に……ねえ、一緒にイこう……!」

肩を震わせ妹は自身の限界を主張する。すると姉ももう体力の限界の為か、初めて此処に弱音を吐いた。それに同調して妹は甘えるように姉の身体に手を回し、抱きつく様にして顔を近づかせた。懇願するように、純粋な子供のように彼女に声を掛ける。そんな声を掛けられては姉ももう断る事は出来なかつた。今までずっと姉妹二人で頑張つて生きて来た事を思い出しながら姉は甘えて来る妹を受け入れた。

「ん、ちゅつ……ん、んう……んむ、んん……」

ほぼ同時に二人はキスをした。舌を絡み合わせ、まるで一つになるかのように濃厚なディープリキスをする。胸を擦り合わせ、乳首同士をぶつけ合わせ、二人は可能な限り密着した。

そしてフルフルが二人の秘部を強く尻尾で突いた瞬間、二人は同時に絶頂した。

「ああああああああああああ……ッ!!」

激しく肩を震わせながら二人は身体を浮かして大量の愛液が吹いた。絡み合っていた糸も途切れ、白い液体で汚れた二人は愛おしそうに手を握り合った後、眠る様にその場に倒れ込んだ。

二人が気絶した後、フルフルはいつものようにモンスターが寄り付かなそうな場所に二人を移動させ、インナーを毛布代わりに被せるとその場から去った。

洞窟から出た後、フルフルは自身の抉れた背中を庇う様にもたついた歩き方をしてい

た。心の傷は癒えようと、まだ身体の傷は癒えていない。色欲のフルフルは現在療養中であつた。



## 13 : 兄再び

色欲のフルフルこと少年はジャングルのように蔓が密集した森の中を歩いていた。

此処は以前少年が森林からは少し離れた森。現在彼はこの近くを縄張りとし、幾つかの住処を所有していた。何故以前の縄張りを放棄したかと言うと、そこには少しだけ複雑な事情があつた。

まず第一以前の縄張りにはラオシャンロンが横行した為、半ば崩壊状態になっているのだ。ただ木々が倒され、モンスターが住み着かなくなつただけだが、モンスターが居ない、つまり狩猟しにハンターが来ない為、獲物を襲えない少年はそれで縄張りを放棄するしか無かつた。

そして一番の問題は少年の今の状態であつた。以前から少しずつ切り傷が増えて行つた彼ではあつたが、今回ラオシャンロン撃退の際に彼は落石から女の子を守るといふらしく無い事を仕出かしてしまつた為、背中に傷を負う事となつてしまつたのだ。しかもかなり深く、まるで抉れるように背中的一部分がへこんでいる。それはフルフルという醜い見た目だけにかかなり悲惨な姿であつた。この傷を癒す為にも、彼は一時住処を

離れる必要があつたのだ。

(あー痛つて……本当、性でも無い事はするんじゃないやなかつたなあ)

少年は今の自分の住処の一つである巨大な木の前に辿り着くと、そこを登つて丁度良いくぼみ部分に座り込みながらそう愚痴を零した。首を伸ばしてへこんだ部分の背中を掻きながら彼は小さくため息を吐く。

別段彼はこの傷の事は気にしていなかつた。確かにらくしも無い事をして痛い思いをしたのは確かだつたが、だからと言つて傷の事を一々気にする程女々しくは無かつた。そもそも彼は既にフルフルという怪物の姿にすら慣れてゐる為、今更傷が何だという心境であつた。

(問題はハンター達の方だなあ……は、面倒くせ)

欠伸をするように口を広げながら少年は今自身が直面している問題について考える。

実は彼が縄張りを変えた一番の理由はハンターに追われている事にあつた。ハンターに追われているなどいつも女の子を襲つている少年からすれば日常茶飯事であつたが、今回は少し事情が違うのだ。

どうやら今回のラオシャンロン撃退の時の少年の行動を誰かに目撃されていたらしく、ギルドは色欲のフルフルが何らかの意図を持つてしてラオシャンロンを倒そうとした、と判断したのだ。実際撃退したのは少年で間違いないのだが、表的にはフルフル装

備の子が撃退した事になってゐる為、ギルドは少年の事をあくまでおまけとした考えていない。散々な扱いであつた。

いづれにせよ色欲のフルフルは龍撃槍を発動させる程の高度な知性を持ち、尚かつ古龍に挑もうとする好戦的で危険なモンスターであると認識され、少年は今まで以上にハンターに狙われるようになったのだ。以前とは違い研究者もこのモンスターは危険だと判断し、捕獲よりも討伐が優先されるようになった。所謂ハードモードだな、と少年は自虐的にそんな事を考えた。

そんなこんなで以前の住処では特定される可能性がある為、少年はハンターからの包囲網から逃れる為に少し離れた新しい森で住処を造り直す事にしたのだ。流石にこんな傷を負つた状態では立ち回りも難しくなる為、不意打ちも簡単にはいなくなる。今ハンターに追いつかれれば確実にやられる不安があつた。

だがどうやらハンター達も大分熱心に少年の事を探しているらしい。つい最近新しく見つけて住処にした洞窟もザザミ装備の姉妹に見つけられた為、もうあの場所で狩りをする事は出来なくなつてしまつた。少年は落ち込むように首を垂らした。

(どうしようかな……なんか着々と追いつめられてる気がしてやばいな。いつその事新大陸とかに行つた方が良いのか?)

最近逃げてばかりだなと思つた少年はふとそんな事を思いついた。

この大陸では無く全く新しい大陸。流石にそこまで行けば色欲の名もそこまで広まっていない為、ハンターに狙われ続ける心配は無い。まさに理想的な逃走案ではあった。だがそれは同時に自分が今まで積み上げて来た物を捨てる事となる。別段彼が誇れる程の何かを積み上げた訳では無いのだが、馴染んだこの土地から去るのはなんとなく寂しく思えたのだ。

そんな時ふとフルフル装備の子の顔が浮かんだ。何故彼女の顔が浮かんだのかは分からない。少年は意味が分からないとブツブツ文句を言いながら首を振った。

(まあ……もう少し様子を見ておくか)

結局大きな決断の前では思考を停止する事しか出来ず、ヘタレな少年は決断を先送りにする事にした。そうやって問題を先送りにすればどんどん溜まって行き、いずれ手遅れな事となる……彼はそれに気付けない。行き当たりばったりな事ばかりしている計画性の無い者は、己の過ちに気付く事は無い。



その日、森の中に住むドラゴンポスは新たな住人に警戒していた。巨大な木の上で眠るように座っている白い怪物、人間達の間では色欲のフルフルと呼ばれるモンスター。

奴は少し前からこの森に住むようになっていた。

別段ドスランポスはこのモンスターを嫌っている訳では無かった。モンスターとしては敵対しているが奴は縄張りをちやんと決め、複数の住処を所持していても、きちんとテリトリーを線引きしていた。つまり礼儀正しい常識を持った奴だったのだ。だから対峙する事も縄張り争いをする必要も無い、至って安全なモンスターであった。

このようなモンスターは珍しい方であった。今はハンターという存在もある為、モンスター達は安全な縄張りを巡っての争いが激しかった。かくいうこのドスランポスもつい先日別のドスランポスから縄張りを奪い取ったばかりであった。だからこそ、フルフルのような誰も使っていない縄張りを見つけ、誰とも争う事なく住処にするという平穩な解決策を使用したのが珍しかったのだ。

「グルル……」

ピクリとフルフルが動き、首を動かすと小さなうなり声を上げた。それが寝息だったのか、それともただのため息だったのかは分からない。だがドスランポスは警戒して自分が隠れていた草むらから移動すると別の草むらへと隠れた。用心にこした事は無い。あのフルフルは自分と同じくらい高い知性を持っているのだ、とドスランポスは警戒心を強めた。

ドスランポスは基本知性の高いモンスターとして知られている。行商人の集まりを

襲ったり、ランポス達を囮にしてハンターを襲うなど、悪知恵の働くモンスターであった。そしてこのドスランポスは更に用心深く、観察に優れた性格をしていた。その為、ドスランポスは目の前のフルフルが知性を持つモンスターだと見抜いていたのだ。

ある日、ドスランポスが新しく入って来たフルフルを見つけ、彼の様子を探る事にした。いずれ敵対する可能性もある為、敵情報 の 偵察として監視する事にしたのだ。その結果、ドスランポスはフルフルが女性ハンターを巧みな罠に嵌め、犯すという光景を目にする事となった。

ドスランポスは二つ驚いた。一つはフルフルが罠を使い、ハンターを陥れた事であった。通常フルフルは咆哮や電撃を使用して戦うモンスターのはずであったが、今自分の前に居たフルフルは丸太をダミーに使ったり、隠れて電撃を飛ばすなど卑怯な手を使っていた。とても通常のモンスターとは思えない行動であった。

もう一つはその後行動不能になった女性ハンターの服をフルフルが脱がせ始めた事だった。殺す訳でも無く、喰う訳でも無く、フルフルは女性ハンターを裸にし、弄び始めた。何故そのような事をするのか？モンスターとして明らかに不可解である。ドスランポスには理解出来なかつた。

結論、ドスランポスはこのフルフルを危険な存在として認識する事にした。どんな奇行をしようとハンター達を倒したのは事実であり、油断出来ない存在であるのは確かな

のだ。敵対する事は無かったとしても用心する必要はある。ドスランポスはそう考え、それ以降こうしてフルフルを警戒するようになった。

色欲のフルフルは知らない。周りのモンスターが自分の事を警戒している事を。ラオシャンロンを撃退した彼はモンスターの間でちよつとした有名人となっていた。言葉を交わす訳では無い彼らではあるが、共通認識としてある考えを抱くようになったのだ。——色欲のフルフルは異常である。

高い知性を持ち、女性ハンターを犯すという異常な行為。加えて自ら狩りをせず、死肉を漁るというだけの無気力な食生活。そのようなモンスターの本能として間違っている行いをしているフルフルは、モンスター達にはただただ異常にしか映らなかつた。このドスランポスも同様、フルフルの行為を理解出来ず、心の何処かでは不安を覚えている。

ハンターにも狙われ、モンスターからも警戒され始めたフルフル。彼の居場所は少しずつ無くなっていった。



蔓が密集した森の前で一人のハンターが立っていた。

一人は短い真っ赤な髪が特徴的な青年。リオレウス装備を纏い、背には太刀を装備している。それはかつて色欲のフルフルに戦いを意挑んだのあと時の青年で会った。だが不思議な事に以前は一緒に並んでいた妹の姿が無かった。

「色欲のフルフル……妹の敵討ちだ！」

実はこの青年、以前フルフルに妹を襲われた経験があり、その時の妹の屈辱を晴らす為にこうしてリベンジマッチをしに来たのだ。最初はまた妹と二人で挑もうとしていたのだが、妹が色欲には関わらない方が良いとやたら忠告する為、兄である彼は仕方なく一人で挑む事にしたのだ。

背の太刀の柄を撫でる様にそつと掴みながら青年は真剣な表情になる。彼は至って真面目であった。前回の時はあえなく電撃を喰らって一撃オチという体たらくを晒したが、その時だつて彼は真面目に戦っていた。ただちよつと抜けた所がある為、馬鹿っぽく見えてしまうのだ。

しかし今回の彼の目つきはいつに増してギラついていた。妹が居ない事から緊張感が増しているのか、雰囲気はただ事では無い事を物語っていた。

青年は覚悟を決めた様に一歩前へ踏み出し、森の中へと入って行く。しかしすぐに足をもたつかせ、盛大に転んだ。幸先が不安な踏み出しである。



## 14：妹の秘め事

少年の前には以前会った事があるリオレウス装備の青年が立っていた。

場所は少年が寝床としてしている巨大樹。森中を探しまわってようやく住処を発見した青年は巨大樹の前に堂々と立ち、くぼみに座っている少年の事を指差しながら太刀を引き抜いた。

「色欲!! いざ尋常に俺と勝負しろ!!」

そう言いながら青年はブンブンと太刀を振るった。それを木の上で見下ろしながら少年は思う。何言ってるんだコイツ？

先程まで眠っていた少年は青年の大声によつて起こされた。少年が起きるなり青年は勝負をしろと申し出て来る。その行為が理解出来なかった。何故自分が眠っている間に殺さなかったのか？何かプライドでもあるのか、卑怯な手は使わず、正々堂々と勝負する事に拘りを持っているのだろうか？基本卑怯な手しかない少年には青年の一連の行動がまるで理解出来ずにいた。

「どうした？俺と戦うのが怖いのか!! さあ来い、妹の仇を取ってやる!!」

全然降りて来ない少年に苛立ちを感じながら青年はそう声を荒げた。

妹というのはリオレイア装備のガンナーの女の子の事であろう。少年も彼女の事は覚えていた。故に青年がどうしてこの場所にやって来ていたのかも理解していた。単純なりベンジマッチ。それだけであろう。

(……………)

埒が空かないので少年は仕方なく身体を起こした。ただし戦う為では無い。首を伸ばすように動かすと口を開き、投げ飛ばすように電撃を飛ばした。バチバチと音を立てながら電撃は落下していき、そのまま青年へと直撃する。

まさか上から攻撃が振って来るとは思っていなかった青年は手足をバタバタと動かしながら痺れ、その場に崩れ落ちた。そして動かなくなった。

(これで静かになった……)

一応は療養中である少年はフンと鼻を鳴らすと再びくぼみに身体を埋めた。背中の挟られた部分は一応は塞がっているものの、それでもまだ僅かに痛みがあった。女の子を犯す時以外は出来るだけ動きたく無かったのだ。

それに今回は妹の方は居ないようであった。ならば尚更青年の相手をする必要は無い。何処か抜けている所もあるようなので、木に登って来るような事もしなさそうだ。少年は完全に舐めた態度で青年の事をあしらった。



家で留守番中であつた妹はマイルームでベッドに横たわりながら兄の事を心配していた。

彼女にとつて兄とは真面目でちよつと抜けた所がある何処か心配な男であつた。決して兄の事を嫌っている訳では無い。むしろ今までずっと一緒にハンター生活をして来たのだから、自分達の間には確かな絆があると自負している。だがだからと言って兄の事を完全に信じられる訳では無かつた。

「大丈夫かな……お兄ちゃん」

インナー姿でラフな格好になっている妹はベッドの上で転がり、今兄はどうしているだろうかと思像した。

色欲のフルフルは決して強いモンスターでは無い。恐らくは兄の実力でも十分倒せる程であつた。だが問題は色欲の高い知性、それによつて企てられる巧妙な罠。だまし討ちや不意打ちを苦手とする兄とは最も相性が悪い相手といえるであろう。何せあの兄はゲリヨスの閃光にすらろくに対処出来ないのだから。

一応報告では色欲のフルフルはハンターを殺さない、補食しないとされている。そ

れはハンター達からすればとても嬉しい話であろう。女性ハンターの場合は犯されるという事を覚悟しなければならぬが、命の安全を保証されているというだけで狩りへの恐怖はかなり軽減される。兄もリベンジは果たせなかったとしても、喰われはしないだろうと妹は考えた。何せ自身も色欲に犯されるというだけで補食されなかった経験があるのだから。

「……ん」

思い出した途端に身体の奥から熱を感じた。色欲に弄ばれた時の、あの激しい感触。もどかしさを感じた妹は自然と脚をせわしなく動かす。痒いのを我慢する子供のように、その仕草は明らかに何かを物語っていた。

気がつけば手は自然と下半身の方へと伸びていた。インナーの上から秘部を優しく触るように弄り、熱を収めようとする。だが指を這わせればする程妹の身体は熱を帯びるだけだった。

「はあ……はあ……」

口から吐息が漏れ、妹の頬は赤く染まっていた。どうしても抑える事が出来ない自身の欲望に困り果て、半ば諦めるように秘部を強く弄り始めた。

くちより、と音がする。それがインナーの濡れた音だと気付くのはすぐだった。妹は自分の指に付いた液体を見ながら恥ずかしそうに口を嚙んだ。

色欲に襲われて以来、妹の身体は火照ってばかりだった。奴の事を思い出す度に自身の身体にされた事を思い出し、つい欲情してしまう。思春期だから仕方ないと言つてしまえばそれまでだが、それでもやはり年頃の妹にとってはこの行為は恥ずかしいものであつた。

「んあ……我慢、出来ない……」

いくらインナー越しに秘部を愛撫しても熱は収まらない。それどころかもつと気持ちよくなりたい、と訴えるように身体は疼いていた。

いよいよ妹はパンツに手を入れ、直に秘部を弄り始めた。濡れている秘部はとてつもない熱を持つており、一瞬で妹の指をふやけさせてしまった。

「ひゃう……はあ……んっ……あ」

トロトロになつた秘部に指を挿入し、それを男の物だと思ひながら妹は行為を続ける。

脚を何度も動かし、ベッドの上に転がるように動きながら妹は喘ぎ声を上げていた。もしも兄が居たらとても出来ない行為。今彼が一人で狩りに行つてゐるからこそ出来る行為。妹は兄に申し訳なく思ひながら欲望を抑える事が出来なかつた。

愛撫はより激しくなつていき、妹の肩がせわしなく揺れ始める。彼女も限界を悟つたのか、目を瞑つて辛そうに声を上げていた。そして遂に、一瞬肩を揺らすと脚を閉じて

悲鳴にもならない声を上げた。

「……………ツッ!!」

秘部から愛液が漏れ、彼女のパンツとベッドのシーツを汚した。しばらく余韻に浸かっていた妹は一度小さく深呼吸をすると手を戻し、指に付いた自身の愛液を見た。そして恥ずかしそうに頬を染めると、掃除をする為に急いでタオルを取りに行った。

◇

空は暗雲に覆われていた。雨が降る訳でも無く、雷が落ちる訳でも無く、ただ光だけが遮られた暗闇がそこには広がっていた。気球船に乗っていた調査員はその異常なまでに静かな状況に困惑した。

いつもなら飛竜が空を舞い、地上では様々なモンスター達が顔を覗かせるというのに、今はそれが無い。生物らしき物が一切存在せず、まるでその暗雲が広がっている所だけ時が止まっているかのようだった。

「一体何が……?」

思わず調査員の男は疑問の言葉を呟いた。手すりを乗り越えてギリギリまで身体を下に覗かせ、一匹でも生物が居ないかを確認する。だがやはりそれらしき物は見つから

なかった。この異常現象には必ず何か理由がある。何か恐ろしい事が起こると調査員の男は感じ取った。

その直後、遠くから羽音が聞こえて来た。よく飛竜が横切った時に聞こえる翼を動かす音。だがいつもの音とは違い、その音には重みがあつた。

調査員の男は生物が居ると知つて少しだけ安堵し、何処に居るのかと辺りを見渡す。だがそれらしき影は無い。一体どこからこの音は聞こえてくるのか？そう疑問に思つたその時、気球船の上に何かが横切つた。

「……ッ!!？」

突風が巻き起こり、気球船が大きく揺れる。柵のギリギリまで居た調査員の男は思わず落とされそうになり、必死に柵に捕まって身体を支えた。

いくら飛竜と言えどこまでの衝撃波を起こせる物は居ない。一体何が起きたのかを確認する為に調査員の男は何とか身体を起こして上を見上げた。そしてそこには巨大な黒い龍が居た。

「龍……ッ!!」

それは正に龍と呼称するしか無い風貌をしていた。何か突飛した特徴がある訳でも無く、長い尻尾と大きな翼、黒い角を生やしたごく普通の龍。だがその龍は他の飛竜とは桁違いの恐ろしい雰囲気纏っていた。

その龍はすぐに暗雲の中へと隠れてしまう。調査員の男がそれを視認出来たのはほんの数秒であった。だがその数秒だけで調査員の男はあの龍の恐ろしさを完璧に理解した。古龍……人智を超えた力を持つ災害のような存在。アレは手を出しては行けない物である。

すぐにこの空域から離脱しなければ、と思った調査員の男は操縦室へと駆けた。だが突如気球船が大きく揺れ、船内が炎によって包まれた。そのままコントロールを失った気球船は落下していき、調査員の男の意識もそこで途切れた。

暗雲の中では黒龍が翼を羽ばたかせてその場に佇んでいた。口からは燃える炎が。墜落していった気球船を確認した後、黒龍は一度炎を吐くとすぐに口を閉じ、再び翼を大きく動かして移動を開始した。世界に、絶望が舞い降りる。



## 15：古龍降臨

伝説の龍。『黒龍ミラボレアス』の出現はすぐに大陸中に知れ渡った。

暗雲の中で目撃された巨大な龍の影。墜落した気球船の惨状。襲撃に遭った幾つもの村。それらの情報を照らし合わせた結果、ギルドはミラボレアスが出現した事を認めざるをえない事態となっていた。

つい先日ラオシャンロン襲撃があったというのにそれに呼応するかのようなのこの惨劇。否、もしかしたらラオシャンロン自体がただの序章だったのかも知れない。人々はただただ不安に襲われ、ギルドに救済を仰いだ。黒龍の出現はまさに世界を滅ぼすかも知れない危険性があるのだ。混乱が起こっても不思議では無い。

「有り得ない……伝説の黒龍だぞ？おとぎ話のモンスターだったはずだ！ ……現実なんだなんて」

「だが奴は実在した……我々は決断しなくてはならない」

案の定ギルド内は混乱に包まれていた。議員達はそれぞれの意見を言い合い、ある者は黒龍が出現した事を信じられず、それは迷言だと言った。だが既に幾つもの村が消え

去っている。森も破壊され、何頭ものモンスターも犠牲となった。この事実が議員達に現実を突き付けた。

「奴に敵うハンターなど居ない……騎士達でもだ」

一人の議員が頭を抱えながらそう言葉を零した。普段なら最初から諦めている発言は否定的に扱われるが、今回ばかりはその議員の発言に皆が同意した。

普通のモンスターならまだしも、相手は伝説の古龍。ハンターでも、騎士でも、どれだけの軍隊を集めたとしても、勝てる訳が無い。

「とにかく民衆を避難させなければならん……黒龍はこちらに向かっている。時間稼ぎが必要だ」

「だがどうやって？ 依頼書を出すか？ 受注するハンターなんて誰も居ないぞ」

ミラボレアスがこちらに向かっているという報告があった為、一人の議員は手を上げてそう意見をした。

不思議な事にミラボレアスは生物が生息している場所に舞い降り、そこで破壊活動を行っていた。その姿はまさに邪悪龍そのもの。そして次はとうとうこの街が標的となったのだ。

避難するのは当然。だが民衆の全員を避難させる時間は無い。その為議員達は何とかして時間を稼がなくてはならないと判断した。

「あいつを使おう……『最狂のハンター』を」

例え相手が伝説の古龍であろうと、例え相手がどれだけの数を誇ろうと、例え相手がどれだけ強大であろうと、恐れず立ち向かって行く存在が一人だけ存在した。ただしそれは決して正義などという生易しいものでは無い。狂気に駆られたただの化け物である。

議員達はその漆黒の女の子に助けを求める事にした。かつてたった一人で古龍を倒した実績がある彼女ならば、もしかしたらこの窮地を救ってくれるかも知れない。議員達はもう悪魔に頼るしか無かった。



とある森の中でフルフル少年はそのそと歩いてきた。最近ようやく傷が完治した為、ようやく問題無く散歩が出来るようになったのだ。だからと言って病み上がりの為、そこまで過激な運動はしない。彼は散歩がてら人里の様子でも見ようと丘の上を登っていた。すると彼はある少女と出会った。その少女は見た所ハンターではないよ。うなので、早速景気付けに遊んでやろうと思った近づいた時、彼はこの少女がとんでもなく厄介である事を痛感する事となった。

「あ、あ、あ、貴方が噂の色欲のフルフルですわね!? ……し、質問させて頂きます!!」

ギルド職員が着用する制服に赤い帽子を被った少女。肩ぐらいまで伸びた黒髪に、ぱっちりとした瞳をしている。手にはメモ帳を持ち、もう片方の手にペンを持っている。武器らしき物は見当たらない為、本当にただの一般人のようであった。

(なんだコイツ……?)

最初はこつそり近づいて襲おうと思ったのだが、相手は自分の存在に気付くなりメモ帳を開いて質問をさせてくださいなどと意味不明な事を言い出して来た。恐らく言葉通り意味なのだろうが、だとすればますます意味が分からない。少年は首を捻り、伸ばしかけていた尻尾を戻らせた。

「報告では貴方は人間と意思疎通出来ると言われています! 現に今貴方は私の言葉を聞いて動きを止めた……貴方は私達人間の言葉を理解しているのですわね!」

少年の動きが止まったのを見て僅かに笑みを浮かべてから少女はそんな事を言ってきた。肩を震わせながら、震える手で必死にペンを走らせている。随分と研究熱心のようである。

もしも少年が人間の心を持っていなければ、この少女はすぐに襲われてしまうのだ。もちろん少年は襲うつもりではあるが、それでも僅かに猶予が出来た。ここまでの危険を冒せる少女に少年は感心した。そして呆れもした。

(めんどくせえ……)

「ひ、ひいッ!」

意思疎通は出来るがだからと言って会話をするつもりは無い。そもそも言葉を交わす手段も持ち合わせていない。その為面倒臭く思った少年はさっさとやる事をやっつてしまおうと動き出した。

棒立ち状態だった少女を押し倒し、制服をビリビリと口で破き始める。少女は悲鳴の声を上げたが、逃げられない事は分かっているのか、ハンター達のように大暴れはしなかった。

服が破れて少女の素肌が晒される。服越しでは分からなかったが中々綺麗な肌をしていた。胸は少々小さく、細身な体つきで清楚そうな見た目をしている。だということにこんな危険を冒せるから人間とは見た目で判断出来ない。

少年は少女の真っ白な肌を舐めるように口で触れた。すると肩を震わせて少女は驚く様に反応を見せた。

「う、うう……こ、このままでも質問させてもらいますからね! 貴方は女の子を襲うという通常では見られない習性がありますが、これにはどのような意図があるのですか!?! ……あつ、ちよつと!」

制服を破られても少女は質問をやめない。ペンとメモ帳は持ったまま、必死に色欲の

事を知ろうと腕を動かしていた。だが少年もまたそれに応じるつもりは無かった。自分が何故このような事をするなど自分がしたいからとしか答えられない。何か最もらしい答え方があれば違うのだろうか、自分の勝手を押し通したい彼にとっては少女の質問はただ邪魔なだけだった。

「はうう……うあ……あ、貴方はハンターを殺さないどころか……モンスターすら殺さない……食事も死肉を漁るだけ、と報告があります……何故こんな……んツ……事をする？」

小さな胸を翼で揉むと感度が高い為か少女は顔を赤くして苦しそうに身体をよじらせた。今回は痺れも使っていない為に少々動いてやりづらい。そこでふと少年は気がつく。少し強めの痺れを使えば少女の口も回らなくなるのでは無いか？と。そうすればもうこのくだらない質問を聞かなくて済む。そんな事を思ったが、少年は何故か電撃を飛ばす事が出来なかった。面倒臭いし、言われてみれば何故自分はそんな事をするのだろうか、と思つた所があつたからだ。

「ひう、んツ！ ラオシャンロン撃退の際は……本当の功労者は色欲のフルフルだと主張しているハンターが居ます……あッ！　じ、実際、フルフルを見たと何人かの目撃者が居ます……真意はどうなのでしょうか!？」

乱暴に胸を揉まれ、時には体中を舐め回す様な事をして少女は構わず質問を続け

た。答えてもいないはずなのに何故かペンを走らせ、コクコクと頷いている。彼女からすれば何かしらの結果は手に入っているらしい。

増々面倒くさく思つた少年はこのまま快樂で少女を黙らせてしまおうと考え、彼女のズボンも下着も剥ぎ取つた。少女は顔を赤くしながらも視線だけはしっかりと少年に向け、質問を続ける。

少年は構わず尻尾で少女の秘部を弄つた。流石にここまで弄られると少女の口も回らなくなり始め、呂律が回っていない言葉使いになつてきた。こうなれば少しは可愛げがある。少年は尻尾を少女の口に押しつけ、無理矢理啞えさせた。それでももう喋る事は出来ない。

「むうー んむ……ん、ひゅ……んんんッ!!」

口を塞がれ、少女は苦しうに声を上げた。尻尾の代わりに翼で少女の秘部を弄る。すると質問が無くなつて快樂が集中してしまつた為か、彼女の秘部からは絶え間なく愛液が流れ始めて来た。

もう完全に出来上がっているようで、頬は真っ赤な林檎のように染まり、彼女の瞳もまどろみの中に溶けきつていた。少年はとどめを刺す為により一層翼を激しく擦り付けた。

「んんんんんんんんんんッ!!」

尻尾で抑えているせいで少女はろくに喘ぎ声も上げられず、苦しそうに暴れながら絶頂した。目を瞑って地面に倒れ込み、疲れた様に息を荒くしている。少年はそつと少女から離れると自分もまた疲れたように首を垂れさせた。よく喋る子だった為、色々と厄介であった。

ふと、少女がピクリと動いた。どうやら気絶していなかったようで、彼女は身体を震わせながらも何とか顔だけ起こし、手に握ったペンでメモ帳に何かを書きながら少年の事を見上げた。

「はあ……はあ……さ、最後の質問です。今街では『伝説の黒龍ミラボレアス』の話で持ち切りですが……これについてはどう思われますか？……うッ」

少女はそう言うのと動かしていた手を止め、ペンを落とすと今度こそ気絶した。倒れた少女は何処か満足げな顔をしている。少年は質問に一切答えなかったというのに。

そしてどうの少年は固まっていた。今、この少女は何と言った？黒龍ミラボレアス？それが街で噂されている……つまり、存在しているという事なのか？ただでさえフルフルの青白い肌から生気が失われた。

(は……う？ミラボレアス？……いや、え……？)

そういえば、と少年は思い出す。この所森が騒がしく、いつかの時のように逃げ出しているモンスターが何匹も居た。ある時は遠方の村があるはずの所から煙が立ち上つ



ている事もあった。という事はまさか？本当に？現れたとでもいうのだろうか。伝説の黒龍が。

（不味い、不味いってそれは……やべ、逃げないと。うん、逃げるしか無い）

当然少年は逃げるしか無いと判断する。気絶している少女をモンスターに襲われなさそうな場所に移動させると、すぐに森から出る為に走り始めた。

ミラボレアスの場合、以前のように様子見で近寄る事は出来ない。ラオシャンロンの時は巨大なモンスターだった為、ある程度観戦は可能だった。だがミラボレアスは別だ。ただでさえゲームでも一撃死という恐ろしい技を使うのだから、そんなのが現実で暴れたらひとたまりも無い。故にヘタレな少年は今すぐこの大陸から逃げなければならなかった。

当ては無い。名残惜しい事もある。だが少年は何よりも自分の命が大切だった。それにきつと自分が気に掛けているハンターの女の子達も逃げているはずだ。ギルドだって避難勧告をしているはずである。そう無理矢理思い込む事で少年は現実逃避した。だがそんな彼の前に一人の悪魔が舞い降りる。

（おづおッ!?!）

突如足に何かが引つ掛かり、少年は盛大に転んだ。比較的小柄なモンスターであるフルフルだがその巨体さなら十分転ぶだけで大きい音を立て、一度ひっくり返りながら少

年は地面に倒れた。痛む身体に耐えながら少年は首だけ伸ばして何が起こったのか確認する。すると少年の隣に見覚えのある少女が立っていた。

「久しぶり、色欲」

(な、何故お前が……?)

それはあの漆黒の女の子であった。真つ黒な鎧に黒いティアラを付けた赤髪の少女。手には赤々と光る剣が握られている。どうやらあの剣で引つ掛けられて転ばされたようだ。

少年はまさかの漆黒の女の子の登場に驚き、頬を引き攣らせた。対して漆黒の女の子は少年に会えた事に嬉しそうに頬を緩ませる。対照的な二人の表情であった。

「ねえ話があるんだ。ちよつと付き合つて？」

漆黒の女の子は剣をしまうと親指を後ろに差してそう言った。その申し出は少年には脅しに聞こえた。きつと断る事は出来ない。自分に拒否権は無い。少年はその事を感じながら静かに頷くと、身体を起こして少女の後に付いて行った。

## 16：運命の黒龍

フルフル装備を着た青髪の少女は大剣を担ぎながら森の中を歩いていった。この辺りは遺跡があつた場所の為、所々に欠けた柱や石像が転がっていた。女の子は綺麗な瞳を揺らしながら辺りに警戒を配っている。だがしばらくすると、彼女は小さくため息を付いて肩から力を抜いた。

「……おかしい」

一度まばたきをしてから女の子はそんな事を言い出した。首を傾げてもう一度辺りの気配を感じ取る。風の音、木の葉が揺れる音、草木のざわめき……やはり、おかしかつた。女の子は瞳を険しくして表情を曇らせる。すると丁度横の草むらから男性ハンターが現れた。

「どうしたんだ？」

「……生き物の気配が極端に少ない……何か、嫌な予感がする」

男性ハンターは以前ラオシャンロンの時にも共闘した彼であつた。腰には片手剣が、そしてオーソドックスなハンター装備を身に纏っていた。男性は女の子の言葉を聞いて

て同じ様に辺りに気配を配った。確かに生き物の気配が少な過ぎる。

普段なら小動物、時には大型のモンスターも徘徊しているはずのこの遺跡付近。今回は採集クエストの為に二人でのんびりとエリア探索に来ていたのだが、あまりにもモンスターとの遭遇の少なさに女の子は違和感を覚えていた。

「何か疫病でも流行りだったのか……それとも、凶悪なモンスターが現れたか？」

「多分、後者……」

考えられる仮説を立てて男性ハンターは指を二本立てながらそう言った。女の子もそれに同意し、恐らく後者であろうと顔を頷かせた。

女の子は薄々と感じ取っていた。何処か遠くから流れて来る強烈なプレッシャーを。ラオシャンロンと対峙した時以上の恐ろしい程の威圧感。それが少しずつこちらに近づいて来ていた。

女の子が険しい表情をしていたその時、空から気球船が近づいて来た。普段なら監視の為だけの気球船だが、その気球船は二人の近くまで高度を下げると一人のギルド職員が柵から身を乗り出し、二人に向かって大声を上げた。

「お二方！ 大変です！ 本部からの連絡で、もうじきこの近くに黒龍ミラボレアスがやって来るとの事です！ 街は既に避難勧告がされました。お二方もすぐにお逃げください!!」

そう言うや否や気球船は再び高度を上げ、すぐに飛去って行ってしまった。その報告を聞いた男性は硬直し、女の子の方も思わず目を見開いた。

黒龍ミラボレアスの出現……ラオシャンロン以上の衝撃に二人は思考を一瞬放棄してしまふ。おとぎ話の中だけのはずの存在が、現実へとやって来た。それも恐ろしい程の絶望をぶら下げながら。

「黒龍……だと？あの伝説の龍が現れたってのか？」

「……………」

「おいおい不味いぞ。伝承通りなら奴は人間もモンスターも構わず殺すはずだ。すぐに逃げないと」

男性はすぐにこの状況の深刻さに気がつき、逃走する事を提案した。もちろんこの判断は正しい。むしろ此処で戦うと言った方が間違っている。だが女の子の表情は芳しく無かった。何処か不満げで、今にも大剣に手を伸ばしそうな雰囲気だった。

「私は……黒龍と戦う」

「はあ!? マジで言っているのか? 無理だ。いくらお前でも伝説の黒龍相手じゃ……」

女の子の進言に男性は驚いたように目を見開き、無理だと説き伏せようとした。しかし女の子は横に首を振るだけで、断固として男性の忠告を聞こうとはしなかった。

「避難勧告を出されたからと言って街の人がすぐに逃げ切れる訳じゃない……だから、

時間を稼がないと」

何も女の子もミラボレアスを倒すつもりは無かった。ただ街の人が全員安全に逃げ切れる時間を稼ぎたい。それが彼女の本音だった。もちろん倒せるならばそれに超した事は無い。とにかく彼女は今此処でミラボレアスを食い止める事が最善策だと判断したのだ。

女の子はその場から歩き出し、遺跡が残っている場所へと向かい始めた。男性ハンターはその後を慌てて追う。

「お、おい！ 本気なのか!？」

「頂上には遺跡がある……そこにはかつて古龍と戦う為の要塞があった……あの場所ですらミラボレアスとも渡り合えるはず」

この山頂には遺跡が残っており、その場所には殆ど崩壊しているが要塞がある。そこにはバリスタや大砲も残っており、まだ活用出来る武器があった。それを上手く使えばミラボレアスを足止め出来ると女の子は判断したのだ。最も、彼女からすればこれらの武器はただの牽制に過ぎず、ミラボレアスの注意を引く為の役者でしか無い。彼女の本当の目的は自身が持つ大剣で奴の頭を叩き潰す事であった。

女の子が迷いもせず歩いて行くので男性も困ったように髪を掻いた。そして仕方が無いとも言いたげにため息を吐き、女の子の隣に立った。

「ッ！ ……分かった。だったら俺も付いて行く」

「……本気？無理しなくて良いんだよ」

「一番無理してるのはお前だろーが。平気さ。時間を稼ぐだけなら、何とかなる」

正直言つて男の足は震えていた。だが彼も自分よりも小さな女の子を一人で強敵に向かわせる程メンタルが強く無かった。一応は長い付き合いの為、このまま見捨てる事は出来ない。幸い時間稼ぎの為、立ち回りさえ警戒すれば何とかなるはずだ、と男性は前向きに考えた。

男性の言葉を聞いて女の子は嬉しそうに頬を緩めた。そしてまたいつもの無表情に戻ると、二人で歩き出す。目指すは、決戦の地。運命の決まる場所。



「どうしたの色欲？顔が白いよ？」

（それは元からだつっの……）

漆黒の女の子に命令され、何故か少年は彼女と一緒に何処かへと向かっていた。森の中を歩き続け、いつの間にか壊れた柱や石像がある遺跡のような場所にまで連れて来られた。まるで決戦の地のように、と少年は何処か嫌な予感がしていた。

ふと前方を歩く漆黒の女の子を見る。背後のモンスターが居るといふのに一切警戒心が無い。それだけ自分の事を信頼してくれているのか、それとも警戒しなくとも問題無いという自信の現れなのか……少年は複雑な気持ちになった。

本当なら付いて行かない事だつて出来たのだ。飛んで逃げれば良い。地を這うしか無い人間達は空に手を届かせる事は出来ない。だというのに少年は漆黒の女の子に付いて来てしまった。彼女のいやらしい身体に釣られて。少年は自信のヘタレさを呪った。

(つーか、どこに向かつてるんだよ?)

「ん?どうしたの?」

もちろん言葉が通じる訳が無い。少年が何か言いたげに口を動かしてそこから出るのは醜いうめき声だけで、それを聞いた漆黒の女の子は不思議そうに首を傾げながら可愛らしい仕草を見せるだけ。それをかれこれ数回は続けていた。

そしていよいよそれらしい場所まで連れて来られた。どうやら本当に自分達は遺跡がある場所に向かっているらしい。所々に壁が広がっており、槍や砲台らしき物がチラと見える。恐らく要塞があつた場所なのだろうと少年は推測した。

そして入り口のような門の前に着くと、女の子は一度足を止めて少年の方に振り返った。



「さて、と……話だったね。実は君にお願いしたい事があるんだ」  
(いや々な予感)

改まった漆黒の女の子に対して少年は冷や汗を垂らした。先程のギルド職員の子の発言と言い、辺りの遺跡のような場所と言い……何より少年のモンスターとしての勘が先程から何かを訴えかけていた。危険。とにかく危険。この場所に居る事が危険だと語っていた。

少年が表情を曇らせる中、女の子は口を動かして恐ろしい言葉を放つ。

「一緒にミラボレアスと戦って欲しい」

漆黒の女の子の言葉聞いた瞬間少年はダツシユで後ろへと逃げ出した。走りながら翼を動かし、跳躍して空へ逃げようとする。だがすぐに自身の足に違和感を感じた。殴られたのだ。剣で。刃の部分では無かったと言え、強烈な痛み少年は思わず悲鳴を上げ、跳躍も出来ずに地面へと崩れ落ちた。

「はい逃げない。全く、それでも男なの？あれ、フルフルに雄雌つてあつたっけ？」  
(ぐおおおおお……こ、こいつ、また俺の脚をおお……)

少年が脚の痛み苦しむ中、漆黒の女の子は鞘に剣を収めながらため息を吐いて彼の事を罵った。

少年は恨めしそうに女の子の事を見上げる。すると鎧の隙間から見える彼女の綺麗

な脚が見えた。こんな時でもそんな場所に目が行ってしまおう自分が情けなくなり、少年は呻き声を上げる。

「良い？ギルドは私にミラボレアス討伐を命じた。もちろん、あいつ等は私が黒龍を倒す事なんて期待していない。あいつ等はただ時間を稼ぎたいだけ。自分達が逃げる為のね」

（だったらお前もそんな命令無視して逃げれば良いだろーが）

漆黒の女の子は自分に課せられた使命を説明する。対して少年はそんな使命知った事かと汚い言葉を発した。当然通じない。そもそも女の子がそんな命令を聞かなければ良いのだ。拒否権があるのかどうかは知らないが、ミラボレアスが相手なら逃げたって仕方が無いはずである。奴はそれだけ危険な存在なのだ。

「ただだからと言って私ものこのこ逃げるのはつまらない。何よりあの伝説の黒龍ミラボレアスと戦えるんだよ？やらない手は無いでしょ」

何故か漆黒の女の子は頬を赤らめながらそんな事を言い出した。何をやるのかは知らないがとにかくミラボレアスと戦いたいのは本当らしい。相変わらず狂った奴だと思いつつ少年はため息を吐いた。だが彼女にも幾つのかの問題があるらしい。少年の方に振り返り、ビシリと指を突き付ける。

「でもいくら私でもミラボレアス相手に一人は厳しい……という訳で色欲、君も一緒に

戦つて?。」

(絶対断る)

言葉は通じないが動作だけでも分かるくらい少年は顔を歪めて咆哮を上げた。

何故彼女はキラキラと瞳を輝かせながらそんな事を言えるのだろうか? 相手は伝説の黒龍。ゲームでは一撃死の技を使う上に、相当なパワーを持っている。それが現実に住るといふのだから人間の手に負える訳が無い。ましてや自分はただのフルフル。下等生物である自分が伝説の古龍に挑むなど絶対に無理な話であった。

「もお、意気地なしだな〜」

少年の返答を聞いて不満げに目を細めながら漆黒の女の子はその場でクルクルと回った。何故回る必要がある、と少年は疑問に思ったが、意外と綺麗に回っていたので口出しが出来なかった。そして何かを閃いたように女の子が回るのを止めると、ニヤリと邪悪な笑みを浮かべて少年の事を見た。

「じゃあさ、見返りがあればどう?。」

(見返り〜?なんだよ、何かくれるのか?)

近づいてきながら漆黒の女の子は身体を寄せ付けるように尋ねて来る。その間に少年も反応は悪く無く、何か報酬があるのなら、と好意的に首を頷かせた。すると漆黒の女の子は突然鎧の胸部分を外し、自身の胸を少年の身体に押し付けた。

「報酬は私のカラダ……だったらどう？」

(……ッ!!)

ちらつかせるように衣服を摘みながら女の子はそう行つて来る。嫌でも見えてしまう胸の谷間に反応し、少年は慌てるように首を震わせた。その反応を見て女の子は悪戯が成功したのを喜ぶ子供のようによくクスクスと笑った。

確かに少年に報酬を与えるというのばらこれ程効果がある物は無い。何より漆黒の女の子はいやらしい体つきをしており、少年の好みにもピツタリだった。一度味わった……というよりは味あわされたという表現の方が正しいが、あの快感は中々のものだった。少年は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

(ぐっ……く……だ、だが相手はミラボレアス)

流石に少年も簡単には折れない。相手はラスボス級のミラボレアス。漆黒の女の子を好きなように出来ると言ってもそもそもは生き残らなければ報酬は貰えないのだ。流石に賭け過ぎる。デメリツトの方が大きい。

そもそも漆黒の女の子には勝算があるのだろうか？確かに彼女は驚異的な身体能力とモンスター並みにヤバイ感覚を持ち合わせている。だがだからと言って、神のような存在のミラボレアスに勝てるとは限らない。

そこでふと気がつく。別に勝たなくても良いのでは？要は生き残れば良い。ある程

度戦つて、漆黒の女の子がミラボレアスの実力を分かつてくれれば彼女も諦めてくれるかも知れない。その隙に逃げればちし解決。報酬だつて貰う事が出来る。

これは妙案なのでは、と樂觀的な少年はそう考える。もしも失敗した場合の事など考えず、この作戦で行こうと彼は決めてしまった。

(分かつた、乗つてやる)

「オツケー、つて事だね。宜しく、色欲」

了承した証として少年は翼を突き出した。漆黒の女の子はそれをイエスだと受け取り、自身の手を上げて握手を交わした。もちろん手を掴んだ訳では無いが、二人は此処で協力の証を立てたのだ。

遂に始まる。人間とモンスターの共闘が。そして、絶望の始まりが。

## 17：最終決戦

森丘のベースキャンプで二人の女性ハンターがぶつかり合っていた。一人はキリン装備を身に纏った銀髪の女の子。もう一人はナルガ装備を来た長い黒髪の女の子であった。

あろう事か二人は女同士にも関わらず唇を重ね合わせ、お互いの胸を押し付け合うように密着しながらベッドの上で絡み合っていた。しかしその瞳には愛と言った優しい感情は無く、まるで殺し合いでもしているかのように二人は恐ろしい雰囲気を漂わせていた。

「ん、ふッ……ん、はぁ……」

「ちゅッ……は、あ……んあ……」

舌同士を突き合わせ、お互いのを飲み込むように二人は濃厚なキスを交わす。既に二人の装備は半分ほど剥がれており、殆ど布だけが残った状態であった。露出の多い格好で肌同士を触れ合わせながら抱き合う。そして長い間お互いの唇を押し付け合った後、息が辛くなったのか小さく水音を立てて唇を離れた。

「ぷはッ……はぁ……はぁ……今日こそ、あんたとの決着を付けてやるわ」  
「んは……はぁ……望む、所……」

忌々しそうにナルガ装備の子を見ながらキリン装備の子は宣言する。対してナルガ装備の子も口元を手で拭いながら返事をした。

例のごとくあの二人、キリン装備の子とナルガ装備の子のコンビは今日、この場所で決着を付ける為に集まった。簡単な採集クエストだけ受け、目標を全部集めた後にベースキャンプで心置きなく戦う事にしたのだ。

色欲のフルフルに教われた時と言い、雪山での対決と言い、とにかくこの二人は反りが合わない。それでもかと言うくらい合わない。何度かは決着を付ける為に勝負をした事はあったが、それでも二人は納得の行く決着を付ける事が出来なかった。その為、こうして争いの始まりだったとも言えるエッチな事で勝負を付ける事にしたのだ。

おもむろにキリン装備の子は服を脱ぎ捨て、下着も脱いで裸となった。それに応じるかのようにナルガ装備の子も裸になる。巨乳と貧乳、二人の対照的な胸が向かい合う。二人はジリジリと近づき合い、ベッドの上に座った。そして脚を相手の方へと向けると、お互いの秘部を見せつけ合った。

「此処で勝負よ……どっちが女として上か、教えて上げるわ」

「……後悔しても、知らないから……」

内心ドキドキと胸を高鳴らせながらも相手を威圧する為に低めの声を出しながら視線をぶつけ合わせる。そうして二人はゆっくりと身体を近づけ合うと脚を交差させ、お互いの秘部を重なり合わせた。

「んっ……」

同時の声を上げるが、相手に感じている事を知られたく無い為に二人は何の反応も示さない。静かに重なり合った接合部分を見つめ、混ざり合っている愛液を見て顔を赤くさせた。

まずキリン装備の子がゆっくりと腰を振り始めた。それに続けてナルガ装備の子も腰を振り始め、二人の間で肉と肉が、秘部と秘部が、愛液と愛液が混ざり合ういやらしい音が響き始めた。

「んっ……んっ……はぁ、凄い……音……」

「はぁ……ん……濡れ……てる……ッ」

「そっちも……でしようが……ん」

ちゅぱちゅぱと水音を立てながら二人は秘部をぶつけ合わせた。突起したクリトリス同士が触れ合うごとに二人は肩を震わせて反応し、口から甘い声を漏らした。

ベースキャンプ内に甘い匂いが漂う。アイルーが居れば酔ってしまうのではないかと思うくらい漂っていた。二人は頬を真っ赤に染め、何かに取り憑かれた様に必死に腰



を振り続けた。

「はあっ……はあっ……ほら、感じてるんでしょ？」

「んっ……あ……違う……」

ビクビクと肩を震わせ始めたナルガ装備の子に対してキリン装備の子が意地悪そうに笑みを浮かべながらそう問うた。するとキリン装備の子は必死に首を横に振りながらそれを否定した。だがその動作を見て分かる通り、彼女は完全に快楽に負けていた。色っぽい表情をし、何かを物欲しそうに口を開けている。口では否定しているが、身体では完全に肯定していた。だがそれもキリン装備の子も同じであった。

秘部が重なり合う度にキリン装備の子も身体の芯から伝わって来る快感にうち痺れ、喉の奥から溢れて来る喘ぎ声を抑えるのに必死だった。少しでも意識を手放せばあつというまに快楽の虜になってしまう。ただの雌犬と成り下がってしまう……彼女は残っている理性を何とか保ちながら必死に快感に耐えていた。

「はあ……あ！ はっ……は、早く……イキなさいよお……!!」

「んっ！ く……んう……嫌……だ……ッ!!」

段々と腰を動かすスピードが早くなり、二人の接合部分は泡を吹き始めた。汗も大量にかき、ベースキャンブ内はまるでサウナのように熱くなっていた。息苦しさを覚えながら二人は顔を至近距離に近づき合わせ、睨みつけるように視線を交わす。

負けたくない。相手に勝ちたい。ただそれだけの思いで必死に腰を振り続ける。最早何故自分達が戦っているかなどの理由も忘れ、ただハンターとしての闘争に狩られながら混じり合っていた。

そしてとうとう、二人はぶつけ合わせていた腰を止めると、相手と抱き合いながら大きく仰け反った。

「ああああああああああああ……ッ!!!?」

大きく叫び声を上げながら二人は絶頂し、お互いの身体に愛液を掛け合った。抱き合った状態でブルブルと身体を震わせ、やがて力つきたように身体を離す。息を荒くしながら、二人は何か喪失感を覚えるように脱力して相手と視線を合わせた。

「はぁ……はぁ……」

「……また……引き分け……」

何度やっても、どれだけやっても、どの勝負でも、二人はいつも引き分ける。決定的な差を埋める事が出来ず、こうして今回もまた満足の行く結果が得られなかった。

二人は自分達の身体に付いた愛液を拭きながら、疲れきったように首を項垂らせた。

「何でいつも勝てないのよ……あんたみたいなチンチクリンなんか……」

「知らない……私だって不思議……」

キリン装備の子は服を着替えると不機嫌そうに声を漏らした。ナルガ装備の子に指

を突き付けながら、納得が行かないと意味の分からない言葉をつつける。ナルガ装備の子もそれには賛同しているらしく、服を着替えながら静かに顔を頷かせた。

「言つとくけどこの事他の奴らに絶対言うんじゃないわよ？こ、この行為はあくまでも私とあんたの勝負なんだからね……ッ？」

「分かつてる……」

最後に念押しするようにキリン装備の子はそう忠告した。

二人のこの行為はあくまでも白黒を付ける為の勝負に過ぎない。そこには決して愛など存在しないし、友情という物も存在しなかった。二人は同性愛者で無いし、もしも他の女とこのような事をしろと言われれば断固として首を横に振るう。二人でこの行為が出来るのは色欲のフルフルの件があるからに過ぎなかった。だが、僅かにナルガ装備の子は何かを思う様に口を開く。

「でも……私は貴方とこういう事をするのは嫌いじゃない……」

「な……ッ!?!」

突然のナルガ装備の子からの告白に驚いたようにキリン装備の子はそこから飛び跳ねた。

別に愛の告白という訳では無い。ナルガ装備の子はあくまでもこの行為が嫌いでは無いという事を言っただけで、仲良くしたいとかそういう感情は一切無かった。ただな

んとなくそう思った、それだけの事。でもその言葉には何だか他の意味も含まれているようにキリン装備の子には思えた。

「わ、私だつてその……嫌いじゃないけど……ああもう。良い？ あんたは絶対私以外の女とこういう事しちや絶対駄目だからね？ 分かった？」

「……うん、良いよ」

意味不明なキリン装備の子の注文にナルガ装備の子は少し笑つて答えた。何故か笑みが零れ、釣られてキリン装備の子も笑つてしまふ。

こうして二人の長かった勝負は緩和し、少しずつ二人は友達となつていった。



「あ」

遺跡がある山頂で二人の女の子が声を上げた。片方は漆黒の鎧で身を包んだ赤髪の女の子。もう一人は対照的に白を基調としたフルフル装備を身に纏い、長い青髪をした女の子。二人にはそれぞれ同行者がおり、漆黒の女の子はフルフルを、フルフル装備の子は顎髭を生やした男性ハンターを連れていた。

「……『最狂』」

「あー、最強だ。久しぶり」

二人はそれぞれ別の反応を示す。フルフル装備の子は最狂と称されている漆黒の女の子と遭遇してしまった事に最悪そうに表情を歪めた。対して漆黒の女の子の方は自分と同じくらいの実力を持っているフルフル装備の子との出会いに嬉しそうに頬を緩ませた。そしてそれぞれの同行人達も別々の反応を示した。

「なっ……色欲のフルフル!」

（げえええ。何でこんな時にこいつと会うんだよ……）

フルフル装備の子と一緒に居た男性ハンターはまさかの色欲のフルフルとの遭遇に驚きの声を上げ、思わず武器に手を伸ばしていた。だが漆黒の女の子と一緒に居たという経緯から二人の間に何かがあると悟り、すぐに行動は起こさない。幸いフルフルの少年もすぐに攻撃を仕掛けるような事はしなかった為、男性を刺激させずに済んだ。

「久しぶりじゃん。どうして君が此処に?ミラボレアスの討伐依頼でもされた?」

「違う……私達は自分の意思で此処に来た。少しでも街の人達の避難の時間を稼ぐ為に」

漆黒の女の子の疑問に対してフルフル装備の子は端的に答えた。それを聞いて漆黒の女の子は興味があるのか無いのか分からない反応をする。ただ鼻を鳴らして、フルフル装備の子の態度をじろじろと見るだけだった。

(またこいつはこんな事を……ほんと責任感強いな！)

そんな間で少年は相変わらぬフルフル装備の子に呆れていた。

別段付き合いが長い訳では無いが、フルフル装備の子は出会う度に危険な事をしていく。最初の時は一人でティガレックスと戦い、ババコングに蹂躪されそうになっていた。次に会った時は仲間と離された彼女は一人でラオシャンロンに挑もうとしていた。そして今回も、自分は避難せずにミラボレアスと戦おうとしている……そんな彼女の勇ましい姿を見て少年は何だか複雑な気持ちになった。

「貴方の方こそ……何故色欲と？」

次に質問したのはフルフル装備の子だった。少年の事を指差し、首を傾げながら漆黒の女の子に尋ねる。警戒した素振り無く、ただ単純に色欲のフルフルがこの場に居る事が不思議そうであった。その代わり隣に居る男性ハンターはもの凄く警戒しているが。

「手を組んだの。私の身体を報酬にする代わりにミラボレアスと一緒に戦うってね」

「……そう、また貴方はそうやって」

(え……ちよ、何その目?)

漆黒の女の子のオープン過ぎる返答を聞いてフルフル装備の子はジト目で少年の事を見た。そんな視線を突き付けられて思わず戸惑ってしまった少年は助けをこうよう

に漆黒の女の子の事を見る。だが彼女はクスクスと笑うだけで、事実じゃんとうしうも無い正論を返して来た。

「……まあ良いよ。戦力が多いのは嬉しいし」

「あれ、私達と協力するの？ 記憶が正しければ君は私の事が嫌いだったと思うけど？」  
「今はそんな事言つてられないでしょ……相手はあのミラボレアスだし」

フルフル装備の子の言つた言葉に対して漆黒の女の子は確かにと付け加えながらどこか余裕の無い表情を浮かべた。やはり最狂と称される彼女でも伝説の黒龍を相手にするとなると緊張するのか、いつもの余裕の態度が無かつた。

「この遺跡には古龍用の兵器がたくさんある……それを上手く使おう」

「それはそつちに任せるよ。私はそういうの苦手だからね」

「私も……じゃあ色欲達がバリスタとか使つてね」

（よりによつてモンスターにやらせるのか。それを）

普通逆だろう、と思ひながらも一応手先が器用な少年は了承する。おまけと言わんばかりに隣の男性ハンターも頷いた。どうやら女性陣は己の武器だけでミラボレアスと対峙するつもりらしい。どんだけ男前だよ、と少年は自身のヘタレさを痛感しながらそんな事を思つた。

隣の男性ハンターは片手剣である為、恐らくサポート重視のハンターなのだろう。だ

というのにモンスターである自分は……。少年は珍しくネガティブだった。

それぞれが配置に付く。ミラボレアスに自分達の存在を知らせる為に漆黒の女の子とフルフル装備の子は松明を炊き、空からでもすぐ分かるように煙を立ち上らせた。男性ハンターは大砲やバリスターの弾を準備し、兵器がまだ使えるかなどのチェックをしている。そして少年は、さしてやる事も無いのでどうやって逃げるかの算段を立てていた。

(流石にハンター三人乗せては逃げられないしな……。だからと言って見殺しも出来ないし……。何とかやり過ぎず方法は無いのか?)

この後に及んでも逃げる事を前提としてるヘタレな彼は完全にミラボレアスと戦う気など無かった。彼はどうやって漆黒の女の子を無事に逃げさせ、報酬を貰う事が出来るか?という事しか考えてなかった。本来なら頃合いで漆黒の女の子と連れ去る予定だったが、新たに二人のハンターが加わった為、それは出来ない。更に言うなれば気になつているフルフル装備の子も居る為、なお逃げられない状況となつてしまった。

そんな風に悩んでいたその時、突如遺跡が黒い影に覆われた。

「……………ッ!?!」

「来た……………!」

フルフル装備の子と漆黒の女の子が声を上げ、すぐに火元を消すとその場から散つ



た。男性ハンターも抱えていた大砲の弾を下ろすとすぐにバリスタが設置されている場所まで移動する。そして考え事をしていた少年も正気に戻り、自分ほどの立ち位置に居れば良いんだと戸惑いながらもなんとなくそれっぽい場所に移動した。

上空から風が吹いて来る。やがて暗雲の中から漆黒の龍が現れた。――龍。ただ龍としか言えない実にシンプルな姿をしたドラゴン。

少年は初めてゲームでミラボレアスを見た時、これがラスボスかよ、と舐めた態度を取った事を思い出した。だがこうして画面越しでは無く間近で見える事によつて初めて伝わって来る。化け物じみた恐ろしい形相、悪魔のような翼、仰々しい牙と角……ああこれは夢だ、と彼は現実逃避をした。

(まあその後ゲームでボコスカにやられて三乙したんだけどさ……)

こうしてまだ頭の中で軽口を言えるのは自分も少しはメンタルが強くなったからか、それとも現実逃避のし過ぎで頭がおかしくなったのか。不思議と落ち着いている少年は自分が今震えている理由が分かった。モンスターとしての本能が訴えている。アレに歯向かつてはならない。アレに関わってはならない。アレに牙を剥けてはならない。まるで幼い頃から誰かに言われて来たかのように訴えかけて来る謎の感情。恐怖。

絶望が舞い降りる。運命の黒龍ミラボレアス。遺跡へと降り立った怪物はまるで分かっていたかのように待ち受けていたハンター達に咆哮を上げた。フルフルよりも恐

ろしく強烈で、プレッシャーのある咆哮。  
少年は思わずちびった。

## 18：別れ……

ミラボレアスのけたたましい咆哮はまさに天変地異を起こす程の威力だった。地響きが起こり、遺跡にヒビが入り、山頂が崩れてしまうのではないかと思うくらい影響が及んだ。

少年は倒れない様に壁に身体を寄せながらなんとかそれに耐えた。そして威嚇が終わったミラボレアスは改めて自身の獲物達に目をやった。

人間が三人、モンスターが一匹。普通ならこの組み合わせは不思議に思う所だが、破壊本能だけしか無いミラボレアスにはさしたる疑問は無かった。ただ破壊する。切り裂き、踏みつぶし、噛み砕く。ただそれだけ。血走った瞳で獲物達を睨み、ミラボレアスは動いた。

「来るぞ!!」

ミラボレアスの動きに気がついて男性ハンターが周りに注意を促す。それに反応して漆黒の女の子もフルフル装備の子もそれぞれの武器を構えた。

ミラボレアスの長い尻尾が遺跡を破壊する。殆ど崩壊している建物が跡形も無く砕

け散り、辺りに瓦礫を飛ばしながら尻尾が通過した。女の子達は身を低くしてすぐに躲す。男性ハンターも射程内から出る事によって回避した。だが少年だけは。

(ゴ)ぶばアツ!!)

「色欲……ッ!？」

ただでさえ重たい身体で俊敏な動きが出来ない為、反応が遅れて少年は避ける事が出来ずにミラボレアスの尻尾を喰らう羽目となつてしまった。建物を破壊する程の威力を持つその尻尾は少年の身体に食い込み、メリメリと嫌な音を立てて彼の身体を吹き飛ばした。

壁に激突し、煙を上げながら少年は崩れ落ちる。腹部から伝わって来る痛みを耐えながら、彼はだらしないうめき声を上げて苦しんだ。

(ゴ)ほッ……ちよ、ま……いきなりかよ……!?)

決して油断していた訳では無い。そんな物ミラボレアスを前にした瞬間に吹き飛んだ。だが、だというのに、こないきなりという事があるだろうか？気がつけば横から影が通り過ぎ、ミラボレアスの尻尾が自分の身体に食い込んでいた。それくらい一瞬の出来事だったのだ。少年は完全にミラボレアスの動きに付いて行けてなかった。

まずは一匹と言わんばかりにミラボレアスは咆哮を上げた。男性ハンターはすぐにバリスタを起動させると矢をミラボレアスに向けて放った。だが矢は漆黒の鱗によつ

て弾き飛ばされ、何の傷も付けない。ミラボレアスはギョロリと男性ハンターの方を向くと、その血走った瞳で彼の事を視界に捉えた。

「バリスタが効かねえ……ッ!!」

「逃げて……来る!!」

男性ハンターは負けじとバリスタを撃ち続けるがやはり効果が無い。そしてミラボレアスの身体に異変が起こった。痛みを感じた訳では無い。まるで何かを蓄えているような、そんな動作。それに気がついた瞬間、フルフル装備の子は声を上げて男性ハンターに逃げるように促した。だが男性ハンターにその声は届かない。

「ゴアアアアアアアアアアアア!!」

ミラボレアスがめいっばい口を開けて咆哮を上げた。次の瞬間、その口から大量の炎が吐き出され、男性ハンターの視界は紅蓮で埋め尽くされた。

豪と大きな音を立てて遺跡の一部が炎に包まれる。ほんの一瞬。僅かな動作。たったそれだけのミラボレアスは遺跡の一部を黒ずみにし、跡形も無く破壊してしまった。

そして炎が収まった後、その場には男性ハンターの姿も、設置されていたバリスタも無くなっていった。

「……ッ!!」

「集中して。油断すれば君もあの男みたいになるよ」

「……分か、ってる」

思わず瞳に涙を浮かべてフルフル装備の子は硬直した。

分かっていた事ではあった。相手はあのミラボレアス。こうなる事は十分承知していた。彼もそれは分かっていたはずだ。だが、こうもあっさりなど有り得るだろうか？あまりに非常な現実を受け入れきれず、フルフル装備の子は敵を目の前にしながら動きを止めてしまった。

それを見た漆黒の女の子は注意を飛ばし、フルフル装備の子も正気に戻って目に浮かんでいた涙を拭いた。今は、悲しんでいる暇は無い。

「やってくれるねえ、ミラボレアス……ほんと、ゾクゾクして来るよ」

舌で唇をペロリと舐めながら漆黒の女の子はそう言い、剣と盾を構えた。走り出し、臆する事なく真っ直ぐミラボレアスへと向かって行く。

ミラボレアスは再び大きく息を吸い込み、力を蓄える動作をした。その瞬間漆黒の女の子は壁に身を隠す。フルフル装備の子も射程外へと逃げた。

遺跡の一部が炎で包まれる。だが壁を盾代わりにした漆黒の女の子は無事で、炎を凌いだ彼女は攻撃が終わると再びミラボレアスに向かって走り出した。

躊躇しない。例え黒龍であろうと弱点さえ潰してしまえば終わる。それはどのモンスターでも同じ事である。

地面を蹴って跳躍した漆黒の女の子はまずミラボレアスの背に乗った。暴れるミラボレアスに捕まりながら女の子は剣を突き刺す。だが通らない。やはり硬い漆黒の鱗で覆われている背中では簡単に引き裂く事は出来なかった。だがそれも承知の上。ならばと漆黒の女の子は再び跳躍し、ミラボレアスの首まで移動すると盾を投げ捨てて再び跳躍した。

「せええ……りゃッ!!」

宙へと身を委ねた彼女は回転しながらミラボレアスの頭部へと近づく。そしてほんの少しだけ交差した瞬間、漆黒の女の子はミラボレアスの片目に剣を突き刺した。

いくら強靱な鱗を持つミラボレアスであろうと眼球を守る事は出来ない。弱点を付かれたミラボレアスは甲高い咆哮を上げ、身体をよじらせて暴れた。

「ゴアアアア……ッ!!」

「……くっ!」

ミラボレアスが暴れた際に翼に引つ掛かり、漆黒の女の子は地面に着地した瞬間に痛そうに肩を抑えた。更に最悪な事にその手には剣が無い。彼女の剣はミラボレアスの目に突き刺さったままだった。

武器が無い状態で敵と対峙するのは非常に危険である。そしてそれを分かっているのか、暴れながらもミラボレアスは漆黒の女の子に向かって尻尾を振り下ろした。

(あぶ……ねえ!!)

「色欲……!」

突如横から少年が乱入し、口で漆黒の女の子の事を持ち上げるとそのまま横へと飛び出した。ギリギリの所で尻尾を回避し、転がるように滑り込みながら少年は撤退する。漆黒の女の子も無事で、口から離された彼女は驚いた表情をして少年の事を見た。

「色欲、援護して!」

だがそれも束の間、すぐにフルフル装備の子から声が掛けられる。フルフル装備の子は大剣を担ぎながらミラボレアスへと向かうと、迷う事なくその巨大な鉄塊をミラボレアスの尻尾に向けて振り下ろした。

ガツン、と痛々しい音が響き渡るが、わずかに尻尾に切れ目が出る。真っ赤な血がフルフル装備の白を汚し、女の子の頬に返り血が掛かった。

(んな事言われても……!)

援護をしろ、と言われても少年はそのような連携をした事が無い。とりあえず暴れているミラボレアスに電撃を飛ばすが、効果は無いようであった。流石は黒龍。痺れも全くなか、と自嘲気味に少年は思うが、それでも何もしないよりはマシだろうと前向きに考える。

フルフル装備の子は上手く立ち回っていた。大剣でありながらも俊敏な立ち回りで



ミラボレアスの死角に入り込み、チビチビであるが着実にダメージを加えていつている。ミラボレアスも片目を失っている為、精神的にも大分ダメージを負っている様子であった。だがやはり古龍が相手では簡単にいかないらしい。フルフル装備の子の表情にも焦りが見えていた。

「はぁ……はぁ……」

（不味いぞ……逃げろ!!）

フルフル装備の子動きに衰えが見え始めた。スタミナ切れだ。すぐに少年は咆哮を上げて逃げるように伝えるが、言葉は通じない。その咆哮が何を意味するのはフルフル装備の子には伝わらなかった。

彼女の横から尻尾が現れる。人間からすれば巨大な尻尾を叩き付けられたフルフル装備の子は簡単に吹き飛ばされ、その小さな身体を回転させながら壁に激突した。ズルズルと崩れ落ち、持っていた大剣も離してしまう。

（なっ……あ……!）

「あ……これはヤバいねえ。うん、本当にヤバい……流石は伝説の黒龍と言うべきか。ここまでだなんてね……ゾクゾクを通り越してビクビクしてきた」

死んだかどうかは分からないが着実に再起不能の状態となっていた。男性ハンターも倒され、フルフル装備の子もこれ以上の戦闘は不可。こうなったらもう少年と漆黒の

女の子だけが頼りであった。だが知つての通りヘタレな少年に戦闘は期待できない。更に隣の漆黒の女の子は現在武器が無い上に肩を負傷している。最悪の状態であった。

「やるしか無いね……色欲、援護頼んだよ」

（い、いや、やるつてお前……武器はどうすんだよ？）

「あ、今武器はどうするつて顔したね？何となく分かつたよ……大丈夫、自分で何とかするから」

流石に少年の慌てぶりから意味が伝わつたらしく、その事に嬉しそうに頬を緩ませながら漆黒の女の子は少年を安心させるように笑つた。そして彼女は迷いなく走り出す。とりあえず少年も言われた通り電撃をミラボレアスに飛ばす事で援護した。

とにかく今は距離を空けながら漆黒の女の子に注意が行かないようにミラボレアスを攻撃するしか無い。それが少年の必死の策であった。

武器を持たない彼女は本当に怖く無いのか、それとも狂っているのか、笑いながらミラボレアスに向かって行つた。背中へと飛び乗り、再びミラボレアスの頭部に向かって跳躍する。そして宙を舞いながら女の子は手を伸ばし、ミラボレアスの片目に突き刺さっている自身の剣を引き抜いた。

「もう片方も……貫うよ!!」

再び剣を取り戻した漆黒の女の子はそう言う縦に剣を振り下ろし、ミラボレアスの



(んな事言ってる場合じゃねーだろ!?)

とりあえず漆黒の女の子はこれ以上の戦闘は無理。フルフル装備の子も同様。この後をどうするべきかと少年は周りの状況を確認した。

ミラボレアスは視界を塞がれ完全に混乱状態になっている。奴はどれ程鼻が効くかは分からないがしばらくは自分達の存在には気付けないだろう。ならばもう逃げても良いのでは?と少年は一瞬そんな事を考える。

こちらは既にボロボロ漆黒の女の子も傷も深いしフルフル装備の子も気絶している。ならば逃げたって問題は無いだろう。

時間ならもう十分に稼いだ。それどころかミラボレアスの両目を潰したのだ。戦果としては大き過ぎる程である。もう良いだろう。最初からあんな化け物を倒せる訳が無かったのだ。これで十分。少年は自分に言い聞かせる。だが彼は目にしてしまった。暴れ回るミラボレアスが口から炎を吐きながら辺りを地獄に変えている事に。

(もしもアレがあのまま暴れれば……森はもちろん、その内街にも被害は回るよな……) 視界が見えなくなつたと言えどミラボレアスの脅威は消えない。それどころか混乱している今の奴はより危険な存在となつたと言えるだろう。なりふり構わず、周りの被害など関係無しとにかく暴力行為を振るい続けているのだ。正に災害そのものである。そんなのがもしも街まで辿り着けば……一体どうなってしまうのか?・

少年はふと先程の男性ハンターの事を思い出した。あまりにもあっさり、無情な程に殺されてしまった男性ハンター。彼は決して油断などしていなかったし実力も十分だった。だというのにあんな……簡単に。

もしも街に辿り着けばあのような行為が繰り返されてしまうかも知れない。少年は初めて責任を感じた。

(今なら……やれる……)

両目を潰されて混乱しているミラボレアス。奴を倒せるチャンスは今しか無い。再び冷静さを取り戻せば今度こそ倒せる機会は無くなる。今しか無いのだ。唯一殺せる瞬間。唯一隙がある状態。そしてそれを行えるのは……自分しか居ない。少年は身震いした。

決して正義の心に目覚めた訳では無い。ただ彼の肩には責任が押し掛かっていた。一人の男性ハンターが犠牲となった。一人の少女が傷を負った。一人の少女が動けなくなった……こんな惨状を目にすれば誰だって責任を感じる。彼は今、ようやく一人前の人間としての行動を取ろうとしていた。

少年は隠れていた壁から出ると目的の物を取りに行つた。フルフル装備の子が持つていた大剣である。気絶している彼女の元まで走って移動すると、落ちていた大剣を口で拾い、まるでハンターが構えるかのようにそれを啞えた。

この鉄の塊ならばミラボレアスの腹を貫けるはずである。硬い鱗がある背中なら難しいが、暴れている今なら腹を狙えるはずだ。加えてモンスター筋力で大剣を震えば威力はハンターの比では無いはず。これが彼が考えた最後の作戦であった。

丁度その時、気絶していたフルフル装備の子が目を覚ました。だがダメージが大きいのか身体を震わせて苦しそうに少年の事を見上げている。

「色……欲？」

（悪いがこの剣借りるぜ。あー、返せないかも知れんが……それはめんご）

大剣を借りるという趣旨で翼を動かして大剣を指差し、少年は自分の意思を伝えた。するとそれが伝わったのか、フルフル装備の子は目を見開くと駄目とでも言うように首を横に振って手を伸ばそうとした。だがその手は届かない。

「だ、駄目だよ……そんな事したら、貴方が……」

これから少年がしようとしている事を理解し、フルフル装備の子は止めようと身体を起こそうとした。しかし身体は言う事を聞いてくれない。立ち上がろうとしても力が入らず、再び地面へと崩れ落ちるだけだった。

そんなフルフル装備の子の頭を翼でポンと叩いた後、少年は大剣を啜えたままミラボレアスの方へと向かって歩き出した。

（じゃな……）

最後にそれだけ言い残し、彼はずんずんと歩いて行く。遠くなって行く少年にフルフル装備の子は必死に手を伸ばした。やっぱり届かない。フルフル装備の子は涙を流しながら必死に声を張った。彼の名を呼ぶ。それも届かない。

ミラボレアスは相変わらず暴れてばかりだった。だが少年が近づいて来た事に気がつくのと、目を瞑りながらも感覚で相手の居場所を感じ取っているのか、少年の方に顔を向けて低い唸り声を上げた。思わず少年は一步後ろへ下がってしまう。だが逃げる訳には行かない。覚悟を決めて大剣を強く啞え直し、ミラボラスと対峙した。

「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ミラボレアスがこれまでに一番大きな咆哮を上げた。辺りの瓦礫が揺れ、遺跡が崩壊してしまいそうな程の衝撃波が飛んだ。だが少年は引かない。大剣を構えて走り出すと、真っ直ぐミラボレアスに向かって突き立てた。

ミラボレアスが炎を吐く。少年の身体に擦る。少年は引かない。大剣がミラボレアスの腹に突き刺さる。

全てほんの一瞬の出来事だった。大剣をミラボレアスの腹に突き刺すと同時に少年は更に強く大剣を押し込み、ミラボレアスに突進を喰らわせた。ミラボレアスは甲高い悲鳴を上げてのたうち回る。暴れに暴れ、爪が、牙が、尻尾が少年を襲った。だが少年も離さず、更に深く大剣を突き刺した。

バキリ、とミラボレアスと少年が立っていた地面にヒビが入った。散々暴れた為か山頂の一部が崩壊し始めたのだ。そのまま雪崩のように地面の一部が崩れ始め、その崩壊にミラボレアスと少年は巻き込まれて行つた。いくら翼を持つモンスターと言えど突然の土砂崩れ、加えて戦闘中だった為、岩に挟まれながら二匹は落下していった。

「色欲……ッ……!!」

その光景を見ていたフルフル装備の子は少年の名を呼んだ。

岩が崩れ落ちて行く音にその声は消され、少年の姿も見えなくなつて行く。ミラボレアスと少年の姿は完全に闇の中へと沈んで行つた。

戦いは実にあつという間に終わつてしまった。フルフル装備の子は土砂崩れが収まった後も放心した状態で、一体何が起きたのかが理解出来ずに居た。ようやく身体が動けるようになるも身体を起こし、立ち上がつて崖になつている山頂の一部を見下ろした。深い深い闇が広がっている。こんな所から落ちればひとまりは無いであろう。終わつてしまったのだ。全て。

フルフル装備の子は小さく涙を零した。その涙は風に吹かれ、何処かへと飛んで行つてしまった。





## 調査報告第二レポート。

“黒龍ミラボレアス”は北北東の古代遺跡にて消息不明。此処では三人のハンターと“色欲のフルフル”による共闘が行われたらしく、遺跡の一部は崩壊し、土砂崩れが起こったされる。ミラボレアスとフルフルはこれに巻き込まれた模様。

この戦闘で一人の男性ハンターが死亡。彼の亡がらは回収出来ず、唯一残った彼の武器が遺品として家族に送られた。

また“最狂のハンター”も重傷を負い、後遺症を残してしまった。昔のようなハンター生活は出来ないと思われる。現在は療養しながら各地の村を点々としている噂が有力。

“最強のハンター”も負傷はしたものの無事ハンターに復帰。ミラボレアスの撃退の功労者として崇められ、議員達から報奨金を与えられた。だが本人はこれを拒否。被害にあった街や村の再興として使つて欲しいという意思が強かった為、本人の意向を汲む事となった。

後日、古代遺跡で調査が行われ、崖崩れがあつた場所を調べる事となった。落下場所にはミラボレアスの死体があり、胸には報告にあつた通り大剣が突き刺さっていた。だ

が奇妙な事に色欲のフルフルの死体は発見出来なかった。

近くで飛竜の足跡が確認されがそれがフルフルと同じ物かどうかは定かではない。調査員はより細密な調査をする必要があると判断したが、ギルドはこれを拒否。街の復興などに資金が当てられた為、これ以上の調査を望む事は出来なかった。

結果、ミラボレアス死亡。色欲のフルフルも死亡扱いとされた。

此処からは個人的意見とする。

私は色欲のフルフルは生きていると思う。三人のハンターと共闘したという報告をギルドはただの偶然だ、と判断したが、私は三人のハンターの内の誰かが色欲と意思疎通を計り、協力を煽ったのだと推測する。

色欲のフルフルは我々の言語を理解している節がある。私は何度か色欲の生態を調査していた為、彼の人間らしい仕草や行いなどに度々疑問に思っていた。もしかしたら彼は突然変異によって生まれたモンスターの新しい“形態”なのかも知れない。

ラオシャンロンンの出現、ミラボレアスの降臨、その中心にはいつも色欲のフルフルが居る。彼が時代の真ん中に居るのだ。ひよっとしたら、我々は新しい時代が誕生する瞬間を目撃していたのかも知れない。

少し話が逸れた……とにかく私は色欲のフルフルが生きていると思う。ので、もう少しだけ個人的に調査をしたいと思う。

以上で報告を終了する。



「……という事で、私は色欲のフルフルは生きていると思うんです。彼と最も接点がある貴方なら何か知っていると思うんですが……その辺りどうなんでしょうか？」

あれから十年が経った。ミラボレアスの襲撃事件も少しづつ人々の記憶から薄れ始め、街の復興もようやく一団欒付き、世界は落ち着きを取り戻していた。

そして今日、ある一人の女性の家でギルド職員の赤い制服と帽子を身に纏った女性がある取材をしていた。メモ帳を片手に、もう片方の手で握っているペンを走らせ、一言一句逃さないように筆を走らせている。彼女はかつて色欲に犯されながらも取材したという偉業を残したギルド職員の少女であった。

「懐かしい話だね……もう十年か……」

質問を受けている女性、長い青い髪を垂らし、少しつり目な美しい瞳をした女性。彼女はあのフルフル装備の女の子であった。

十年が経ち成長した彼女はすっかり大人となり、背も伸びて身体付きも大人の物へと変化していた。首筋や頬には切り傷の跡があり、あの後も相変わらずストイックなハン

ター生活をしていた様子が窺える。もうハンターは引退したのか、フルフル装備は着ず、白いワンピースのような衣服を着ていた。

そんな彼女は色欲のフルフルの話をされ、懐かしそうに頬を緩めて笑みを零した。

「率直に聞きます。あれから貴方は色欲のフルフルと会いましたか?」

「会ってないよ……そもそもあいつは死んだんじゃないの?」

「私はそうは考えてません」

ギルド職員の女性の質問に対して青髪の女性は静かに首を横に振りながら答えた。その答えに対してギルド職員の女性は目を細くしながらペンを動かし、メモ帳に何かを書き込んでいる。

どうやらギルド職員の女性はまだ色欲のフルフルが生きていると考えているらしく、それで色欲と接点が多かった彼女の元へとやって来たらしい。

青髪の女の子はお茶を入れたコップを握りしめながら小さくため息を吐いた。

十年……あれからもう十年も経ってしまったのか。青髪の女性はおもむろに家の壁を見た。そこにはあの時の大剣が飾られていた。ミラボレアスに致命傷を負わせたと思われる大剣。女性からすればこれは単なる愛用していた剣であるが、ギルドの職員達がやたら大袈裟に言う為、こうして家の壁に仰々しく飾る羽目になっていた。だが彼女は時々思い出す。あの大剣を啜えてミラボレアスに立ち向かって行った色欲のフルフル

の事を。

「お母さん」

ふと、部屋に第三者の声が響いた。青髪の女性が振り返ると丁度扉の前に少女が立っていた。

肩まで伸ばした青色の髪に、青髪の女性と同じ様に若干つり目な美しい瞳をした少女。彼女はその丸い瞳をコロコロと揺らしながら手を伸ばした母と呼んだ青髪の女性へと抱きついた。

「あれ、どうしたの？お昼寝してたんじゃないの？」

「怖い夢みたー」

「それは大変だったね……大丈夫、お母さんが側に居るから」

瞳に涙を浮かべながら訴えて来る娘に青髪の女性は相変わらずの無表情で受け応えるが、ポンポンと彼女の頭を撫でてやったりと優しい素振りも見せる。そして安心させるように優しい声を掛けると、彼女を持ち上げて自分の膝の上に乗せた。

「じゃあ……私は今日はこのくらいで」

「うん、また来て良いよ……まあ、貴方が知りたい事は教えられないと思うけど」

これ以上はお邪魔かなと思つたギルド職員の女性はお茶を飲み干すとそう言つて席から立ち上がり、お辞儀をした。青髪の女性も娘の頭を撫でながら空いているもう片方

の手を振って彼女を見送った。

ギルド職員の女性が去った後、青髪の少女は瞳をコロコロと転がしながら母親の事を見上げた。まん丸な瞳で見つめられた青髪の女性はふと首を傾げ、どうしたの？と娘の事を見つめ返した。

「あのねー、シツキーがねー。また新しい玩具くれたの。みてみてー」

「へえ……凄いな。紙を折って作ったの？本当、あいつは器用だね……」

娘の掌から出された鳥の形に折られた紙を見て青髪の女性は感心したようにそれを持ち上げた。

実によく丁寧に折られている。本当にどうやってあのブヨブヨな皮膚でこんな器用が出来るのやら、と彼女は疑問に思った。

青髪の女性は小さく笑みを作る。十年前のあの後何があったのかは誰も知らない。あの後、色欲のフルフルが無事だった事は自分と漆黒の女の子しか知らない。これは三人だけの共有の秘密であった。

青髪の女性は優しく娘の頭を撫でる。自分の大切な宝物。母親に成長した彼女の笑顔は、とても優しいものだった。



「なに君、またあの女の娘に折り紙教えてたの？」

とある森林で一人と一匹が歩いてた。一人は漆黒のドレスを身に纏った赤髪の女性。言わずもがな彼女であつた。彼女もまた十年という月日によつて成長し、すっかり大人となつていた。更にいやらしい体つきになり、美女と言つても過言では無い姿になつてゐる。ただし以前のように武器は持たず、鎧も着ていない。今は単なる旅人の彼女は相変わらず黒が好きのため、漆黒のドレスで身を包んでいた。ついでにティアラも付けている。

(別に良いだろ。時々しか会えないんだし……)

対してもう一人は、色欲のフルフルと呼ばれるあの少年であつた。

彼は漆黒の女性の指摘に対してグルグルと唸り声を上げた。その言葉だけで意思が伝わつたのか、漆黒の女性はやれやれと言わんばかりに首を振つて呆れたようにため息を吐いた。

十年前、ミラボレアスと共に落下した少年は何とかミラボレアスを下敷きにする事によつて事なきを得た。だがそれでも落石などで身体を痛めつけてしまい、ある程度負傷した彼は森の中でしばらく身体を休める事を余儀なくされた。

ギルド職員の調査から身を隠しながら、大好きなエッチな事も我慢し、彼は珍しく療

養に集中した。そして途中で合流した漆黒の女性と共に、今はこうして当ての無い放浪の旅をするようになっていた。

今回はたまたま近くを通りかかった為、かつてのフルフル装備の女の子と、その娘に会いに来ていたのだ。

ちなみに「シツキー」というのは娘が勝手に付けたあだ名で、流石に色欲という言葉は不味いだろうと青髪の女性が判断し、娘にそう呼ばせるようにしたのだ。

(さーて、それじゃそろそろ腹ごなしに誰か可愛子ちゃんでも襲おっかなー)

「あ、エッチな顔してる。本相変わらずだねー、君は」

少年が醜い顔を歪ませながら良からぬ事を考えると、漆黒の女性は長い付き合いの為、彼が何を考えているのかすぐに分かった。

またいつものエッチな事か、とため息を吐き、彼女はジト目で少年の事を見る。だが少年は気にしていないように歩き出し、女性もその後を追った。

長い長い戦いを終えた少年は傷つき、様々な物を失った。主にプライドとかメンタル的な物を。だがそれでも得た物があつた。それはエロがどれだけ素晴らしい物かという改めて気付かされたものであつた。

エロは素晴らしい。可愛い女の子があられもない姿になり、嫌がりながら感じてる姿はまさに女神そのもの。故に少年は女の子を襲う。そこに女の子が居るから。



彼の戦いは、まだまだ始まったばかりだった。